堂床遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

２００１年３月

路公団中国支社
島根県教育委員会

堂　床　遺　跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

2001年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

堂床遺跡出土砥石

堂床遺跡出土碧玉

堂床遺跡出土瑪瑙

堂床遺跡出土水晶

堂床遺跡出土緑泥片岩

57－11

27－ 7

26－ 9
158－ 8

序

中国横断道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められてまいりました。このうち三刀屋～松江間につきましては、平成９年３月から鋭意建設を推進してまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を行ってまいりました。

本報告書は、松江工事事務所担当区域である玉湯町における堂床遺跡の発掘調査の記録であります。この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代によみがえらせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査及び本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成13年３月

日本道路公団中国支社松江工事事務所

所長　村田一廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社から委託を受けて、中国横断自動車道尾道・松江線（三刀屋～玉湯間）の建設工事に伴う文化財発掘調査を平成8年度から実施しています。

本報告書は、平成9年度に実施した調査予定地内の玉湯町林地区に位置する堂床遺跡の調査結果をとりまとめたものです。

堂床遺跡では、古墳時代の玉作工房跡や住居跡等の多くの遺構を検出しました。また、出土遺物では、碧玉を加工した管玉・勾玉の未成品をはじめとして、水晶や滑石を石材とした玉類の未成品を多数確認することができました。その結果、玉生産の製作過程や居住地域と工房地域の位置関係もうかがい知ることができました。このほか、多くの土器の中に朝鮮半島系の土器も見つけることができ、大陸との文化の交流があったことをしのばせます。

本書が郷土の文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待いたしますとともに、埋蔵文化財の保護・啓発に対して今後とも格別の御理解をいただきますようお願いいたします。

おわりに、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御協力いただきました地元の皆様、日本道路公団、玉湯町教育委員会をはじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会

教育長　山崎悠雄

例　　言

1　本書は、日本道路公団広島建設局からの委託を受けて、島根県教育委員会が平成9年度と平成11年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線（三刀屋～玉湯間）の建設工事に伴う堂床遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査組織は次の通りである。

〈平成9年度〉

【事務局】

勝部　昭（文化財課長）、穴道正年（埋蔵文化財調査センター長）、福田　敏（主査）

島地徳郎（課長補佐）、古崎蔵治（課長補佐）、澁谷昌宏（企画調整係主事）

【調査員】

川原和人（文化財課主幹・調査第2係長）、宮本正保（同主事）、是田　敦（同主事）

東山信治（同主事）、安達和隆（同教諭兼主事）、橘　弘章（同教諭兼主事）

亀井彰子（同講師兼主事）、大西憲和（同臨時職員）、中岡宏樹（同臨時職員）

沙魚川聡子（同臨時職員）、原　和美（同臨時職員）、越野幹司（同臨時職員）

池淵　茂（同臨時職員）

【遺物整理員】

高橋幸江、曽田葉子、川角博子、川原知恵、新田訓正

【調査指導】（敬称略）

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

池田満雄（島根県文化財保護審議委員）

〈平成11年度〉

【事務局】

穴道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、秋山　実（同総務課長）

松本岩雄（同調査課長）、今岡　宏（同総務係長）

【報告書作成】

是田　敦（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター主事）

橘　弘章（同教諭兼文化財保護主事）、池田哲也（同教諭兼主事）、勝部悠美（同臨時職員）

若佐裕子（遺物整理員）、田中道子（遺物整理員）、古岡朋子（遺物整理員）

矢内敏江（遺物整理員）、松野美小恵（遺物整理員）

3　発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注ほか）については、日本道路公団広島建設局松江工事事務所・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から㈱中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

【現場担当】　布村幹夫（現場事務所長）、籏　俊治（技術員）

【事務担当】　与倉明子

4　報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益な御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

武末純一(福岡大学人文学部教授)、高須　晃(島根大学総合理工学部教授)

勝部　衛(出雲玉作資料館長)、片岡詩子(出雲玉作資料副館長)

穴澤義功(たたら研究会員)、大谷晃一(松江北高等学校)

米田克彦(岡山県埋蔵文化財調査センター主事)、大坪志子(熊本大学文学部助手)

5　挿図中の方位は、測量法による平面直角第Ⅲ座標系のX軸方向を指す。従って、磁北より7°55′、真北より0°21′東の方向を指す。レベル高は海抜高を指す。

5　本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を利用した。

6　本書で使用した遺構記号は次の通りである。

P…ピット　SI…竪穴住居跡　SB…掘立柱建物跡　SK…土壙　SD…溝状遺構

SX…その他

7　本書に掲載した遺物の写真図版内の数字は、○−□(○・□共に数字)の場合は○が挿図番号、□が挿図内の番号を表し、数字のみの場合は遺物の整理番号を表す。

8　本書に掲載した遺物の実測、浄写、写真撮影は以下の者が行った。

【実測・製図】　是田　敦、橘　弘章、池田哲也、勝部悠美、林健亮、中川　寧、亀井彰子、沙魚川聡了、原　和美、田中道了、若佐祐子、吉岡朋子、矢内敏江、松野美小恵

【浄　写】　田中道子、若佐裕了、吉岡朋子、勝部悠美

【写真撮影】　是田　敦、橘　弘章、池田哲也

9　本書の執筆は是田　敦と橘　弘章が行った。

10　本遺跡出土資料及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本 文 目 次

第1章　経緯と経過 ……（橘　弘章）…… 1

第2章　位置と環境 ……（橘　弘章）…… 2

第3章　調査の経過 ……（是田　敦）…… 7

第4章　遺構と遺物 ……（是田　敦）

第1節　遺跡の概要 …… 13

第2節　遺構と遺構出土遺物 …… 13

第3節　遺構に伴わない遺物 …… 136

第5章　考　察 ……（是田　敦）

第1節　堂床遺跡出土須恵器の編年 …… 218

第2節　堂床遺跡の土生産 …… 226

第3節　堂床遺跡の変遷 …… 241

第4節　堂床遺跡の位置づけ …… 253

挿 図 目 次

第1図　堂床遺跡の位置 …… 2
第2図　調査地と周辺の遺跡 …… 4
第3図　堂床遺跡の位置と周辺の地形 …… 7
第4図　堂床遺跡調査前地形測量図 …… 8
第5図　トレンチ出土遺物実測図 …… 9
第6図　堂床遺跡調査後地形測量図及び遺構配置図 …… 11～12
第7図　ＳＸ01実測図 …… 14
第8図　ＳＸ01出土遺物実測図(1) …… 15
第9図　ＳＸ01出土遺物実測図(2) …… 16
第10図　ＳＢ01焼土面土層図 …… 17
第11図　ＳＢ01出土遺物実測図 …… 17
第12図　ＳＢ01実測図 …… 18
第13図　ＳＢ02～04実測図 …… 20
第14図　ＳＢ02（1～7）・ＳＢ04（8～11）出土遺物実測図 …… 21
第15図　ＳＢ05実測図(1) …… 23
第16図　ＳＢ05実測図(2) …… 24
第17図　ＳＢ05暖炉状遺構実測図 …… 25
第18図　ＳＢ05出土遺物実測図(1) …… 26
第19図　ＳＢ05出土遺物実測図(2) …… 27
第20図　ＳＢ05出土遺物実測図(3) …… 28
第21図　ＳＢ05出土遺物実測図(4) …… 29
第22図　ＳＢ06・07実測図 …… 30
第23図　ＳＢ06実測図 …… 31
第24図　ＳＢ06焼土面１土層図 …… 32
第25図　ＳＢ06出土遺物実測図(1) …… 32
第26図　ＳＢ06出土遺物実測図(2) …… 33
第27図　ＳＢ06出土遺物実測図(3) …… 34
第28図　ＳＢ07実測図 …… 35
第29図　ＳＢ07出土遺物実測図 …… 35
第30図　ＳＢ09出土遺物実測図 …… 36
第31図　ＳＢ08・09実測図 …… 37
第32図　ＳＢ08出土遺物実測図(1) …… 38
第33図　ＳＢ08出土遺物実測図(2) …… 39
第34図　ＳＢ10実測図 …… 39
第35図　ＳＢ10出土遺物実測図(1) …… 40

第36図　ＳＢ10出土遺物実測図(2) …… 41
第37図　ＳＢ10出土遺物実測図(3) …… 42
第38図　ＳＢ11実測図 …… 43
第39図　ＳＢ11出土遺物実測図 …… 43
第40図　ＳＢ12焼土面とPit１～４の上層図 …… 44
第41図　ＳＢ12実測図 …… 45～46
第42図　ＳＢ12出土遺物実測図(1) …… 47
第43図　ＳＢ12出土遺物実測図(2) …… 48
第44図　ＳＢ13実測図 …… 48
第45図　ＳＢ14出土遺物実測図 …… 49
第46図　ＳＢ14実測図 …… 49
第47図　ＳＢ15・16実測図 …… 50
第48図　ＳＢ15出土遺物実測図(1) …… 50
第49図　ＳＢ15出土遺物実測図(2) …… 51
第50図　ＳＢ17実測図 …… 52
第51図　ＳＢ17出土遺物実測図(1) …… 53
第52図　ＳＢ17出土遺物実測図(2) …… 53
第53図　ＳＢ18～20実測図 …… 54
第54図　ＳＢ20実測図 …… 55
第55図　ＳＢ20出土遺物実測図(1) …… 56
第56図　ＳＢ20出土遺物実測図(2) …… 57
第57図　ＳＢ20出土遺物実測図(3) …… 58
第58図　ＳＢ20出土遺物実測図(4) …… 58
第59図　ＳＢ19遺物出土状況 …… 59
第60図　ＳＢ19　Pit　8・14・9・15上層図 …… 59
第61図　ＳＢ19－Ａ実測図 …… 60
第62図　ＳＢ19－Ｂ実測図 …… 61
第63図　ＳＢ19－Ｃ実測図 …… 62
第64図　ＳＢ19出土遺物実測図(1) …… 63
第65図　ＳＢ19出土遺物実測図(2) …… 64
第66図　ＳＢ19出土遺物実測図(3) …… 64
第67図　ＳＢ19出土遺物実測図(4) …… 65
第68図　ＳＢ18出土遺物実測図(1) …… 66
第69図　ＳＢ18出土遺物実測図(2) …… 67
第70図　ＳＢ18出土遺物実測図(3) …… 68
第71図　ＳＢ18出土遺物実測図(4) …… 69
第72図　ＳＢ18出土遺物実測図(5) …… 69
第73図　ＳＢ22出土遺物実測図(1) …… 70

第74図　ＳＢ21・22実測図 …… 71～72
第75図　ＳＢ22出土遺物実測図(2) …… 73
第76図　ＳＢ22出土遺物実測図(3) …… 74
第77図　ＳＢ22出土遺物実測図(4) …… 74
第78図　ＳＢ21出土遺物実測図(1) …… 75
第79図　ＳＢ21出土遺物実測図(2) …… 75
第80図　ＳＢ21出土遺物実測図(3) …… 76
第81図　ＳＢ23実測図 …… 77
第82図　ＳＢ23出土遺物実測図 …… 78
第83図　ＳＢ24～27・53・54実測図及び焼土面十層図 …… 79～80
第84図　ＳＢ27実測図 …… 81
第85図　ＳＢ24出土遺物実測図(1) …… 84
第86図　ＳＢ24・25出土遺物実測図 …… 85
第87図　ＳＢ26・27・53・54出土遺物実測図 …… 86
第88図　ＳＢ24出土遺物類実測図(2) …… 86
第89図　ＳＢ24出土遺物実測図(3) …… 87
第90図　ＳＢ28実測図 …… 87
第91図　ＳＢ28出土遺物実測図(1) …… 88
第92図　ＳＢ28出土遺物実測図(2) …… 88
第93図　ＳＢ29実測図 …… 89
第94図　ＳＢ29出土遺物実測図 …… 90
第95図　ＳＢ30実測図 …… 90
第96図　ＳＢ30出土遺物実測図(1) …… 91
第97図　ＳＢ30出土遺物実測図(2) …… 91
第98図　ＳＢ31出土遺物実測図 …… 92
第99図　ＳＢ31実測図 …… 93
第100図　ＳＢ32実測図 …… 94
第101図　ＳＢ32出土遺物実測図 …… 94
第102図　ＳＢ33・34実測図 …… 95
第103図　ＳＢ33出土遺物実測図 …… 96
第104図　ＳＢ35出土遺物実測図 …… 96
第105図　ＳＢ35実測図 …… 97
第106図　ＳＢ36実測図 …… 98
第107図　ＳＢ35・ＳＢ36出土遺物実測図 …… 99
第108図　ＳＢ37実測図 …… 99
第109図　ＳＢ38～40実測図 …… 101
第110図　ＳＢ38・39出土遺物実測図 …… 103
第111図　ＳＢ39出土遺物実測図 …… 104

第112図　ＳＢ41実測図 …… 105
第113図　ＳＢ41出土遺物実測図(1) …… 106
第114図　ＳＢ41出土遺物実測図(2) …… 106
第115図　ＳＢ41出土遺物実測図(3) …… 107
第116図　ＳＢ41出土遺物実測図(4) …… 108
第117図　ＳＢ42実測図 …… 109
第118図　ＳＢ43～49実測図 …… 110
第119図　ＳＢ49実測図 …… 111
第120図　ＳＢ48実測図 …… 113
第121図　ＳＢ48出土遺物実測図(1) …… 113
第122図　ＳＢ48出土遺物実測図(2) …… 114
第123図　ＳＢ47実測図 …… 115
第124図　ＳＢ47出土遺物実測図(1) …… 116
第125図　ＳＢ47出土遺物実測図(2) …… 116
第126図　ＳＢ45・46実測図 …… 116
第127図　ＳＢ46出土遺物実測図 …… 117
第128図　ＳＢ45出土遺物実測図(1) …… 118
第129図　ＳＢ45出土遺物実測図(2) …… 118
第130図　ＳＢ43・44実測図 …… 119
第131図　ＳＢ44出土遺物実測図(1) …… 119
第132図　ＳＢ44出土遺物実測図(2) …… 120
第133図　ＳＢ44出土遺物実測図(3) …… 121
第134図　ＳＢ44出土遺物実測図(4) …… 121
第135図　ＳＢ44出土遺物実測図(5) …… 121
第136図　ＳＢ43出土遺物実測図(1) …… 123
第137図　ＳＢ43出土遺物実測図(2) …… 124
第138図　ＳＢ43出土遺物実測図(3) …… 125
第139図　ＳＢ43出土遺物実測図(4) …… 125
第140図　ＳＢ50・51実測図 …… 126
第141図　ＳＢ50出土遺物実測図(1) …… 127
第142図　ＳＢ50出土遺物実測図(2) …… 127
第143図　ＳＢ52実測図 …… 128
第144図　ＳＢ52出土遺物実測図 …… 128
第145図　東区東側上段ピット群実測図 …… 129
第146図　東区東側上段ピット群出土遺物実測図 …… 129
第147図　東区西側中下段ピット群実測図 …… 131～132
第148図　東区中央中段ピット群実測図 …… 133
第149図　東区中央中段ピット群出土遺物実測図 …… 134

第150図　東区西側上段ピット群実測図 …… 134
第151図　ＳＫ01出土遺物実測図 …… 135
第152図　東区包含層出土遺物実測図(1) …… 138
第153図　東区包含層出土遺物実測図(2) …… 139
第154図　東区包含層出土遺物実測図(3) …… 140
第155図　東区包含層出土遺物実測図(4) …… 141
第156図　東区包含層出土遺物実測図(5) …… 142
第157図　西区包含層出土遺物実測図(1) …… 143
第158図　東西包含層出土遺物実測図 …… 144
第159図　東区包含層出土遺物実測図(6) …… 145
第160図　東区包含層出土遺物実測図(7) …… 146
第161図　東区包含層出土遺物実測図(8) …… 147
第162図　東区包含層出土遺物実測図(9) …… 148
第163図　西区包含層出土遺物実測図(2) …… 149
第164図　西区包含層出土遺物実測図(3) …… 150
第165図　包含層出土遺物実測図 …… 151
第166図　石英の原石と荒割 …… 229
第167図　水晶製玉類・緑泥片岩製玉類の製作工程 …… 233～234
第168図　碧玉製玉類の製作工程 …… 235～236
第169図　瑪瑙製玉類の製作工程 …… 237～238
第170図　堂床遺跡の変遷(1) …… 246
第171図　堂床遺跡の変遷(2) …… 247
第172図　堂床遺跡の変遷(3) …… 248
第173図　堂床遺跡の変遷(4) …… 249

図　版　目　次

巻頭図版１　堂床遺跡出土凝灰石
巻頭図版２　堂床遺跡出土碧玉
巻頭図版３　堂床遺跡出土瑪瑙
巻頭図版４　堂床遺跡出土水晶
巻頭図版５　堂床遺跡出土緑泥片岩
巻頭図版６
図版１　堂床遺跡全景
図版２　堂床遺跡上空から北方を望む　向こうは宍道湖
図版３　堂床遺跡上空から東方を望む　向こうは玉造温泉街

第112図　ＳＢ41実測図 …… 105
第113図　ＳＢ41出土遺物実測図(1) …… 106
第114図　ＳＢ41出土遺物実測図(2) …… 106
第115図　ＳＢ41出土遺物実測図(3) …… 107
第116図　ＳＢ41出土遺物実測図(4) …… 108
第117図　ＳＢ42実測図 …… 109
第118図　ＳＢ43～49実測図 …… 110
第119図　ＳＢ49実測図 …… 111
第120図　ＳＢ48実測図 …… 113
第121図　ＳＢ48出土遺物実測図(1) …… 113
第122図　ＳＢ48出土遺物実測図(2) …… 114
第123図　ＳＢ47実測図 …… 115
第124図　ＳＢ47出土遺物実測図(1) …… 116
第125図　ＳＢ47出土遺物実測図(2) …… 116
第126図　ＳＢ45・46実測図 …… 116
第127図　ＳＢ46出土遺物実測図 …… 117
第128図　ＳＢ45出土遺物実測図(1) …… 118
第129図　ＳＢ45出土遺物実測図(2) …… 118
第130図　ＳＢ43・44実測図 …… 119
第131図　ＳＢ44出土遺物実測図(1) …… 119
第132図　ＳＢ44出土遺物実測図(2) …… 120
第133図　ＳＢ44出土遺物実測図(3) …… 121
第134図　ＳＢ44出土遺物実測図(4) …… 121
第135図　ＳＢ44出土遺物実測図(5) …… 121
第136図　ＳＢ43出土遺物実測図(1) …… 123
第137図　ＳＢ43出土遺物実測図(2) …… 124
第138図　ＳＢ43出土遺物実測図(3) …… 125
第139図　ＳＢ43出土遺物実測図(4) …… 125
第140図　ＳＢ50・51実測図 …… 126
第141図　ＳＢ50出土遺物実測図(1) …… 127
第142図　ＳＢ50出土遺物実測図(2) …… 127
第143図　ＳＢ52実測図 …… 128
第144図　ＳＢ52出土遺物実測図 …… 128
第145図　東区東側上段ピット群実測図 …… 129
第146図　東区東側上段ピット群出土遺物実測図 …… 129
第147図　東区西側中下段ピット群実測図 …… 131～132
第148図　東区中央中段ピット群実測図 …… 133
第149図　東区中央中段ピット群出土遺物実測図 …… 134

図版４　調査前の堂床遺跡（西区）
調査前の堂床遺跡（東区）
図版５　ＳＸ01　完掘状況
ＳＸ01　土層
図版６　ＳＢ01　焼土検出状況
図版７　ＳＢ01　完掘状況
図版８　ＳＢ01　焼土１　土層
ＳＢ01　焼土２　土層
ＳＢ01　焼土３　土層
図版９　ＳＢ05　加工段と暖炉状遺構
ＳＢ05　完掘状況
図版10　ＳＢ05　暖炉状遺構正面
ＳＢ05　暖炉状遺構左側面
ＳＢ05　暖炉状遺構右側面
図版11　ＳＢ05　暖炉状遺構煙道検出状況
ＳＢ05　暖炉状遺構甑出土状況
ＳＢ05　暖炉状遺構焼土と炭化物
図版12　ＳＢ06・ＳＢ07　完掘状況
図版13　ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ04　完掘状況
ＳＢ08・ＳＢ09　完掘状況
図版14　ＳＢ10　完掘状況
ＳＢ11　完掘状況
図版15　ＳＢ12　完掘状況
図版16　ＳＢ13　完掘状況
ＳＢ14　完掘状況
図版17　ＳＢ15・ＳＢ16　完掘状況
ＳＢ15・ＳＢ16　上層
図版18　ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ20　完掘状況
図版19　ＳＢ18　縦溝　完掘状況
ＳＢ18　縦溝　上層
図版20　ＳＢ18　玉類出土状況
ＳＢ18　玉類出土状況
図版21　ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ20　土層その１
ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ20　土層その２
ＳＢ18・ＳＢ19・ＳＢ20　土層その３
図版22　ＳＢ18　遺物出土状況
ＳＢ18　遺物出土状況
ＳＢ18　砥石出土状況

図版23　ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＢ56　完掘状況
図版24　ＳＢ21・ＳＢ22　上層
ＳＢ23・ＳＢ50・ＳＢ51　完掘状況
図版25　ＳＢ24　遺物出土状況
図版26　ＳＢ24～ＳＢ27・ＳＢ53・ＳＢ54　完掘状況
ＳＢ24～ＳＢ27・ＳＢ53・ＳＢ54　上層Ｃ
図版27　ＳＢ31　完掘状況
図版28　ＳＢ28　完掘状況
ＳＢ29　完掘状況
図版29　ＳＢ26　完掘状況
ＳＢ30　完掘状況
ＳＢ33・ＳＢ34　完掘状況
図版30　ＳＢ32　完掘状況
ＳＢ35　完掘状況
ＳＢ36　完掘状況
図版31　ＳＢ38・ＳＢ39・ＳＢ40　完掘状況
ＳＢ41　完掘状況
図版32　ＳＢ43～ＳＢ49　完掘状況
図版33　ＳＢ43・ＳＢ44・ＳＢ45　完掘状況
ＳＢ43・ＳＢ44・ＳＢ45　玉類出土状況
図版34　ＳＢ43・ＳＢ44・ＳＢ47　完掘状況
ＳＢ43～ＳＢ49　土層
図版35　ＳＢ52　完掘状況
図版36　東区東側上段ピット群
東区 Pit242
図版37　東区西側　空より
図版38　ＳＢ41　ピット群上段
図版39　ＳＫ01　完掘状況
ＳＫ01　土層
図版40　現地説明会
堂床遺跡から宍道湖を望む
図版41　トレンチ、ＳＸ01　出土土器
図版42　ＳＸ01、ＳＢ01・02　出土土器
図版43　ＳＢ01・02・04・05　出土土器
図版44　ＳＢ05　出土土器
図版45　ＳＢ05　出土土器
図版46　ＳＢ05　出土土器
図版47　ＳＢ06・07・08　出土土器

図版48　ＳＢ09・10・11　出土土器
図版49　ＳＢ12・14・15・17　出土土器
図版50　ＳＢ18・19　出土土器
図版51　ＳＢ19・20　出土土器
図版52　ＳＢ21・22・23　出土土器
図版53　ＳＢ24　出土土器
図版54　ＳＢ24・25　出土土器
図版55　ＳＢ25・26・27・53・54　出土土器
図版56　ＳＢ28・29・30　出土土器
図版57　ＳＢ31・33・35　出土土器
図版58　ＳＢ39・41・43　出土土器
図版59　ＳＢ43　出土土器
図版60　ＳＢ44・45・47・48・50・52　東側ピット群出土土器
図版61　東区中央中段ピット群、ＳＫ01　出土土器
図版62　東区包含層出土土器（１）
図版63　東区包含層出土土器（２）
図版64　東区包含層出土土器（３）
図版65　東区包含層出土土器（４）
図版66　東区包含層出土土器（５）
図版67　東区包含層出土土器（６）
図版68　西区包含層出土土器（１）
図版69　西区包含層出土土器（２）
図版70　西区包含層出土土器（３）
図版71　ＳＢ01　水晶
図版72　ＳＢ01　碧玉
　　ＳＢ01　瑪瑙
　　ＳＢ01　緑泥片岩
図版73　ＳＢ01　緑泥片岩
　　ＳＢ02　水晶・ＳＢ03　瑪瑙
図版74　ＳＢ05　水晶と石英
図版75　ＳＢ05　水晶と石英
図版76　ＳＢ05　水晶と石英
　　ＳＢ05　碧玉
図版77　ＳＢ05　碧玉
　　ＳＢ05　瑪瑙
図版78　ＳＢ05　瑪瑙
図版79　ＳＢ05　瑪瑙
図版80　ＳＢ05　瑪瑙

	SB05 緑泥片岩
図版81	SB06 玉類
図版82	SB06 水晶と石英
	SB06 水晶
図版83	SB06 水晶
	SB06 碧玉
図版84	SB06 碧玉
	SB06 瑪瑙
	SB06 緑泥片岩
図版85	SB07 工具類と玉類
	SB07 水晶
	SB07 水晶・瑪瑙
図版86	SB07 碧玉
	SB07 瑪瑙
	SB07 緑泥片岩
図版87	SB08 玉類
	SB08 碧玉
	SB08 瑪瑙
図版88	SB09 石英・瑪瑙
	SB09 水晶
	SB09 瑪瑙
	SB10 玉類
図版89	SB10 水晶と石英
	SB10 水晶
	SB10 碧玉
図版90	SB10 瑪瑙
	SB10 緑泥片岩
図版91	SB11 石英
	SB11 水晶と石英
	SB11 碧玉
図版92	SB11 瑪瑙
	SB12 玉類
	SB12 水晶と石英
図版93	SB12 碧玉
	SB12 瑪瑙
	SB12 緑泥片岩
図版94	SB15 玉類
	SB15 水晶

SB15 碧玉
図版95 SB15 瑪瑙
SB15 緑泥片岩
図版96 SB17 玉類
SB17 水晶と石英
SB17 碧玉
図版97 SB17 瑪瑙
SB17 緑泥片岩
図版98 SB18 玉類
SB18 水晶と石英
図版99 SB18 水晶
図版100 SB18 水晶
SB18 碧玉
図版101 SB18 碧玉
図版102 SB18 瑪瑙
SB18 緑泥片岩
図版103 SB18 緑泥片岩
SB19 玉類
SB19 水晶
図版104 SB19 水晶
SB19 碧玉
SB19 瑪瑙
図版105 SB19 緑泥片岩
SB20 玉類
SB20 水晶と石英
図版106 SB20 碧玉
SB20 瑪瑙
SB20 緑泥片岩
図版107 SB21 玉類
SB21 水晶と石英
SB21 碧玉
図版108 SB22 玉類
SB22 水晶と石英
SB22 水晶
図版109 SB22 碧玉
SB22 瑪瑙
図版110 SB22 緑泥片岩
SB23 水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩

図版111　ＳＢ24　水晶と石英
　　ＳＢ24　碧玉
　　ＳＢ24　瑪瑙
図版112　ＳＢ24　緑泥片岩
　　ＳＢ28　玉類
　　ＳＢ29　玉類
図版113　ＳＢ30　玉類
　　ＳＢ31　玉類
　　ＳＢ32　玉類
　　ＳＢ33　玉類
図版114　ＳＢ35　玉類
　　ＳＢ36　碧玉
　　ＳＢ37　玉類
　　ＳＢ38　玉類
図版115　ＳＢ38　玉類
　　ＳＢ38　緑泥片岩
　　ＳＢ39　瑪瑙
　　ＳＢ39　玉類
図版116　ＳＢ41　玉類
　　ＳＢ41　水晶と石英
　　ＳＢ41　碧玉
図版117　ＳＢ41　玉類
　　ＳＢ42　水晶・碧玉・石英
　　ＳＢ43　玉類
図版118　ＳＢ43　水晶
　　ＳＢ43　水晶と石英
　　ＳＢ43　碧玉
図版119　ＳＢ43　碧玉
　　ＳＢ43　瑪瑙・緑泥片岩
　　ＳＢ44　玉類
図版120　ＳＢ44　水晶と石英
　　ＳＢ44　碧玉・瑪瑙
　　ＳＢ44　緑泥片岩
図版121　ＳＢ45　玉類
　　ＳＢ45　水晶と石英
　　ＳＢ45　碧玉・瑪瑙・緑泥片岩
図版122　ＳＢ46　玉類
　　ＳＢ46　瑪瑙・水晶と石英・水晶

ＳＢ46　碧玉
図版123　ＳＢ46　緑泥片岩
ＳＢ47　玉類
ＳＢ47　水晶・石英
図版124　ＳＢ47　玉類
ＳＢ48　玉類
ＳＢ48　水晶・碧玉
図版125　ＳＢ48　玉類
ＳＢ50　玉類
図版126　東区包含層　水晶（大）
東区包含層　水晶
図版127　東区包含層　水晶
東区包含層　石英・水晶
東区包含層　碧玉（大）
図版128　東区包含層　碧玉
図版129　東区包含層　碧玉
東区包含層　玉類
図版130　東区包含層　瑪瑙・緑泥片岩
東区包含層　瑪瑙
東区包含層　緑泥片岩
図版131　東区包含層　緑泥片岩
図版132　東区包含層　水晶と石英
東区包含層　碧玉
東区包含層　瑪瑙・緑泥片岩
図版133　西区包含層　水晶と石英
図版134　西区包含層　水晶
西区包含層　碧玉・瑪瑙
西区包含層　碧玉
図版135　西区包含層　碧玉
西区包含層　瑪瑙・ハンマー
西区包含層　緑泥片岩
図版136　東西包含層　玉類
図版137　ＳＸ01・ＳＢ05・09　出土砥石・ハンマー
図版138　ＳＢ10・19・20・21・24　出土ハンマー・砥石・鉄製品
図版139　ＳＢ24・28・35・36・38・39・41　出土砥石・台石・ナイフ型石器
図版140　ＳＢ41・43・44・50　出土砥石・台石・ハンマー
図版141　ハンマー
砥石（珪質片岩）

砥石（紅簾片岩）
図版142　遺構内出土ハンマー・砥石
図版143　東区包含層出土砥石
図版144　東区・西区包含層出土砥石
図版145　東区・西区包含層出土ハンマー・砥石
図版146　東区・西区包含層出土ハンマー・砥石
図版147　東区・西区包含層出土砥石
図版148　東区・西区包含層・トレンチ出土砥石・ハンマー・その他
図版149　常床遺跡出土工具・鉄滓・鉄滓
図版150　ＳＢ20　鉄製品
ＳＢ06　水晶三輪玉
西区包含層　紫水晶
図版151　水晶製玉類（第52図－２）敲打未成品　顕微鏡写真
図版152　水晶製玉類（第52図－２）荒磨き未成品　顕微鏡写真
図版153　水晶製玉類（第52図－２）荒磨き未成品　顕微鏡写真
図版154　鉄製品等Ｘ線写真

第1章　経緯と経過

中国横断自動車道尾道松江線は、松江都市圏と山陽地方を結び、中国縦貫自動車道、山陽自動車道に接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進するとともに、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に事業の計画がなされた。

この計画に伴う埋蔵文化財の調査については、平成4年1月に建設省道路局長から日本道路公団に対して松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、その一環として同年4月17日付で、島根県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。調査体制が十分に整わないため開始は遅れたが平成6年3月になって分布調査を実施し、全体の9割あまりを踏査した。

堂床遺跡はこの分布調査が行われるまでは遺跡として認識されていなかった。このときの分布調査によると、現状地形が狭い平坦地をもつ尾根と緩斜面となっていること、そして、須恵器片や碧玉・瑪瑙片を表採したことから当地は玉作工房跡であると想定された。

このような調査結果をふまえ同年の6月と8月に道路公団と調査の打ち合わせを行った。この打ち合わせでは、今回の分布調査が500m幅を対象にしているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成7年4月に完了し、4月28日付で公団へ回答した。

同年4月には日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、平成8年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や排土排水処理等の調査環境整備について協議を行った。その結果、平成8年度から宍道町に存在する遺跡の発掘調査に着手することになった。

調査を円滑に進めるために、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事等の調査補助業務を㈱中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、㈱中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成8年3月26日に交わし、本格的に調査の準備に入ることとなった。

これらの協議と並行するかたちで、10月には調査対象地の再踏査を行い宍道町下倉～弘長寺間には石切場10カ所、集落跡、古墳10カ所の計20遺跡が存在していることが判明し、調査対象面積が50,150㎡におよぶことがわかった。

そこで、平成8年度には、八束郡宍道町大谷Ⅰ遺跡、野津原Ⅱ遺跡、勝負廻Ⅰ遺跡、来待石石切場遺跡群などの調査を実施した。平成9年度には、宍道インターチェンジを挟む宍道町鏡と白石から同町佐々布にかけての発掘調査を行うことになった。ただし、このルート上にある女夫岩遺跡については、トンネル工法により遺跡保存が決定された。また、玉湯町内では、堂床遺跡を含む林村から玉造までの間の調査を行った。それらの調査面積をあわせると、42,730㎡となった。

八束郡宍道町内では、山守免遺跡、竹ノ崎遺跡、上野Ⅰ遺跡の3遺跡の本調査と、他7遺跡の試掘調査を行った。上野Ⅰ遺跡の古墳からは仿製斜縁神獣鏡や大刀、槍、玉など豊富な遺物が出土した。八束郡玉湯町では、堂床遺跡、岩屋遺跡、平床Ⅱ遺跡の3遺跡の本調査と、他5遺跡の試掘調査を行った。

第2章　位置と環境

堂床遺跡は、宍道湖南岸から約1㎞南下した島根県八束郡玉湯町林村に所在する。

当遺跡が立地する場所は、室山から北に派生してくる低丘陵の斜面及び谷部にあたる。当遺跡の標高は50m～70mであり北方に宍道湖を一望することができる。調査前は竹林や畑地として利用されていた場所である。この辺り一帯は、低丘陵が多く、丘陵間の谷間や湖岸にわずかに平坦地が存在し、広大な平野はみられない。現在も狭小の平坦地に集落が作られている。また、当遺跡の西方には、玉湯川をはさんで、古くから玉類の石材である碧玉・瑪瑙を産出する花仙山がある。そして、玉湯川支流の湯田川上流には、水晶の産出地がある。このような地理的要因から、玉湯町は、古代において玉生産に適した素地的環境に恵まれた地域であったといえる。

当遺跡の所在する「林」の地名は、『出雲国風土記』の中で「拝志郷」と記され、その起源を知ることができる。所造天下（アメノシタツクラシ）大神命が越の八口を平定しようと出かけたとき、この場所に樹林が生い茂っていたので「吾が御心の波夜志（ハヤシ）」といわれたことから生じた地名としている。その地名表現「林」の字を用いていたが、神亀三年の詔によって拝志に改められた。さらにこの地には、正倉があったとされている。現在のところ、拝志郷の比定地は玉湯町から宍道町来待の範囲と推定されている。また、玉湯町には、この拝志郷の東に忌部神戸があり、現在の玉造温泉が禊ぎの場所として当時存在していたことがわかる。また、朝廷へ献上する玉の製作にあたり、祭祀を行う忌部氏がいたと思われる。

さて、当遺跡の周辺をみてみると、島根県内においても有数の遺跡密集地域である。花仙山周辺は、古代における玉の一大産地として全国的にも知られており、多数の玉作遺跡が分布している。また、玉湯川流域には、古墳も多数分布する。これらの遺跡を中心に、この地域の歴史的環境を述べる。

旧石器時代から弥生時代の遺跡はほとんど発見されていないが、宍道湖に面する島ヶ崎遺跡では中期旧石器時代まで遡る可能性を持つ石器が採集され、杉谷遺跡では後期旧石器時代の石器が採集されている。遺構ははっきりしないがこのような遺物から、この地域でも古い時期から人々が生活していたことがうかがえる。

弥生時代後期には、布志名地区の大谷Ⅲ遺跡で3つの四隅突出型墳丘墓が築かれている。遺物は土器片のみであるが、四隅突出型墳丘墓の集中する中海南岸と斐伊川下流域との中間地である玉湯町で発見されたことは重要である。

弥生時代終末期になると、宮ノ上地区で玉生産が行われるようになる。花仙山周辺で最も早く玉生産を行ったのがこの地区の出雲玉作跡であり、管玉や勾玉の未成品をはじめ大

第1図　堂床遺跡の位置

量の土器が出土している。

古墳時代前期には、宮垣地区においても玉生産が行われるようになる。この地区の出雲玉作跡からは、約30棟の玉作工房跡や数万点にもおよぶ玉作関係資料が検出されている。未成品の種類は豊富で、碧玉製管玉未成品・勾玉未成品、水晶製丸玉未成品、滑石製臼玉未成品等多種にわたる。ここは、出雲地方でも最大規模の玉作遺跡であり、平安時代まで長期間玉生産が行われていたことが確認されている。また、この地区では、工房と住居が同一であり、生産と生活の場が一体であったと考えられている。また、住居を取り囲むように古墳が造られ、住居及び生産地域と墓域が区別されている。

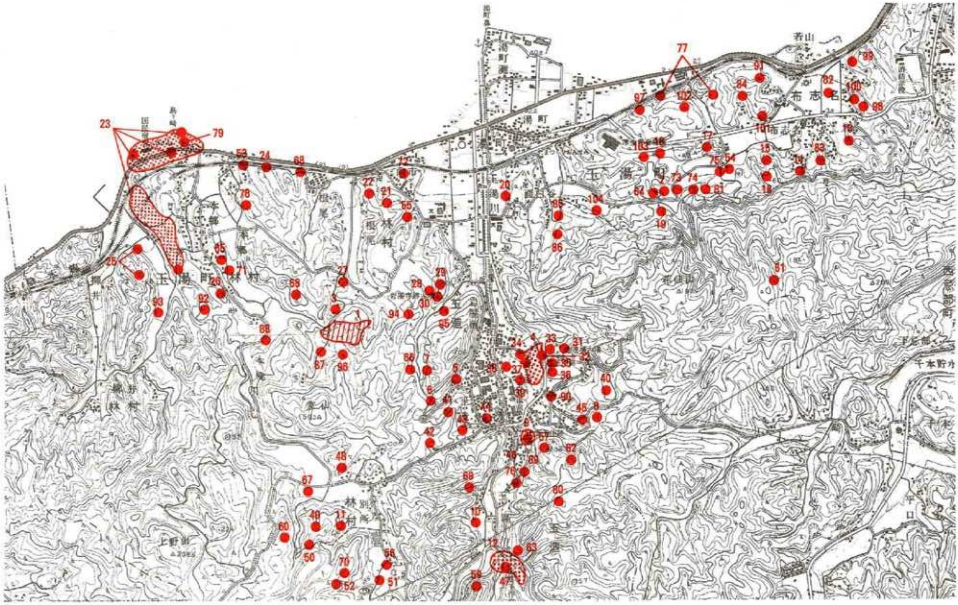
中期になると、玉ノ宮地区においても玉生産が行われており、玉生産関連の遺物や工房跡が検出されている。林村においても当遺跡をはじめとし、ソリ田遺跡、宮畑遺跡、神田遺跡、大口遺跡、脇田遺跡などの玉生産遺跡が確認されている。また、この時期のものとして町内の谷間から製鉄遺跡が見つかっており、製鉄炉の遺構やスラグや鉄滓などが玉の宮地区出雲玉作跡遺跡から検出されている。玉作工房跡から鉄の関係品が出土していることを考えると、これらの製鉄遺跡で作られた鉄製品が玉生産の工具として使われていたことも考えられよう。古墳は、当遺跡の所在する林村に集中しており、この時期から造られはじめている。この時期の代表的なものとして、舟形石棺を内部主体とする徳連場古墳や、築山古墳がある。出雲地方の中でもこの狭い地域に舟形石棺が比較的多いことは注目される。また、規模の大きいものとしては、報恩寺4号古墳や扇廻古墳が挙げられる。いずれも前方後円墳で全長約50mを測る。この他、古墳の多くは当遺跡の所在する林村に集中しており、当遺跡から湖岸へ向かう低丘陵には、規模の大きい古墳を含む林古墳群がある。中でも中期から後期にかけて築造された林43号墳は、横穴式石室より水晶製の切子玉やガラス玉など多くの副葬品が須恵器とともに出土している。

後期になると、直径30mを測る円墳の極楽寺古墳が出現し林古墳群には46基にのぼる円墳が築造されるようになる。横穴墓には、山陰でも最も精美な寄棟平入りの構造をもつ、国指定史跡の岩屋寺跡横穴群がある。その他、石棺をもつ化立横穴群や宮の奥横穴群、寺の窄横穴群などがある。規模の大きさに相違はあるが、古墳の形態は圧倒的に円墳系が主流を占める。方墳と考えられるのは、同一の石棺素材をもつ烏場古墳群と岩屋古墳群くらいである。こうした玉湯川流域の古墳の規模や築造数は、狭小な地域の農業生産力には不相応で、前述したように玉生産と密接な関わりを持つものと推察される。

律令時代になると、全国的には玉生産は消滅するが、玉湯町内では玉生産が続けられる。『出雲国風土記』、『古語拾遺集』、『延喜式』などの出雲玉作りに関する記述から、平玉の生産が中心であったことがうかがえる。宮垣地区の玉湯川に隣接する舵喰(かぢくい)遺跡や本郷川中流に位置する六反田遺跡、そして工房跡が検出された岩屋遺跡から、須恵器や玉関係の遺物が出土している。須恵器は、8～9世紀代のもので、玉は碧玉製や水晶製の平玉の未成品を中心としたものが多い。また、林村別所地内において林氏の私寺と考えられる松ノ前廃寺が建立されており、軒丸瓦、鬼板瓦などの古瓦や礎石が出土している。

中世になると、林氏関連の居城と考えられる山城が本郷川下流にある小高い丘陵に築かれる。現在も、曲輪、土塁、堀切が比較的良好な状態で残っている。

以上のように玉湯町は、古代より玉生産を中心として全国的にも名高く、玉に関連した遺跡が数



第２図　調査地と周辺の遺跡（Ｓ＝１／25000）

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	堂床遺跡	玉作工房跡	53	小畑古墳群	古墳
2	狐廻遺跡	玉作工房跡	54	中河原古墳群	古墳
3	宮畑遺跡	玉作工房跡	55	屋敷古墳	古墳
4	出雲玉作跡（宮垣地区）	玉作工房跡	56	松ノ前廃寺	寺院跡
5	渡止遺跡	玉作工房跡	57	玉造要害山城	城跡
6	渡止古墳	古墳	58	林城山	城跡
7	平床Ⅰ遺跡	玉作工房跡	59	殿山城	城跡
8	向新宮遺跡	玉作工房跡	60	砂子谷タタラ跡	製鉄遺跡
9	出雲玉作跡（宮ノ下地区）	玉作工房跡	61	カナクソ谷タタラ跡	製鉄遺跡
10	廻原遺跡	玉作工房跡	62	鉾谷タタラ跡	製鉄遺跡
11	ソリ田遺跡	玉作工房跡	63	高畦谷タタラ跡	製鉄遺跡
12	出雲玉作跡（玉ノ宮地区）	玉作工房跡、製鉄遺跡	64	狐廻墳墓群	墳墓
13	判官山古墳群	古墳	65	六反田遺跡	玉作工房跡
14	小川古墳	古墳	66	日焼廻遺跡	玉作工房跡
15	宮田古墳	古墳	67	有ノ木遺跡	玉作工房跡、製鉄遺跡
16	後迫古墳	古墳	68	小金松古墳	古墳
17	山崎横穴群	古墳	69	延木谷遺跡	玉作工房跡
18	樫の木古墳群	古墳	70	神田遺跡	玉作工房跡
19	柿田古墳群	古墳	71	脇田遺跡	玉作工房跡
20	小丸子山古墳	古墳	72	向市遺跡	玉作工房跡
21	極楽寺古墳	古墳	73	永丁部遺跡	玉作工房跡
22	報恩寺古墳群	古墳	74	岩屋口遺跡	玉作工房跡
23	林古墳群	古墳	75	布出遺跡	玉作工房跡
24	林横穴	横穴	76	古宝古墳	古墳
25	雷古墳群	古墳	77	大堤Ⅱ遺跡	古墳、住居跡
26	願清寺裏古墳群	古墳	78	中倉古墳群	古墳
27	根尾築山古墳群	古墳	79	鳥ケ崎遺跡	散布地
28	岩屋寺跡裏横穴群	横穴	80	高支城	城跡
29	岩屋寺跡裏古墳	古墳	81	椎の木谷古墳群	古墳
30	岩屋寺跡横穴群	横穴	82	茂芳目遺跡	散布地
31	徳遊場古墳	古墳	83	布志名城山	城跡
32	徳遊場横穴	横穴	84	二斗坊古墳群	古墳
33	青木原古墳群	古墳、横穴	85	曲白谷遺跡	玉作工房跡
34	青木原土壙墓	土壙墓	86	半坂古墳群	古墳
35	鳥場古墳群	古墳	87	カツザキ遺跡	玉作工房跡
36	烏坊集落跡	住居跡	88	野武士田遺跡	散布地
37	勘加羅志神社跡古墳群	古墳、土壙墓	89	サイゲ寺跡	寺院跡
38	小丸山古墳	古墳	90	元福前古墳	古墳
39	蛇喰遺跡	玉作工房跡	91	鍛冶畑遺跡	散布地
40	梅加原古墳群	古墳	92	マコモ谷古墳群	古墳
41	花立古墳群	古墳、横穴	93	神田遺跡	散布地
42	高尾古墳群	古墳	94	岩屋遺跡	玉作工房跡、製鉄遺跡
43	大門小路横穴群	横穴	95	平床Ⅱ遺跡	玉作工房跡
44	玉造築山古墳	古墳	96	根尾高尾古墳群	古墳
45	新宮横穴群	横穴	97	助次郎古墳群	古墳
46	玉作湯神社境内古墳	古墳	98	布志名大谷Ⅰ遺跡	古墳
47	大連塚古墳	古墳	99	布志名大谷Ⅱ遺跡	古墳
48	長畑古墳群	古墳	100	布志名大谷Ⅲ遺跡	墳丘墓
49	穴薬師横穴群	横穴	101	布志名遺跡	住居跡
50	大椿谷横穴群	横穴	102	大堤Ⅰ遺跡	古墳
51	塚ヤブ古墳	古墳	103	真野谷遺跡	古墳
52	宮ノ奥横穴群	横穴	104	杉谷遺跡	住居跡

多いところである。それは、碧玉を産出する花仙山を有し、地理的な好条件が玉生産を発展させたためである。しかし、玉生産の工人達が獲得していった技術や文化についてはまだ謎に満ちている部分が多い。本遺跡の資料提示はもとより、今後各時期の遺構・遺物について詳細な検討をふまえ総合的に当地域の歴史を明らかにしていくことが必要であると思われる。

参考文献

遠藤貴愛ほか　1961「玉湯町史（上巻）」玉湯町

近藤　正ほか　1970「玉造鳥坊遺跡群」玉湯町教育委員会

山本　清ほか　1972「史跡出雲玉作跡発掘調査概報」玉湯町

勝部　衛ほか　1984「史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）第1次発掘調査概報」玉湯町教育委員会

勝部　衛ほか　1985「史跡出雲玉作跡（宮ノ上地区）第2次発掘調査概報」玉湯町教育委員会

勝部　衛ほか　1986「出雲玉作跡保存管理計画策定報告書Ⅰ」玉湯町教育委員会

松本岩雄ほか　1987「島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ玉作関係遺跡」島根県教育委員会

勝部　衛ほか　1988「史跡出雲玉作跡（玉ノ宮地区）第1次、2次発掘調査概報」玉湯町教育委員会

勝部　衛ほか　1990「出雲玉作跡保存管理計画策定報告書Ⅱ」玉湯町教育委員会

玉湯町教育委員会　1997「玉湯町遺跡分布図」

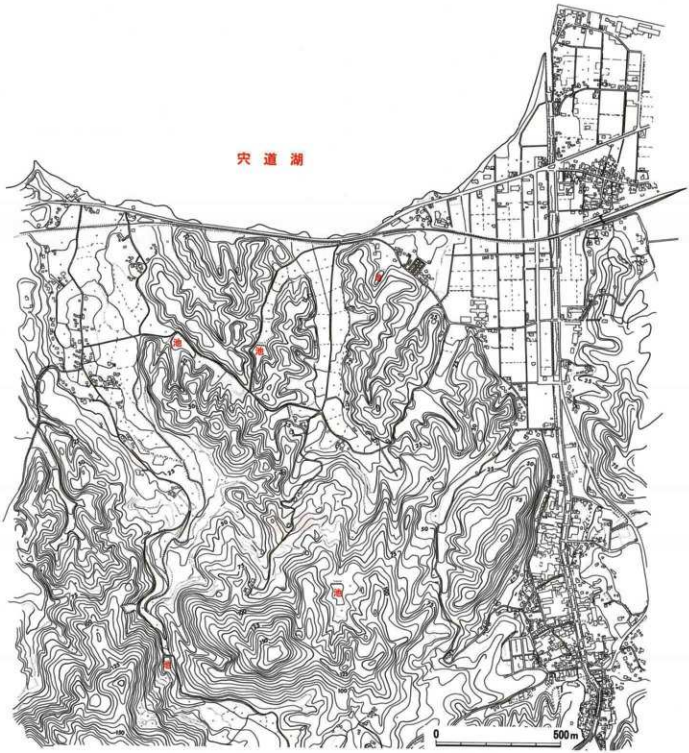
足立克己ほか　1997「布志名大谷Ⅰ遺跡、布志名Ⅱ遺跡、布志名才の神遺跡」島根県教育委員会

片岡詩子ほか　1998「有ノ木遺跡報告書」玉湯町教育委員会

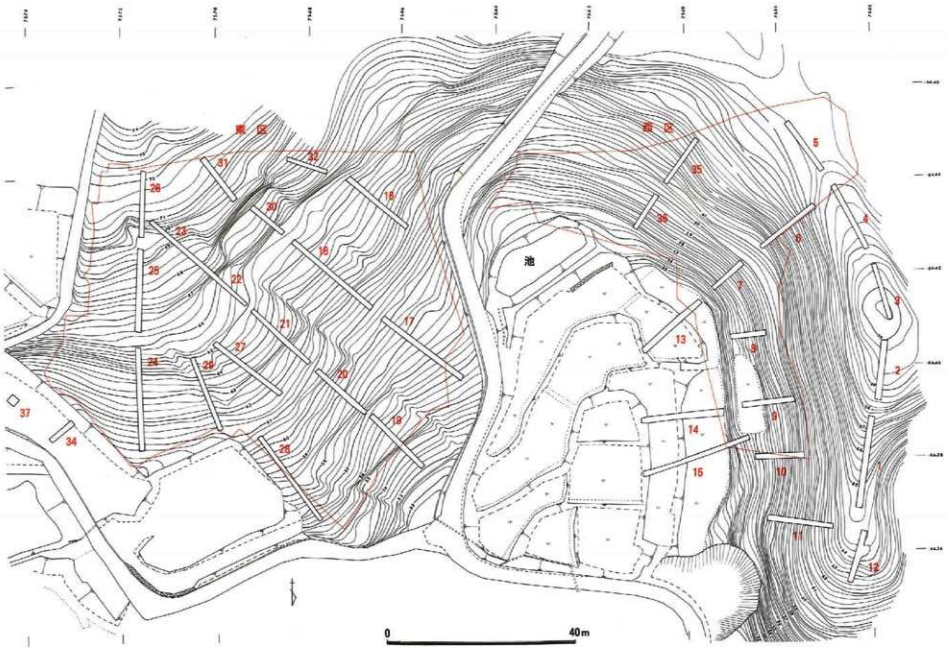
島根県教育委員会　1999「布志名大谷Ⅲ遺跡現地説明会資料」島根県埋蔵文化財調査センター

第３章　調査の経過

堂床遺跡の発掘調査は平成９年５月29日からのトレンチによる範囲確認調査から始まった。幅15ｍのトレンチ（長さは約７ｍ～20ｍと場所によって異なる）を37箇所設定し（第４図）、同年６月

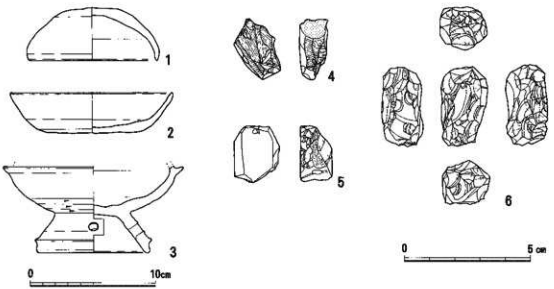


第３図　堂床遺跡の位置と周辺の地形（Ｓ＝１／15000）



第4図　堂床遺跡調査前地形測量図（S＝1／800、赤字の番号はトレンチ番号）

29日まで範囲確認調査を行った。その結果から、約8,500㎡の緩斜面及びその緩斜面から派生する尾根を調査対象地とした。調査対象地内のほとんどのトレンチからは、土器類では6～7世紀の須恵器や土師器が出土し、その他の遺物では瑪瑙・碧玉・水晶の玉の未成品やチップ、また玉作のための砥石（筋砥石、内磨き砥石）が出土した。このことから堂床遺跡が6～7世紀の集落で、しかもその中には玉生産を行っていたであろう工房も存在するであろうことが予想された（第5図）。



第5図　トレンチ出土遺物実測図（S＝1・2・3は1／3、4・5・6は2／3、4は瑪瑙、5は水晶、6は碧玉）

尚、第13、14、15、34、37トレンチからも土器類や玉類は出土したものの、削平された箇所への流れ込みであると思われたため調査対象地から外した。また第2トレンチの表土からは須恵器が1点ほど出土したが、遺構もなく、また周囲のトレンチからも遺物・遺構が確認されなかったため調査対象地からは外した。

全面発掘調査は同年7月2日から平成10年1月16日まで行なった。調査の進行上の理由から発掘調査区を便宜的に遺跡のほぼ中心部を通る町道を基準に西区と東区に分け、まず西区の発掘調査から開始した。堂床遺跡の調査範囲は調査前には西区も東区も共に山林として利用されていた場所であった。従って、表土には大小の木根がはびこっており、人力による表土部分の掘削は困難であると判断し、重機を使用して表土の掘削を行うこととした。人力による掘削は重機による掘削が終了した7月14日から開始した。

7月22日に加工段を1棟（SB09）検出した。この後、次々と西区の加工段は検出され、8月8日までに西区からは全14棟の加工段と1基の土壙が検出された。

9月2日から東区の発掘調査も開始した。当初は西区の調査の終了後に東区の調査を行なう予定であったが、調査期間等の埋山から西区の遺構検出を完了した後、遺構の掘削を一時中断して、東区の粗掘りと遺構検出を行なうことにした。東区も西区と同様に表土には木根がはびこっていたため、重機による表土掘削を9月24日まで行なった。9月15日からは重機による表土掘削と並行して人力による発掘作業を開始した。

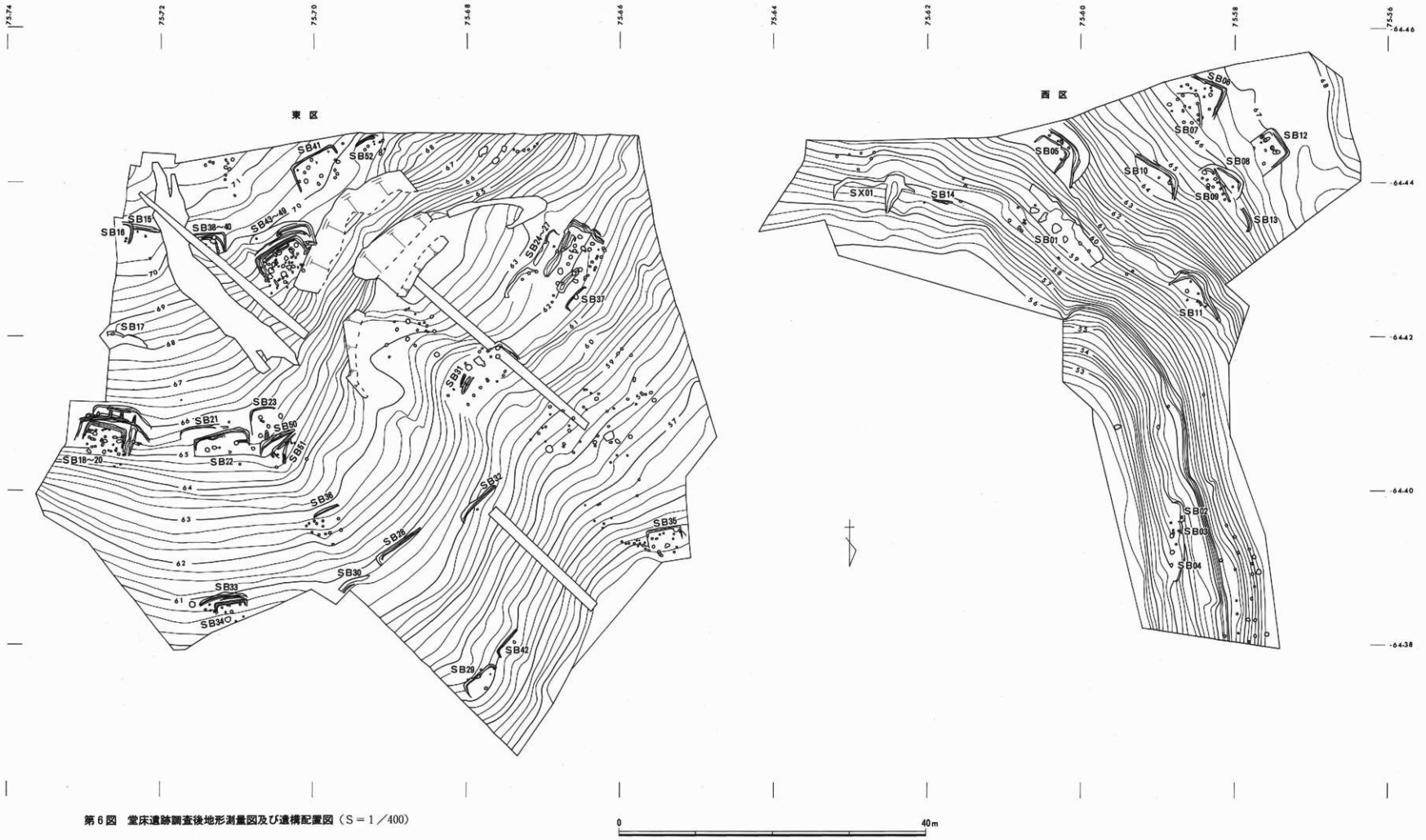
9月25日に東区で4棟の加工段（SB15，SB17，SB18，SB21）が検出された。この後、次々と東区の加工段は確認され、12月18日までに全40棟の加工段が検出されることになった。

9月25日に検出した4棟の加工段にはそれぞれにサブトレンチを入れ、土層を確認し、遺構の掘り下げを行った（堂床遺跡での加工段の調査は基本的に遺構検出→サブトレンチによる土層観察→土層観察用のセクションベルトを残しての遺構掘り下げ→遺物の取り上げ→土層の撮影と実測→セクションベルトの撤去→遺構の実測と撮影の順で調査を行った）。この時、4棟の加工段全ての床面からは瑪瑙、碧玉、水晶、滑石のチップや玉類の未成品が確認され、玉作工房として利用された加工段であることが判明した。結局この4棟の玉作工房跡の確認の後、堂床遺跡からは最終的には26棟もの玉作工房跡が確認された。

9月29日からは東区の調査と並行して、西区の調査を再開することにした。調査は西区の遺構の掘削、粗掘りの未了地の調査から始めた。10月7日にSB05の掘り下げを行なったところ、来待石の割石を7枚使用して暖炉状に組んだ遺構を検出した。焼土が確認されたことから当初はオンドルの可能性も考えられたが、その後の調査でこの施設が加工段の壁際に設置され煙道が長く延びないことや、石組みの構造が竈として用いることができないことから（甕等を火にかける空間が上部に存在しない）、暖房施設の可能性が高いものの、オンドルとは異なる施設であることがわかった。

10月22日からは玉作工房跡でのチップの取り上げを開始した。当初はチップの取上げを1点づつ記録をしながら行なっていたが、各加工段の掘り下げが進展するにつれ玉作工房跡の数が想像を超える尋常ではない数であることが判明し、調査期間の延長や調査員の増員が望めないことから、12月19日からチップの個別の記録を諦め、チップの分布する範囲を記録しその範囲内のものを一括して取り上げることにした（尚、玉作工房跡の場合、床面から約2～3㎝上までの埋土は採取し、水洗選別を行いチップや未成品を採取している）。

11月22日には玉湯町の岩屋遺跡と同日に現地説明会を行った。約70名もの見学者を迎えることができた。12月18日には西区の調査が終了し、12月25日に航空写真の撮影を終え、平成10年1月16日に東区の調査が終了し、発掘調査は完了した。



第6図　堂床遺跡調査後地形測量図及び遺構配置図（S＝1／400）

第４章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

堂床遺跡は島根県八束郡玉湯町林村に所在する古墳時代後期の集落遺跡である。室山（標高159m）から派生する標高50m～70mの丘陵斜面に位置し、北には宍道湖を、東には花仙山（標高199m）を望む。遺跡は北面する緩斜面と、その緩斜面から西に延びる尾根で構成されている（第３図）。調査区は約8,500㎡を測り、中央を通る町道によって便宜的に西区（遺跡西側の尾根と尾根の斜面）と東区（遺跡東側の緩斜面）に分けた（第６図）。

西区では尾根上のから古墳時代後期の加工段を３棟、北側斜面から古墳時代後期の加工段を８棟、８世紀代の加工段を３棟、土壙を１基を検出した。古墳時代後期の加工段のうち、尾根上の３棟と北側斜面にある３棟は瑪瑙・碧玉・水晶・滑石の玉類未成品やチップ、砥石などが出土する玉作工房跡であった。また７枚の割石を組み合わせた暖炉状遺構を伴う加工段が１棟あった。

東区ではほぼ全面から古墳時代後期の加工段を38棟検出した。38棟の加工段のうち、緩斜面の上段に位置する19棟は、西区と同様の玉作工房跡であった。

堂床遺跡の出土遺物は土器類、玉類、石器類、鉄器・鉄滓類と多岐にわたる。土器類は土製支脚、移動式竈、上師器の甕や甑や高坏、須恵器の蓋坏や高坏や甕といったものが大半を占めていた。また１点ではあるが韓半島製の可能性もある土器が出土している。玉類の出土品は瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉、水晶製丸玉、緑泥片岩製臼玉の未成品やチップが大半を占めた。また水晶製三輪玉の未成品やガラス製小玉が１点づつ出土した。石器類では筋砥石や内磨砥石を中心に様々な砥石やハンマーが出土した。鉄器・鉄滓類は玉作工具と思われる棒状の鉄器が多く出土した。

堂床遺跡は大きくは古墳時代後期の遺跡であるが、出土遺物により更に堂床１期から堂床７期に分けることができる。この章では、その時期区分に従って記述を行っている。時期区分については第５章第１節で論じる。

第２節　遺構と遺構出土遺物

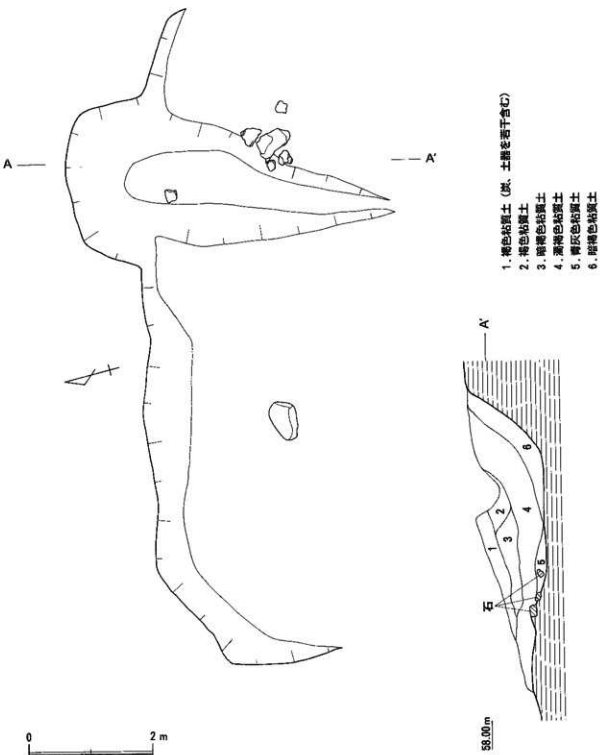
ＳＸ01（第７図、図版５）

西区東側の斜面下段で検出した加工段で、ＳＢ14の東側に隣接している。斜面を約80cmとかなり深く掘り込んで作った加工段である。加工段の大きさは現状で幅10.0m、奥行2.4mで、深さ約80cm、床面の高さは標高57.2m前後を測る。この加工段の特徴は内部に縦長の溝を伴っている点である。溝は加工段のやや西側に位置しており、大きさは幅2.7m、奥行5.2mで、最深部は標高56.8m前後を測る。溝の周りには幾つかの礫を配置している。溝からは少量ではあるが水が湧き出しており、水場であった可能性も考えられる。

遺構の時期は須恵器の蓋坏から堂床４期と判断した。

ＳＸ01出土遺物（第８図・第９図）

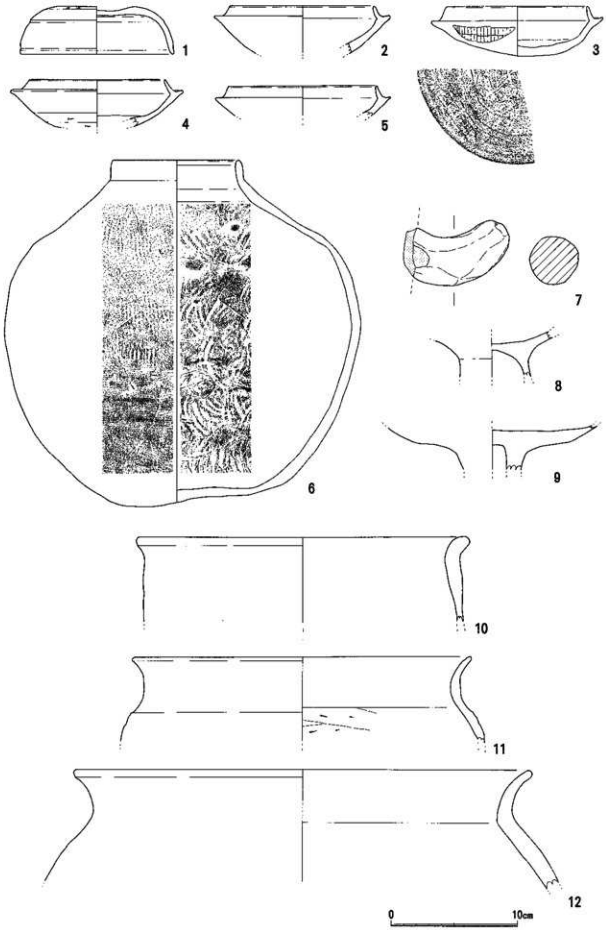
土器類では図示したもの以外には土師器片や須恵器片が数点出土している。工具類では筋砥石とハンマーが出土した。筋砥石は敲打痕があり、工作台の役割も果たしていたものと思われる。



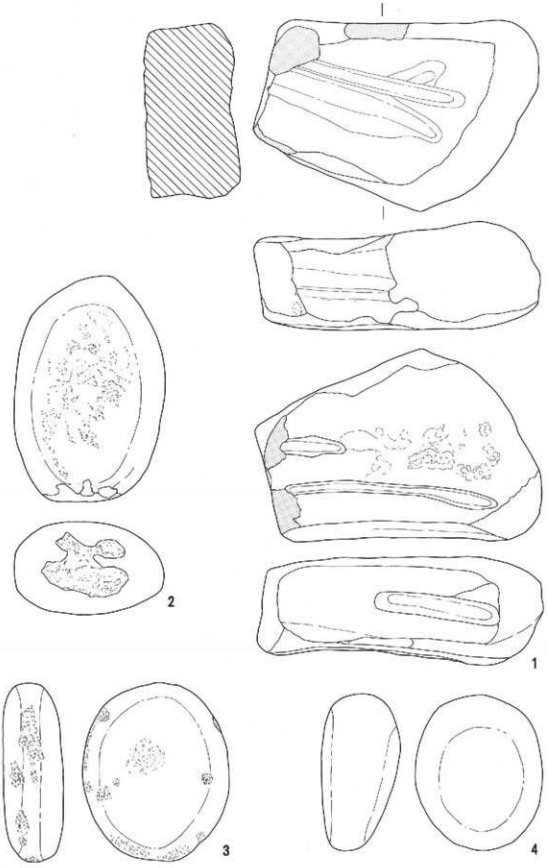
第７図　ＳＸ01実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＸ01計測表

	幅　行　き	奥　行　き	標　高
加工段の規模	10.0m	2.4m	57.2m



第８図　ＳＸ01出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



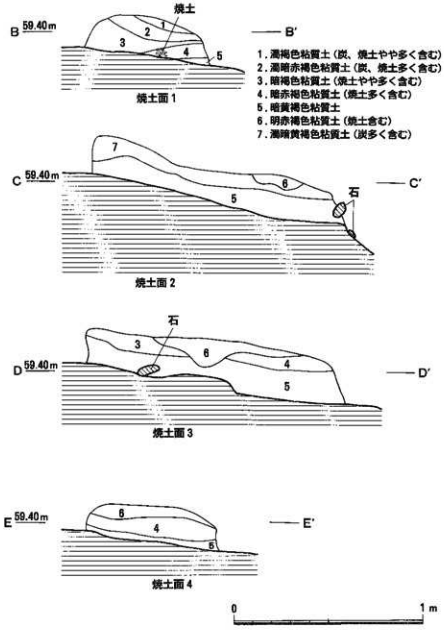
第９図　ＳＸ01出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）

ＳＢ01

（第12図、図版７）

西区東側の斜面下段で検出された加工段である。西区の同時期の加工段では最も低い位置にある。加工段の大きさは幅13.7ｍ、奥行2.3ｍで、深さが約70㎝、床面の高さは標高59.3ｍ前後を測る。

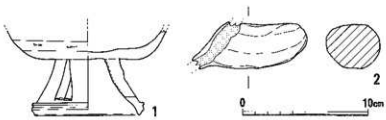
この加工段には４つの焼土面がある（第10図、図版６、図版８）。焼土面は加工段の長軸に沿ってほぼ一列に並んでいる。どの焼土面も張り床が熱を受けて硬化したものである。配置などから考えて同時併存していたと思われる。壁体溝や柱穴と思われるピットは確認できなかった。遺構の時期は須恵器から堂床３期と判断した。



第10図　ＳＢ01焼土面土層図（Ｓ＝１／20）

ＳＢ01出土遺物（第11図）

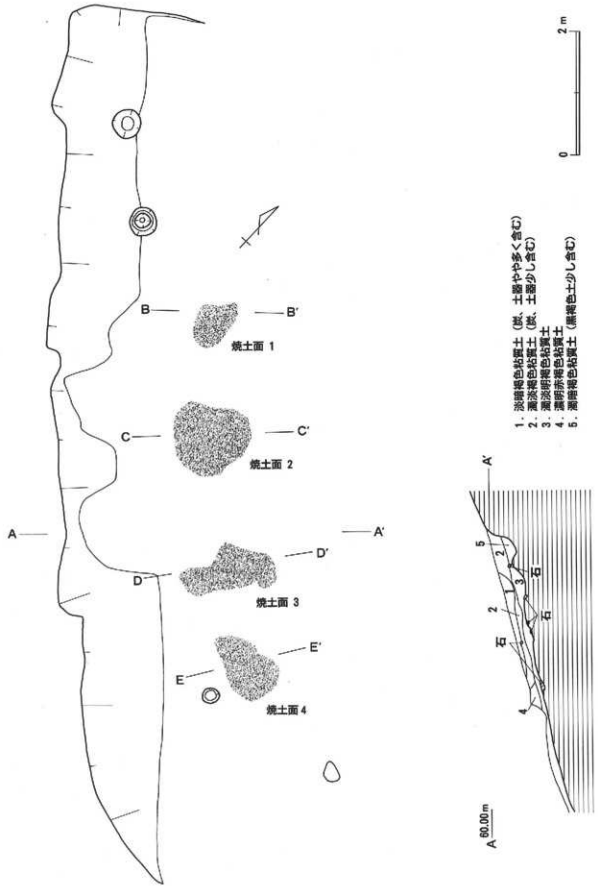
図示したもの以外には土師器・須恵器の小片、流れ込みの玉類が出土している。



第11図　ＳＢ01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＢ01計測表

	幅　行　き	奥　行　き	標　高
加工段の規模	13.7ｍ	2.3ｍ	59.3ｍ



第12図　ＳＢ01実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ04（第13図・図版13）

西区北側の斜面中段で検出された遺構で、他の遺構から離れた位置にある。３つの加工段が切り合っており、上層などから最も古いものがＳＢ02で、次いでＳＢ03、最も新しいものがＳＢ04であることがわかった。いずれも谷側床面が流失している。

ＳＢ02

３つの加工段の内で最も北側に位置している。ＳＢ03の掘り込みにより残存部分は少ない。床面の平面形は現状で幅2.6m、奥行13mで、深さが約60cm、床面の高さが標高55.5m前後を測る。柱穴などは確認できなかった。

遺構の時期は出土遺物から堂床８期と判断した。

ＳＢ02出土遺物（第14図）

土器類は須恵器の蓋坏と土師器の甕片のほかに須恵器と土師器の小片が出土した。

工具類は鉄器が１点ほど出土した。

ＳＢ02計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	2.6m	1.3m	55.5m

ＳＢ03

３つの加工段の真ん中に位置しており、北側はＳＢ04に切られて残存部分が少ない。床面の平面形は現状で幅1.5m、奥行1.1mで、深さが約70cm、床面の高さが標高55.4m前後を測る。柱穴と思われるピットを２つ確認することができた。

出土遺物は須恵器や土師器の小片のみであった。遺物から遺構の詳細な時期を判断できなかったが、ＳＢ02とＳＢ04に挟まれていることから堂床８期と思われる。

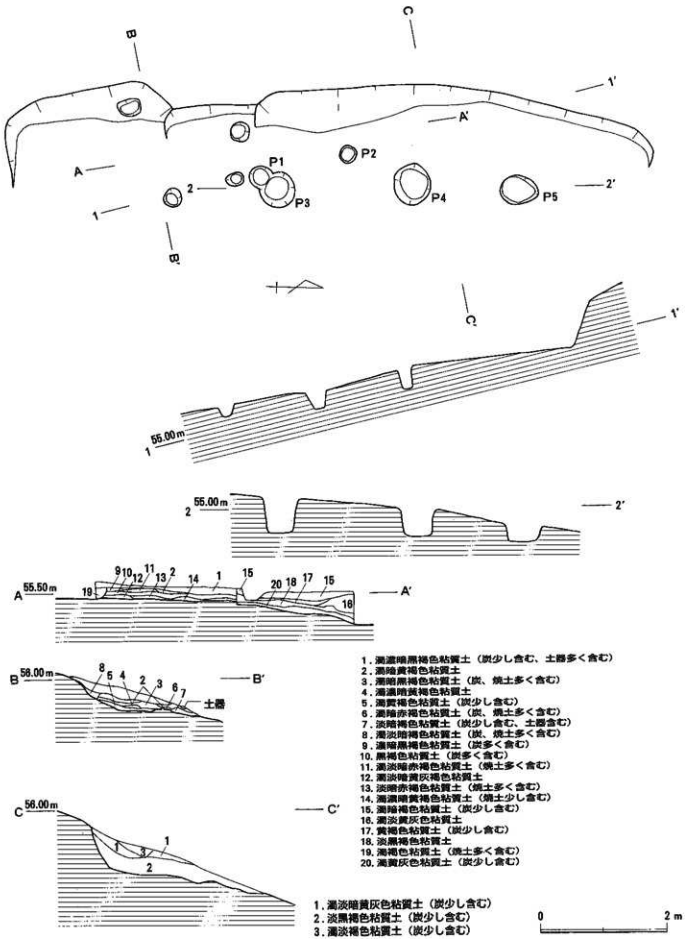
ＳＢ03計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高
		1.5m	1.1m	55.4m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		1間（15m）		
柱穴（cm）	番　号	P1	P2	
	上面径	33×36	27×27	
	深　さ	27	33	
柱間距離（m）		P1－2		
		1.5		

ＳＢ04

最も北側に位置する加工段である。床面の平面形は現状で幅6.3m、奥行2.3mで、深さが約80cm、床面の高さが標高55.0m前後を測る。

柱穴と思われるピットを２つ確認することができた。これらのピットはＳＢ03のピットより直径



第13図　ＳＢ02～04実測図（Ｓ＝１／60）

が大きい。

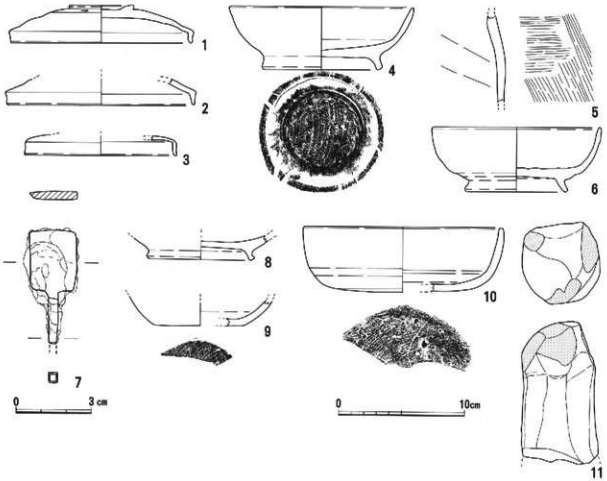
遺構の時期は出土遺物から堂床8期と判断した。

SB04出土遺物（第14図）

土器類は須恵器の蓋坏と土師器の甕片のほかに須恵器と土師器の小片が出土した。

SB04計測表

加工段の規模		幅行き	奥行き	標高	
		6.3m	2.3m	55.0m	
建物の規模		梁行き		桁行き	
		2間（3.8m）			
柱穴（cm）	番号	P3	P4	P5	
	上面径	57×48	66×60	48×60	
	深さ	57	48	27	
柱間距離（m）		P3－4	P4－5		
		2.2	1.7		



第14図　SB02（1～7）・SB04（8～11）出土遺物実測図（1～6・8～11はS＝1／3、7はS＝2／3）

ＳＢ05（第15図・図版９）

西区西側の斜面中段で検出された加工段である。台形状の加工段とその内側に正方形の加工段がある。二つの加工段は土層から切り合うものではなく、一連の遺構であることがわかった。

外側の加工段の平面形は現状で、山側の幅が5.7m、谷側の幅が8.6m、奥行は4.5mで、深さが約90cm、床面の高さは標高63.5m前後を測る。外側の加工段は調査区外まで延びており完全な大きさは不明であるが、内側の加工段の中心軸で左右対象であるなら、その平面形は山側の幅6.1m、谷側の幅10.0mと推測される。内側の加工段の平面形は幅4.4m、奥行2.3mで、深さは120cm、床面の高さは外側の加工段より30cm低い標高63.2m前後を測る。

２つの加工段は共に壁体溝を持つが、外側の加工段の壁体溝は谷側に開く様に壁際全体に巡っているのに対して、内側の加工段の壁体溝は西側にだけある。柱穴と思われるピットは５つ確認した。また付属施設に暖炉状遺構があった。その他この遺構の特徴としては、斜面に対する加工段を造る際の掘込が他の加工段に比べて極端に深いことが挙げられる。

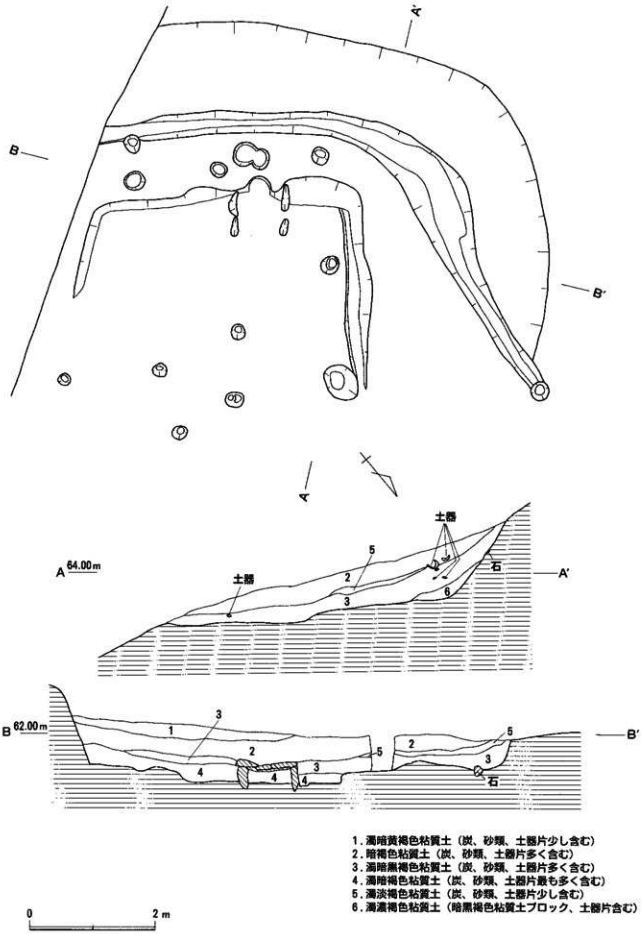
遺構の時期は第４層から出土した須恵器（第18図－１）の蓋坏から３期と判断した。

ＳＢ05計測表

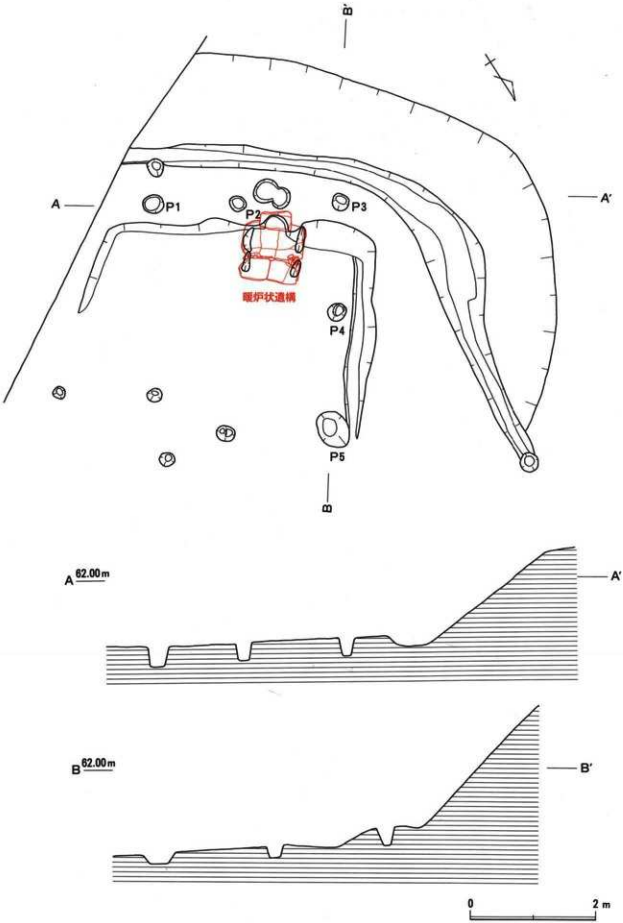
加工段の規模		幅行き		奥行き		標高	
		5.7m		4.5m		63.5m	
建物の規模		梁行き			桁行き		
		2間（3.6m）			2間（3.0m）		
柱穴（cm）	番号	P１	P２	P３	P４	P５	
	上面径	30×30	27×24	27×30	27×29	66×48	
	深さ	33	27	30	18	18	
柱間距離（m）		P１－２	P２－３		P３－４	P４－５	
		1.4	1.7		1.8	1.9	

ＳＢ05暖炉状遺構（第17図、図版10・図版11）

暖炉状遺構は内側の加工段の壁際の中央よりやや西寄りに設置している。７枚の割石を組み合わせたこの施設は、平面形がほぼ１㎡、高さは40cmで、正面から見ると暖炉のような形をしている。その構造は、両側面に割石を２枚づつ用い壁を作り、その上に２枚の割石を乗せて天井を作り、やや小さい割石を天井の後に飛び出すように乗せている。さらに天井の２枚の割石の間には上師器片を差し込み目張としている。正面となる部分には面取りをしており、約３cm幅の整痕を確認できる。割石には来待石を使用している。来待石は宍道町来待を中心に露出している粗粒凝灰岩質砂岩で、その長所は柔らかく採掘・加工が容易で耐火性を有することである。古墳時代には石棺材として使用されることもあった。ただし同時期の石材加工技術に比べてこの施設の加工は粗く、技術的な繋がりは少ないものと思われる。施設内の床には焼土面・炭化物があり、天井内面には煤が付着していた。壁際には半円状の煙道と思われる掘込があった。この掘込の真上に天井から飛び出した割石が位置する。以上のことから、この施設は一種の暖房施設と考えて良いと思われる。またこの加工段自体の掘込が深い点も暖房を意識してのことかもしれない。

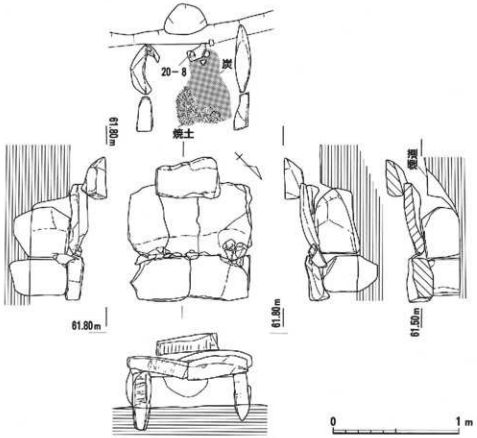


第15図　ＳＢ05実測図(1)（Ｓ＝１／60）



第16図　ＳＢ05実測図(2)（Ｓ＝１／60）

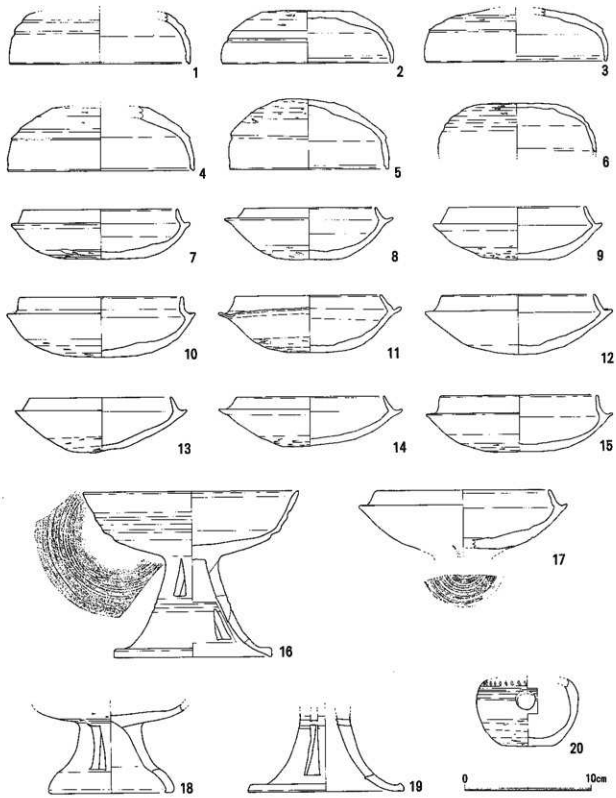
尚、この時期の暖房施設にオンドルがあるが、当遺跡の暖房施設の煙道は長く延びるものではなく、ピットを半裁した程度の短いものであり、甕などを使って煮炊きを行うことのできる穴が石組みの天井部分に無いことからオンドルとは呼べないと判断した。そこで、この遺構の名称は施設の性格と形状から暖炉状遺構とした。



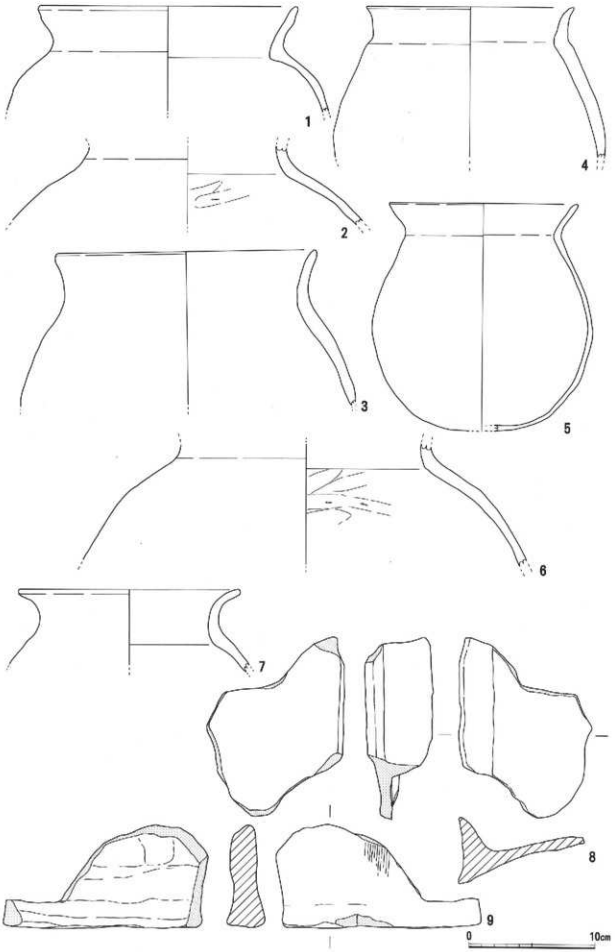
第17図　ＳＢ05暖炉状遺構実測図（Ｓ＝１／30）

ＳＢ05出土遺物（第18図～第21図）

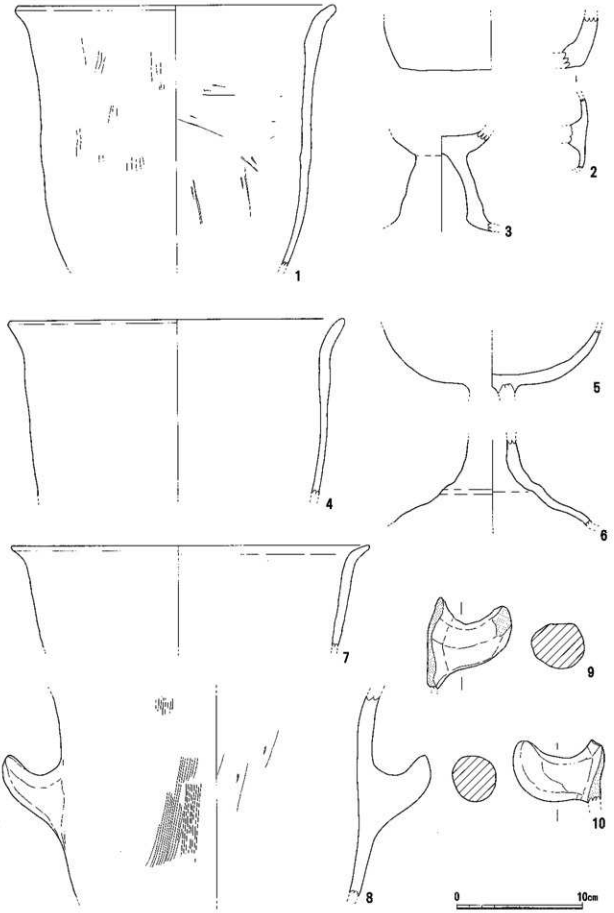
出土遺物は図化したもの意外にも須恵器の蓋坏や壺、土師器の高坏や甕等の破片がある。これらの遺物のほとんどは流れ込みによるものである。加工段の掘込が深いためにこれらの遺物は多量に出土した。遺構に伴う遺物には暖炉状遺構の中から出土した甑片（第20図－５図）や、暖炉状遺構の目張りとして使用されていた土師器の甕（19図－２、19図－６）がある。甑片は把手を上にした状態で暖炉状遺構内の焼土面上で検出された。煙道からの流れ込んだ遺物とは考えにくく、故意に暖炉状遺に置かれたものと考えられる。



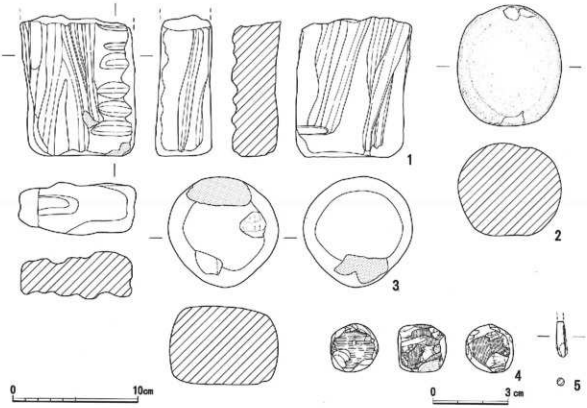
第18図　ＳＢ05出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第19図　ＳＢ05出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）



第20図　ＳＢ05出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１／３）



第21図　ＳＢ05出土遺物実測図(4)（1～3はＳ＝1／3、4・5はＳ＝2／3）

ＳＢ06・07（第22図・図版12）

西区南側の尾根上の平坦面で検出された遺構で、2つの加工段が切り合っている。ＳＢ05の南西側でＳＢ12の東側に位置している。2つの加工段はいずれもかなり削平を受けており、残存状態はかなり悪かった。

2つの加工段の先後関係は、削平のため遺構の残りが悪く土層からは判断することができなかったが、出土遺物からＳＢ06、ＳＢ07の順と判断した。以下古い順にＳＢ06、ＳＢ07と説明を行う。

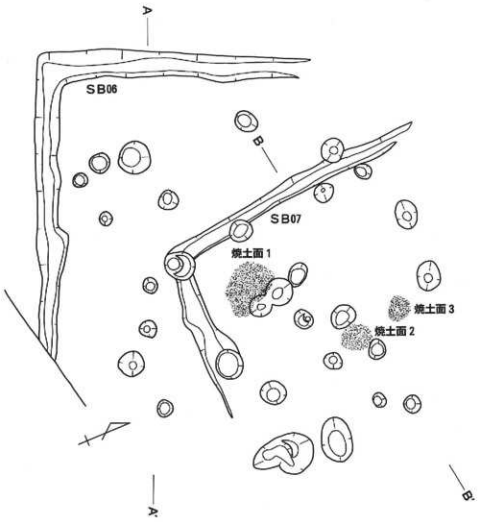
また、2つの加工段の床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップや玉類未成品が多量に出土したため玉作工房跡と判断した。

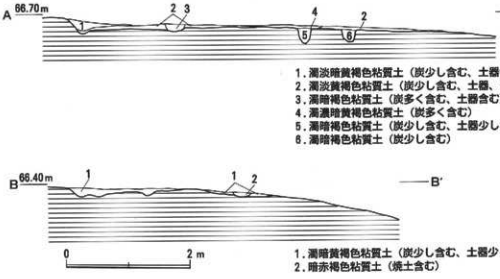
ＳＢ06（第23図）

全体的に大きく削平を受けており、残存状態はかなり悪い。また、壁体溝は西側と南側を巡って残存しているが、西側の壁体溝は途中で消滅し、南側の壁体溝は調査区外まで延びている。以上のことから正確な大きさはわからない。

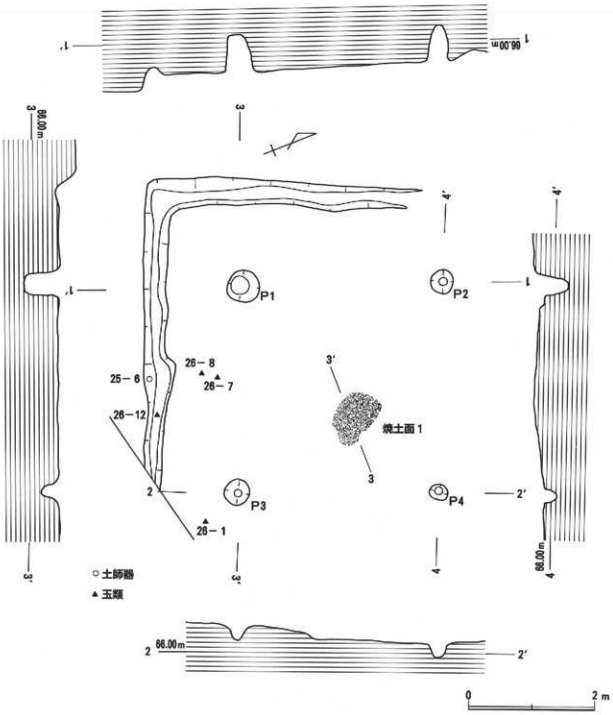
当時はほぼ正方形であったと思われる床面の規模は現状で、幅5.5m、奥行6.0mで、深さが約15cm、床面の高さは標高66.5m前後を測る。

柱穴と思われるピットを4つ確認することができた。この4つのピットの間隔がそれぞれ3.3m前後であることから、平面形がほぼ正方形となる建物が1棟ほど建っていたものと考えられる。





第22図　ＳＢ06・07実測図（Ｓ－１／60）



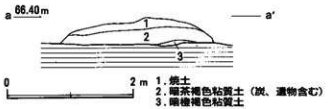
第23図　ＳＢ06実測図（Ｓ＝１／60）

柱穴と考えられる４つのピットと壁体溝の距離などから当時の床面の規模を推定すると、幅6.0m、奥行6.3mのほぼ正方形の加工段であったと思われる。

壁対溝は西側のコーナーはほぼ直角に曲がり、西側と南側は直線的に延びている。

中心よりやや東側で焼土面（第24図）を1つ確認した。この焼土面はSB01で検出した4つの焼土面と同様に張り床が熱を受け硬化したもので、床面から盛り上がっている。大きさもSB01の焼土面とほぼ同じである。

遺構の時期は出土遺物から堂床3期と判断した。



第24図　SB06焼土面1土層図（S＝1／60）

SB06計測表

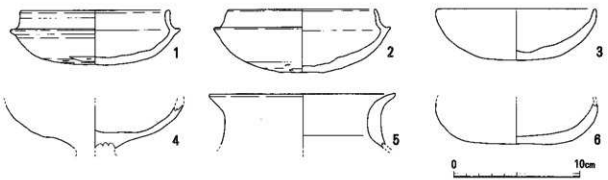
加工段の規模		幅行き	奥行き	棟高	
		5.5m	6.0m	66.5m	
建物の規模		梁行き		桁行き	
		1間（3.4m）		1間（3.2m）	
柱穴（cm）	番号	P1	P2	P3	P4
	上面径	51×54	39×36	42×42	27×30
	深さ	60	57	27	21
柱間距離（m）		P1－2	P2－4	P3－4	P3－1
		3.2	3.3	3.2	3.4

SB06出土遺物（第25図）

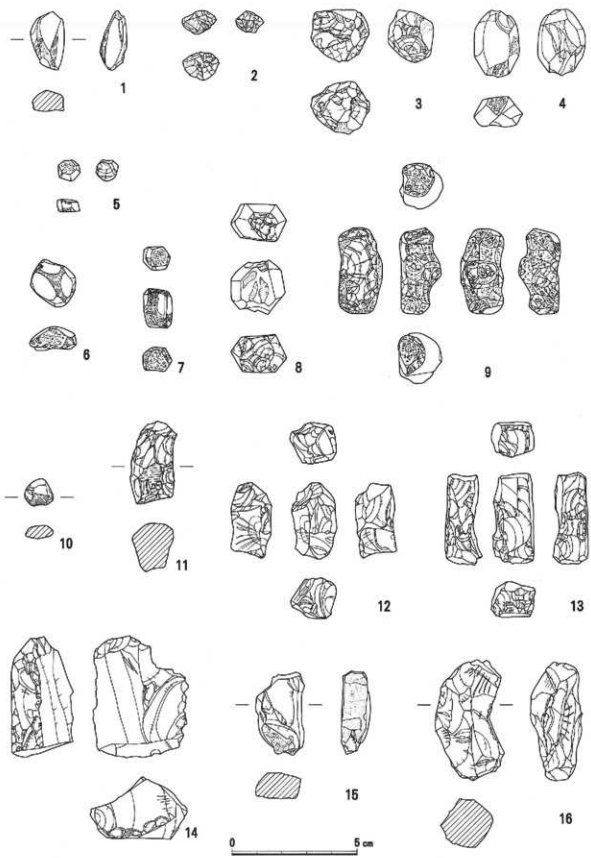
土器類は須恵器の蓋坏と土師器の椀、甕、高坏、土師器・須恵器の小片が出土した。

玉類は水晶製の未成品が17点、碧玉製の未成品が11点、瑪瑙製の未成品が8点、緑泥片岩製の未成品が36点と遺構の残存状態に比べると多く出土した。出土状況は水晶、瑪瑙、碧玉、緑泥片岩の未成品・チップが偏在する事なく、混在して出土した。出土した場所は壁体溝内と壁体溝付近が多かった。これは壁体溝と壁体溝付近の床面が削平を免れた結果であろう。

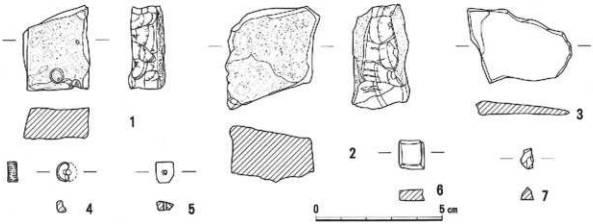
出土した玉類を見ると、砥石やハンマーといった工具を当然使用していたと考えられるが、この遺構からは工具類を検出することはできなかった。



第25図　SB06出土遺物実測図(1)（S＝1／3）



第26図　ＳＢ06出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～９は水晶、10～14は碧玉、15・16は瑪瑙）



第27図　ＳＢ06出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３、１・２は瑪瑙、３～６は緑泥片岩、７はガラス）

ＳＢ07（第28図）

床面の平面形は現状で幅4.7m、奥行3.0mで、深さが約５cm、床面の高さはＳＢ06より20cm低い標高66.3m前後を測る。全体的に削平を受けている。４本柱建物のうちの２本の柱穴と思われるピットを確認した。また２つの柱穴の他に壁体溝内を巡るピットを５つ確認した。その他に焼土面を２つほぼ中央で確認した。２つの焼土面はＳＢ01、ＳＢ07と同じように盛り上がった張り床となっている。

遺構の時期は出土遺物から堂床４期と判断した。

ＳＢ07計測表

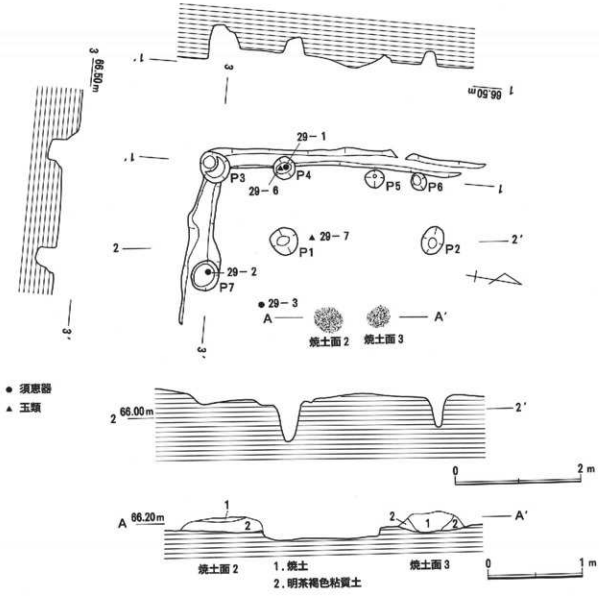
加工段の規模		幅　行　き		奥　行　き		標　高		
		4.7m		3.0m		66.3m		
建物の規模		梁　行　き			桁　行　き			
		1間（2.4m）						
柱穴（cm）	番　号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７
	上面径	42×42	33×45	51×45	36×33	30×30	29×26	42×48
	深　さ	62	50	54	27	12	24	30
柱間距離（m）		Ｐ１－２	Ｐ３－４	Ｐ４－５	Ｐ５－６	Ｐ３－７		
		2.4	1.1	1.5	0.7	1.7		

ＳＢ07出土遺物（第29図）

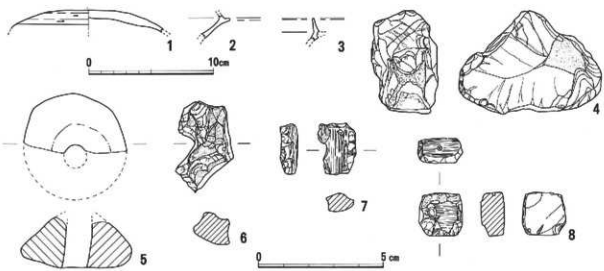
土器類は須恵器片が３点出土した。

玉類は水晶製の未成品が９点、瑪瑙製の未成品が４点、緑泥片岩製の未成品が８点出土した。その中にある碧玉製平玉の未成品はこの遺構でしか出土していない。出土状況は、ＳＢ06と同じように水晶、瑪瑙、碧玉、緑泥片岩の未成品・チップが混在していた。出土場所もやはり壁体溝内と壁体溝付近が多かったが、ＳＢ06と同じ理由によるものと思われる。

工具類は瑪瑙製のハンマーと須恵質の紡錘車が出土した。



第28図　ＳＢ07実測図（平面図セクションはＳ＝１／60　焼土面土層図はＳ＝１／40）



第29図　ＳＢ07出土遺物実測図（１～３はＳ＝１／３、４～８はＳ＝２／３、６・７は瑪瑙、８は碧玉）

ＳＢ08・ＳＢ09（第31図・図版13）

西区南側の斜面上段で検出された遺構である。２つの加工段が切り合っており土層からＳＢ09がＳＢ08を切っていることがわかった。両加工段は床面から水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップなどが出土したため玉作工房跡と判断した。以下古い順にＳＢ09、ＳＢ08と説明を行う。

ＳＢ09

谷側に開いた加工段である。床面の平面形は現状で幅4.0m、奥行2.0mで、深さが40cm、床面の高さはＳＢ08より40cm低い標高65.4m前後を測る。壁体溝は南壁と西壁を巡っているが、西側の壁体溝が南側の壁体溝を切っている。西壁の側には壁体溝に沿って一直線に並ぶピットを５つほど確認した。遺構の時期は出土遺物から堂床３期と判断した。

ＳＢ09計測表

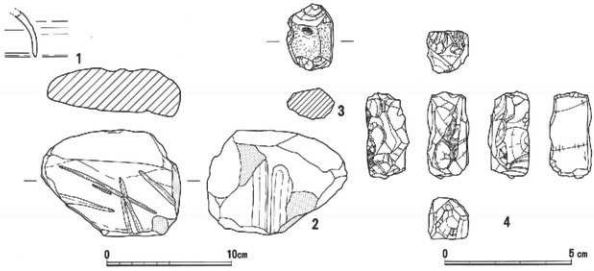
加工段の規模		幅　行　き		奥　行　き		標　　高	
		5.5m		2.1m		65.7m	
建物の規模		梁　行　き			桁　行　き		
		1間（3.1m）			1間（16m）		
柱穴（cm）	番　号	P５	P６	P７	P８	P９	
	上面径	42×41	27×24	30×24	30×27	27×30	
	深　さ	24	27	27	33	30	
柱間距離（m）		P５－６	P６－７		P７－８		P８－９
		0.5	0.9		0.8		0.8

ＳＢ09出土遺物（第30図）

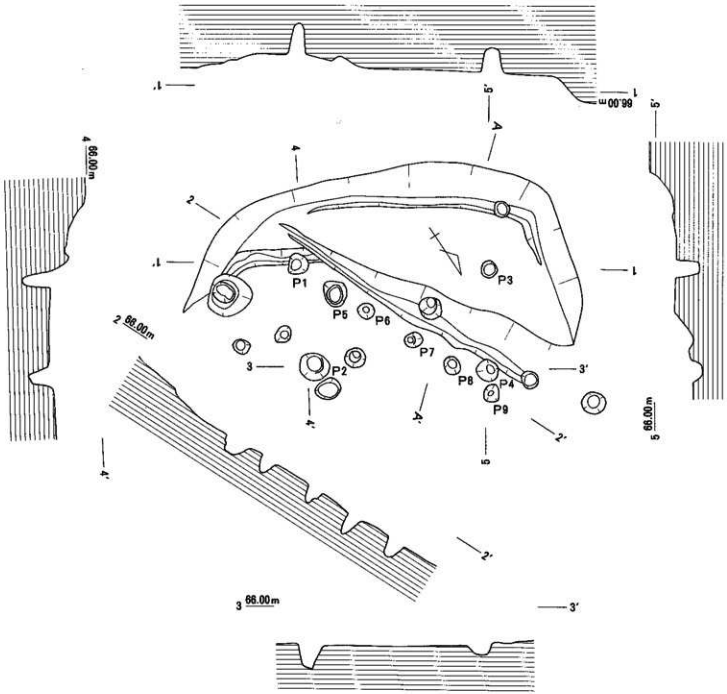
土器類は図示した須恵器の蓋坏の他には須恵器や土師器の小片が少し出土した。

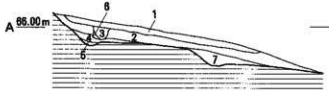
玉類は水晶製の未成品が３点、碧玉製の未成品が１点、瑪瑙製の未成品が４点が点出土した。

工具は筋砥石が出土した。この筋砥石は１面で玉を磨き、もう１面で鉄器を磨いている。



第30図　ＳＢ09出土遺物実測図（１・２はＳ＝１／３、３・４はＳ＝２／３、３は水晶、４は碧玉）





1. 濁淡黄灰褐色粘質土（炭、土器多く含む。砂やや多く含む）
2. 濁淡暗黒褐色粘質土（炭、土器やや多く含む。淡暗黄褐色土、褐色土少し含む）
3. 濁淡黄灰褐色粘質土（炭少し含む。砂多く含む）
4. 濁淡暗赤褐色粘質土（砂やや多く含む。炭、褐色土少し含む）
5. 淡暗赤褐色粘質土（砂少し含む。褐色土少し含む）
6. 淡黄灰褐色粘質土
7. 濁暗黄灰褐色粘質土（砂多く含む。赤褐色土少し含む）

0 2 m

第31図　ＳＢ08・09実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ08

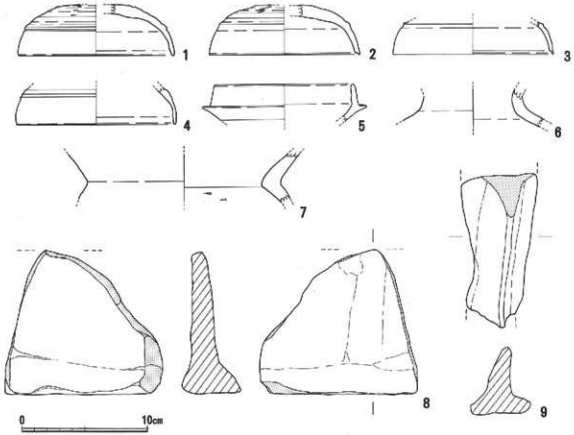
谷側に開いたやや台形状の加工段である。床面の平面形は現状で山側の幅4.2m、谷側の幅5.8m、奥行2.0mで、深さが40cm、床面の高さはＳＢ09より40cm高い標高65.8m前後を測る。壁体溝は南壁と西壁を巡っている。柱穴は４つ確認できた。やや横長の４本柱建物が建っていたものと思われる。遺構の時期は出土遺物から堂床３期と判断した。

ＳＢ08計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高	
		4.8m	2.0m	65.4m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（3.1m）			
柱穴（cm）	番　号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４
	上面径	33×33	48×42	27×26	36×36
	深　さ	48	36	36	18
柱間距離（m）		Ｐ１－２	Ｐ１－３	Ｐ３－４	Ｐ４－２
		1.6	3.1	1.6	2.8

ＳＢ08出土遺物（第32図・第33図）

土器類は図示した遺物の他には須恵器や土師器の小片がわずかに出土した。



第32図　ＳＢ08出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）

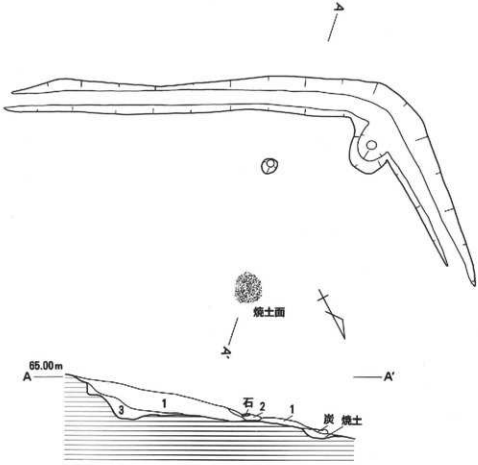
玉類は水晶製の未成品が3点、碧玉製の未成品が1点、瑪瑙製の未成品が4点が出土した。

工具類は瑪瑙製のハンマーが1点ほど出土している。このハンマーは棒状に加工されており、両端ともに敲打痕がある。

第33図　ＳＢ08出土遺物実測図(2)（Ｓ＝2／3）

ＳＢ10（第34図・図版14）

西区南側の斜面上段で検出した加工段で、ＳＢ08・ＳＢ09の東側に位置する。床面の平面形は現状で幅6.1m、奥行1.8mで、深さが約40cm、床面の高さは標高64.4m前後を測る。床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩の玉類の未成品等が出土したため玉作工房跡と判断した。



第34図　ＳＢ10実測図（Ｓ＝1／60）

ＳＢ10計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	6.1m	1.8m	64.4m

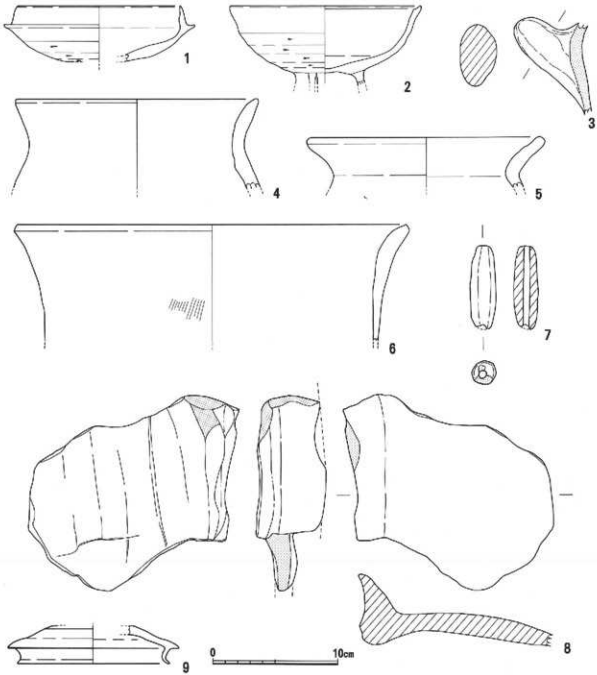
壁体溝は現状では南壁と西壁で確認できた。この壁体溝の角には直径約60cm、深さ約25cmのピットがある。このピットの性格は不明である。或いは工作用ピットの一種とも考えられなくもないが、このピットから特に多くの玉類の未成品やチップが出土するということは無かった。

床面に焼土面を確認した。この焼土面は地山が焼けたもので、ＳＢ01、ＳＢ06、ＳＢ07の様に盛り上がった焼土面ではなかった。この遺構の時期は出土遺物から堂床３期と判断した。

ＳＢ10出土遺物（第35図～第37図）

土器類は図示したもの以外には土師器と須恵器の小片が出土した。

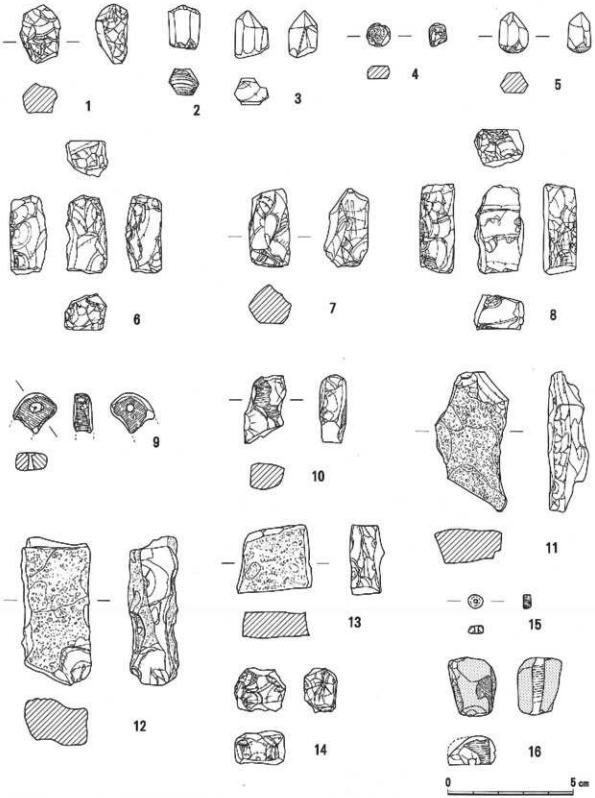
玉類は水晶製の未成品が９点、碧玉製の未成品が８点、瑪瑙製の未成品が12点、緑色凝灰岩製の未成品が２点出土した。このうち緑色凝灰岩製の未成品には管玉もしくは切子玉の未成品と思われ



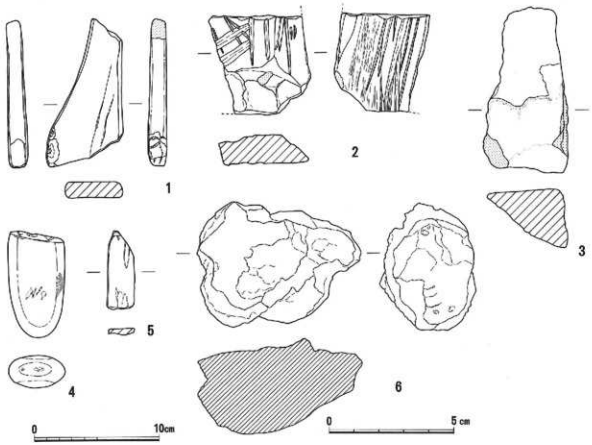
第35図　ＳＢ10出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）

るものが1点ほど出土している。この未成品はＳＢ10以外では出土していない。

工具類は玉用砥石、鉄器用筋砥石、ハンマーが出土した。玉用砥石には三角形の板状のものと、やや小さい板状のものが出土しているが、これらは辺を内磨き用として使用し、面を平砥石として使用したものと思われる。



第36図　ＳＢ10出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～５は水晶、６～８は碧玉、９～14は瑪瑙、15・16は緑泥片岩）



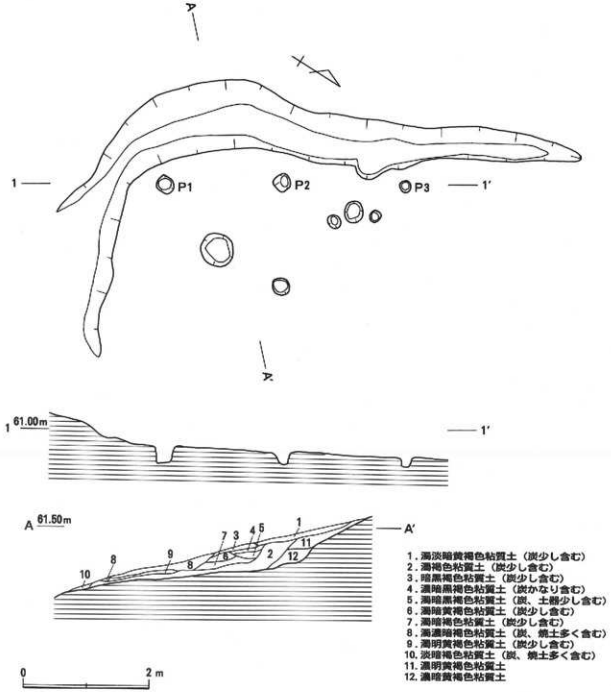
第37図　ＳＢ10出土遺物実測図(3)（1～5はＳ＝1／3、6はＳ＝2／3）

ＳＢ11（第38図・図版14）

西区西側の斜面中段で検出された遺構である。ＳＢ01の西側に位置する。床面の平面形は現状で幅7.6m、奥行3.3mで、深さが約80cm、床面の高さは標高60.8m前後を測る。壁体溝は南壁と西壁に残存している。南壁の壁体溝はラッパ状に開いて消滅している。西壁の壁体溝は削平のため途中で消滅している。西壁に沿ってピットが3つ並んでいる。或いは柱穴となるものかもしれない。遺構の時期は出土遺物からは詳細な時期の判断は難しく、土師器の形態と須恵器が出土していることから古墳時代後期としか判断できなかった。

ＳＢ11計測表

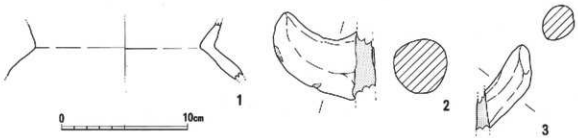
加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高
		7.6m	3.3m	60.8m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		2間（3.8m）		
柱穴（cm）	番　号	P1	P2	P3
	上面径	30×27	29×30	18×18
	深　さ	27	21	15
柱間距離（m）		P1－2	P2－3	
		1.9	2.0	



第38図　ＳＢ11実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ11出土遺物（第39図）

土器類は土師器の甕、把手が出土した。この他には土師器と須恵器の小片が出土した。



第39図　ＳＢ11出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＢ12（第41図・図版15）

西区南側の尾根上で検出した加工段である。ＳＢ06・07の西側、ＳＢ08・09の上方に位置している。全体的に削平を受けているため、遺物の出土量は少なかった。床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップや玉類の未成品が出土しており、玉作工房跡と判断した。

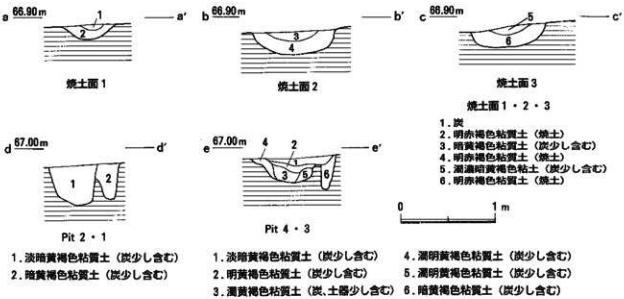
床面の平面形は現状で幅4.3m、奥行5.0mで、深さが約10cm、床面の高さは標高66.9m前後を測る。

壁体溝は南東側、南西側、北西側の三辺を巡っており、南隅と西隅はほぼ直角に曲がっている。南西側と北西側の壁体溝は削平のため途中で消滅している。

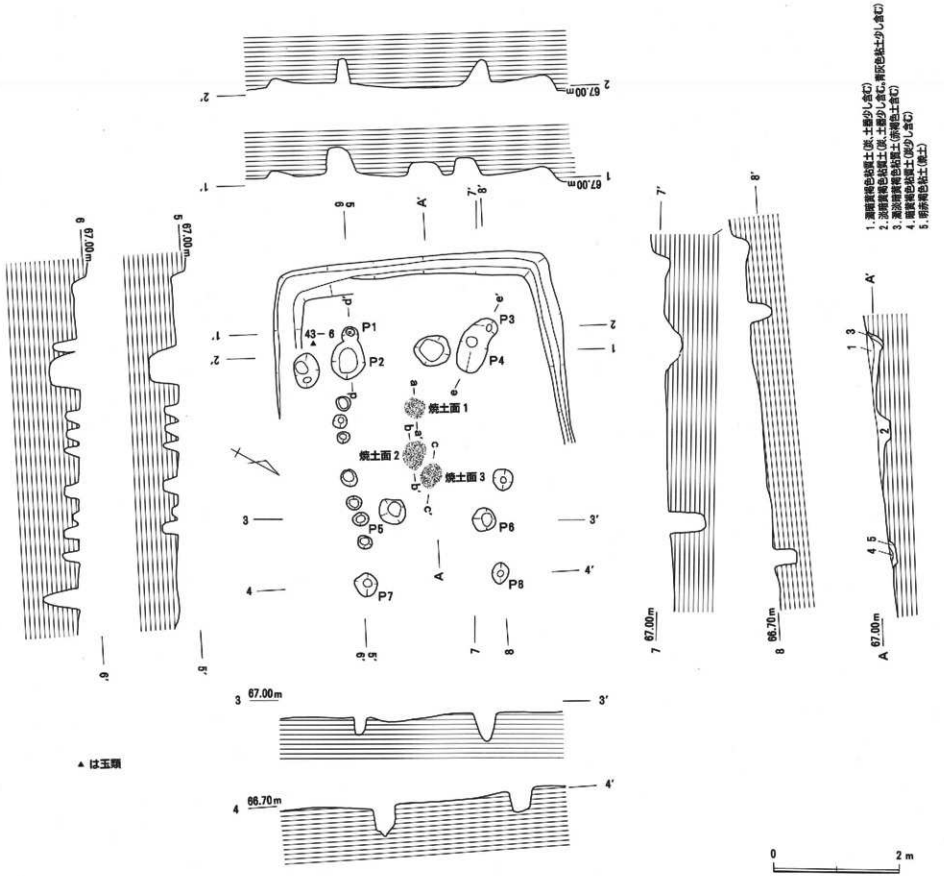
柱穴と思われるピットを８つ確認した。４本柱の掘立柱建物が２回ほど建てられたものと考えられる。問題はどのピットがどのピットに対応し、また、それぞれの建物がどのような先後関係にあったか、である。幸いにもＰ１・Ｐ２とＰ３・Ｐ４は切り合っており土層観察により、Ｐ１とＰ３がＰ２とＰ４より古いことがわかった（第40図）。次にＰ３とＰ４から直角の線上に位置するピットを調べると、Ｐ３はＰ８と対応し、Ｐ４はＰ６と対応し、Ｐ８はＰ７と対応し、Ｐ６はＰ５とそれぞれが対応する。以上のことからＰ１－Ｐ３－Ｐ７－Ｐ８が古い掘立柱建物（掘立柱建物Ａ）の柱穴で、Ｐ２－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６が新しい掘立柱建物（掘立柱建物Ｂ）の柱穴であると判断した。また、これら８つの柱穴以外に、南東側に沿ってほぼ一列に並んでいるピットを６つ確認した。これらのピットは建物の壁を構成した柱穴の可能性もあるが、２つある掘立柱建物のどちらに伴うピットであるかはわからない。

床面に焼土面を３つ確認した。いずれも地山が熱を受けて硬化したもので、ＳＢ01などのように張り床をして盛り上がった焼土面ではない。またこれらの焼土面は中央がやや窪んでおり、その窪みからは炭化物が出土した（第40図）。

遺構の時期は出土遺物から堂床３期と判断した。



第40図　ＳＢ12焼土面とPit１～４の土層図（Pit １・２・３・４はＳ＝１／40）



第41図　ＳＢ12実測図（Ｓ＝１／60）

SB12－A計測表

加工段の規模		幅行き	奥行き	標高	
		4.3m	5.0m	66.9m	
建物の規模		梁行き		桁行き	
		1間（4.0m）		1間（2.2m）	
柱穴（cm）	番号	P1	P3	P7	P8
	上面径	24×27	24×33	38×38	27×36
	深さ	42	36	60	9
柱間距離（m）		P1－3	P3－8	P8－7	P7－1
		2.2	3.9	2.1	4.0

SB12－B計測表

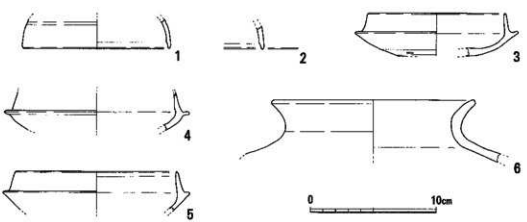
加工段の規模		幅行き	奥行き	標高	
		4.3m	5.0m	66.9m	
建物の規模		梁行き		桁行き	
		1間（2.7m）		1間（2.0m）	
柱穴（cm）	番号	P2	P4	P5	P6
	上面径	57×60	48×69	24×24	36×38
	深さ	42	39	57	60
柱間距離（m）		P2－4	P4－6	P6－5	P5－2
		2.0	2.7	2.0	2.6

SB12出土遺物（第42図・第43図）

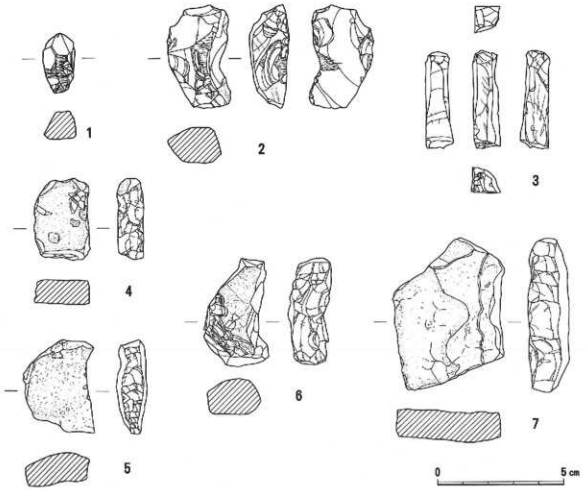
土器類は須恵器の蓋坏と土師器の甕の他に土師器と須恵器の小片が出土した。

玉類は水晶製の未成品が6点、碧玉製の未成品が4点、瑪瑙製の未成品が12点、緑泥片岩製の未成品が1点出土した。異なる材質の玉も混在して出土した。

工具類は砥石の破片が出土している。



第42図　SB12出土遺物実測図(1)（S＝1／3）



第43図　ＳＢ12出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１は水晶、２・３は碧玉、４～７は瑪瑙）

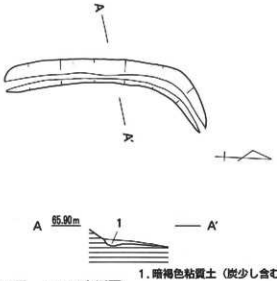
ＳＢ13（第44図・図版16）

西区西側の斜面中段で検出された遺構である。ＳＢ08・9の西側に近接している。大きく削平された加工段で、わずかに壁体溝と床面の一部を残すのみで、その他はほとんど流失している。

床面の平面形は現状で幅2.8ｍ、奥行0.8ｍで、深さが約５㎝、床面の高さは標高65.7ｍ前後を測る。

壁体溝は西壁と北壁に残存している。

遺物は何も出土しなかった。また遺構の時期も不明である。



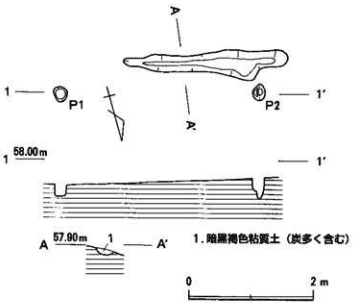
第44図　ＳＢ13実測図
（Ｓ＝１／60）

ＳＢ13計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	2.8m	0.8m	65.7m

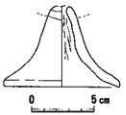
ＳＢ14（第46図・図版16）

西区東側斜面下段にある加工段で、削平をかなり受けている。規模は現状で幅4.1ｍ、奥行0.6ｍで、深さが約５㎝、床面の高さは標高57.8ｍ前後を測る。壁体溝が南側に残存し、柱穴は２つ確認した。遺構の時期は古墳時代後期と思われる。



ＳＢ14出土遺物（第45図）

遺物は上師器の高坏が出土した。



第45図 ＳＢ14出土遺物実測図（S＝1/3）

第46図 ＳＢ14実測図（S＝1／60）

ＳＢ14計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高	
		4.1m	0.6m	57.8m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（3.2m）			
柱穴（cm）	番　号	P１	P２		
	上面径	21×24	21×27		
	深　さ	18	33		
柱間距離（m）		P１－２			
		3.2			

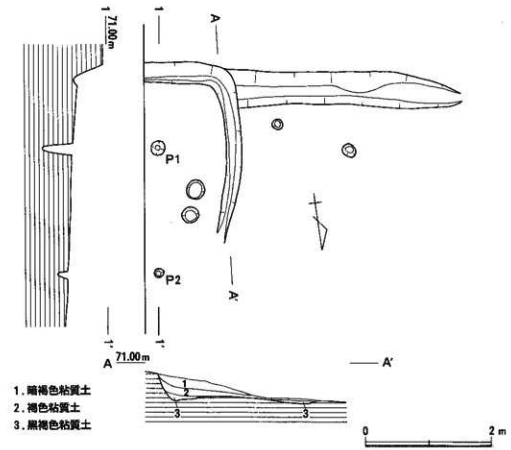
ＳＢ15・16（第47図・図版17）

東区東側の斜面上段で検出された遺構である。２つの加工段が切り合っており土層からＳＢ16がＳＢ15を切っていることがわかった。また、ＳＢ15の床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップや玉類の未成品が出土したため、玉作工房跡と判断した。ＳＢ16の床面からはチップなどは出土しなかったが、遺構の大半が調査区外にあり、玉作工房跡かどうかを判断することは難しい。

ＳＢ15

床面の平面形は現状で幅3.5ｍ、奥行2.5ｍで、深さが約30㎝、床面の高さは標高70.50ｍ前後を測る。壁体溝は南側にだけ残存している。

遺構の時期は出土遺物から堂床４期と判断した。



第47図　ＳＢ15・16実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ15計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	3.5m	2.5m	70.5m

ＳＢ16計測表

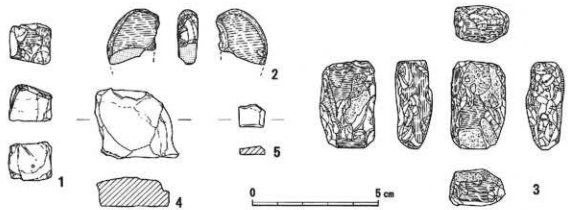
加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高
		1.3m	3.7m	70.5m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		1間（2.0m）		
柱穴（cm）	番　号	P１	P２	
	上面径	21×24	15×17	
	深　さ	48	15	
柱間距離（m）		P１－２		
		2.0		

ＳＢ15出土遺物（第48図）

土器類は須恵器の蓋坏の他、須恵器片や土師器片が出土した。

玉類は水晶製の未成品が８点、碧玉製の未成品が２点、緑泥片岩製の未成品が18点出土した。

第48図 ＳＢ15出土遺物実測図1)（Ｓ＝1/3）



第49図　ＳＢ15出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１は碧玉、２・３は瑪瑙、４・５は緑泥片岩）

ＳＢ16

遺構の大半は調査区外にあり、加工段の西側の一部しか発掘調査ができなかった。床面の平面形は、確認できる範囲では幅1.3m、奥行3.7mで、深さが約30cm、床面の高さは標高70.5m前後を測る。

柱穴と思われるピットを２つ確認した。また、壁体溝も残存しており、南側と西側を巡っている。この壁体溝の南西隅はほぼ直角に曲がっている。

遺物は須恵器や土師器の小片がわずかに出土しているが、詳細な時期を判断できるものは出土していない。従って遺構の時期は出土遺物からは古墳時代後期としか判断できないが、ＳＢ15よりも新しい時期であることから、古墳時代後期で、堂床４期以降ではあると思われる。

ＳＢ17（第50図）

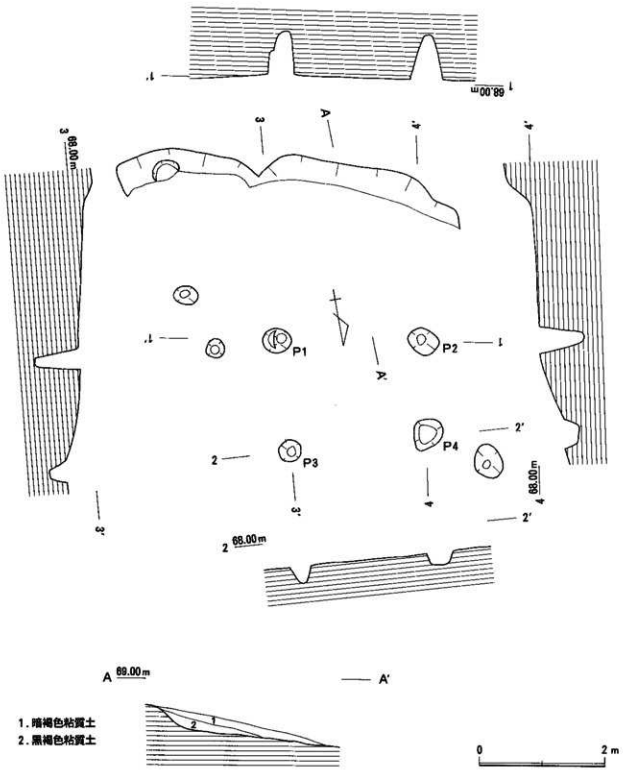
東区東側の斜面上段で検出された加工段である。ＳＢ15・ＳＢ16の下方に位置している。床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップや玉類の未成品が出土したため玉作工房跡と判断した。遺構の一部は調査区外まで延びており、また谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅5.4m、奥行4.5mで、深さが約40cm、床面の高さは標高68.2m前後を測る。

柱穴と思われるピットを壁からやや離れた位置で４つ確認した。また壁体溝は確認できなかった。

遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

ＳＢ17計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高	
		5.4m	4.5m	68.2m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（2.3m）		1間（1.8m）	
柱穴（cm）	番　号	Ｐ1	Ｐ2	Ｐ3	Ｐ4
	上面径	39×45	45×51	33×36	45×57
	深　さ	72	72	27	21
柱間距離（m）		Ｐ1－2	Ｐ2－4	Ｐ4－3	Ｐ3－1
		2.3	1.5	2.2	1.8



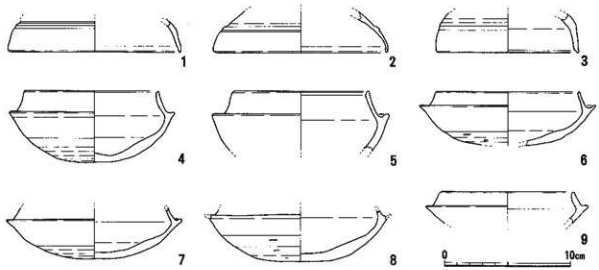
第50図　ＳＢ17実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ17出土遺物（第51図・第52図）

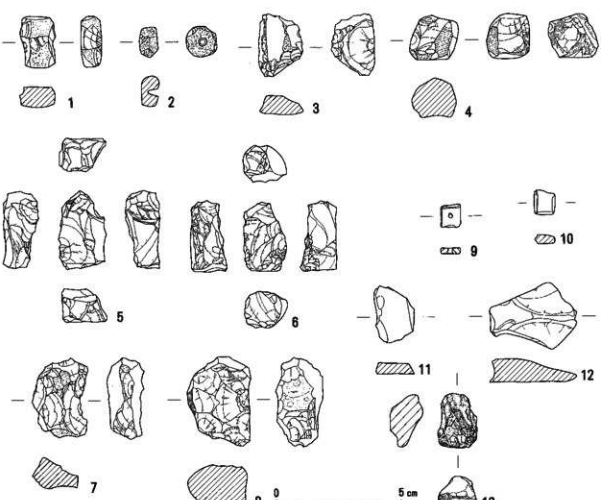
土器類は須恵器の蓋坏や土師器の甕片などの他には須恵器や土師器の小片が出土している。

玉類は水晶製の未成品が５点、碧玉製の未成品が６点、瑪瑙製の未成品が３点、緑泥片岩製の未成品が259点出土した。他の遺構に比べて緑泥片岩製の未成品の出土量がかなり高い。

工具類では瑪瑙製のハンマーの他に砥石片が出土している。



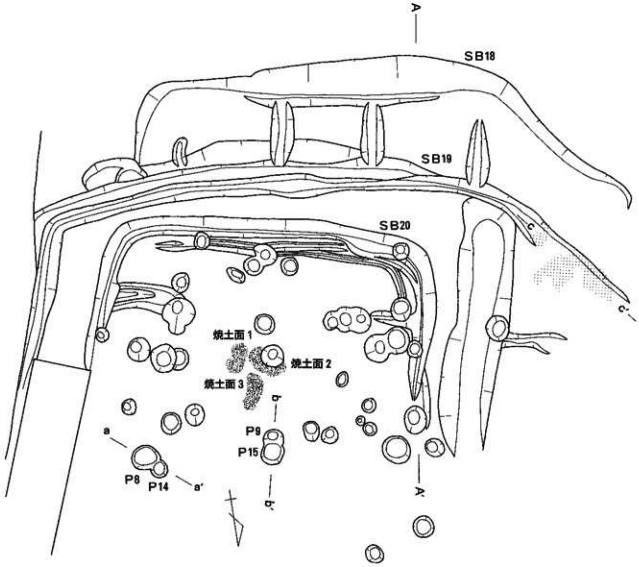
第51図　ＳＢ17出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）

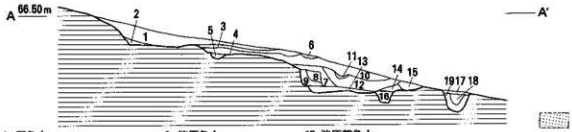


第52図　ＳＢ17出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～３は水晶、４～６は碧玉、７・８は瑪瑙、９～12は緑泥片岩）

ＳＢ18～20（第53図・図版18）

東区東側の斜面中段に位置する加工段である。ＳＢ17の下方に位置する。３つの加工段が切り合っており、土層からＳＢ20、ＳＢ19、ＳＢ18の順で切り合っていることがわかった。ＳＢ18～19の床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップや玉類の未成品が出土したため玉作工房跡と判断した。また焼土面を３つ確認している。以下時期の古い順に説明を行う。





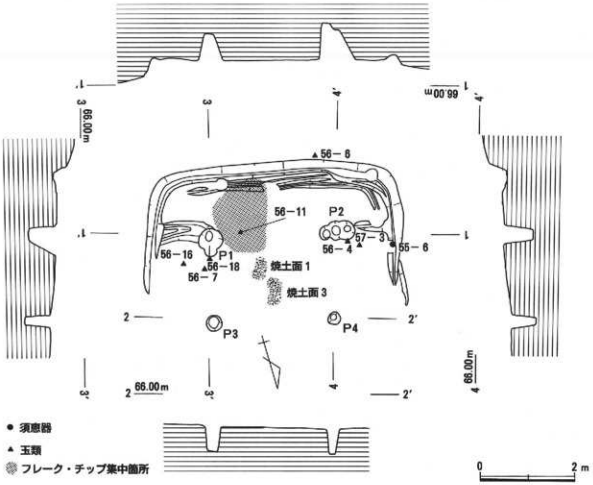
1．灰色土
2．灰白色土
3．淡赤茶色土（ＳＢ18床面）
4．灰色土
5．淡灰白色土
6．淡赤茶色土
7．淡灰茶白色土（ＳＢ19床面）
8．淡灰色土
9．暗灰色土
10．灰色土
11．青灰色土
12．暗灰色土（ＳＢ19床面）
13．赤灰色土
14．赤灰色土
15．淡灰茶色土
16．茶褐色粘質土
17．暗褐色粘質土
18．暗茶褐色土
19．暗橙茶褐色粘質土

0　2 m

第53図　ＳＢ18～20実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ20（第54図）

ＳＢ18～ＳＢ20のなかで最も古く、また規模が最も小さな加工段である。谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅5.2ｍ、奥行4.0ｍで、深さが約45㎝、床面の高さは標高65.3ｍを測る。



第54図　ＳＢ20実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ20計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高	
		5.2m	4.0m	65.3m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（2.0m）		1間（1.4m）	
柱穴（cm）	番　号	P1	P2	P3	P4
	上面径	42×45	20×30	24×26	21×21
	深　さ	42	60	42	39
柱間距離（m）		P1－2	P2－4	P4－3	P3－1
		2.0	1.4	1.9	1.3

土柱穴と思われるピットを４ヶ所確認した。このうちＰ２は３つのピットが切り合っている柱穴である。

焼土面は３つ確認した。これらの焼土面はいずれも地山が硬化したもので、ＳＢ06・ＳＢ07と同様のものである。

壁体溝には東側、南側、北側を巡るものが１つあり、その南側の内側には２つの壁体溝が巡っている。この３条の壁体溝は切り合っておりその先後関係は、内側のものが最も古く、次いで真ん中のものが古く、外側のものが一番新しい。つまりこの加工段の壁体溝は山側へ拡張していったことがわかる。また、西側には一番新しい壁体溝に切られた壁体溝がわずかに残存している。この西側の壁体溝は最も古い壁体溝か次に古い壁体溝の一部と思われるが、どちらの壁体溝の一部かはわからない。以上の様にＳＢ20には３条の壁体溝があり、少なくとも２回は壁体溝の造り直しが行われていたことがわかる。その際、掘立柱建物も壁体溝の造り直し同様に建て直しが行われたのかが問題となる。この加工段では現状で４本柱の掘立柱建物を１棟しか復元できなかった。これは①建物は造り直さなかった場合と、②建物を造り直す際にＰ２以外の柱穴は再利用した場合と、③新しい柱穴を掘り建て直しをおこなった場合が考えられる。Ｐ２の存在を考慮すると②の場合の可能性が高いと思われる。

その他の遺構にＰ１、Ｐ２から壁体溝に延びる溝を確認しているが、性格は不明である。

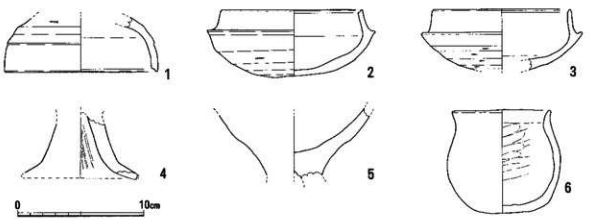
遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

ＳＢ20出土遺物（第55図～第58図）

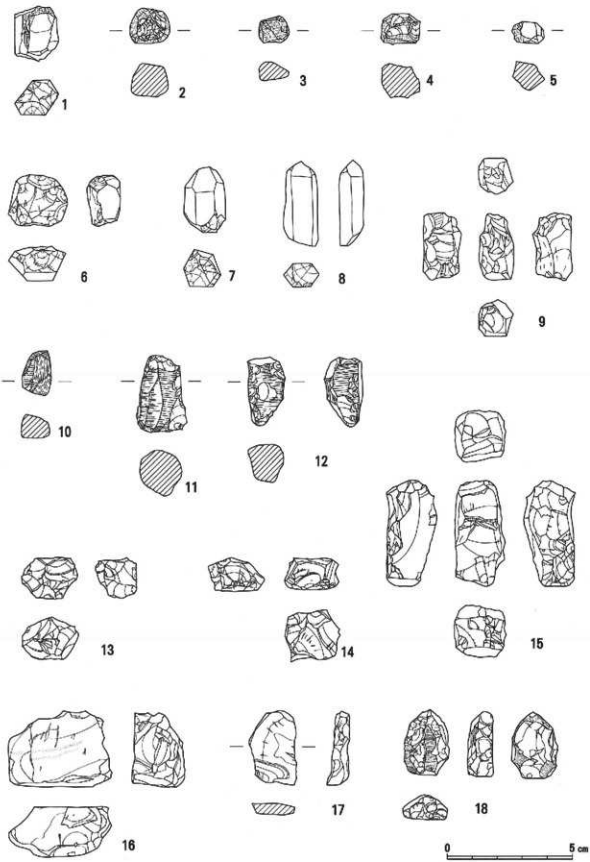
土器類は須恵器の蓋坏、土師器の高坏や甕の他には、須恵器や土師器の小片が出土している。

玉類は床面全体から混在して出土している。水晶製の未成品が33点、碧玉製の未成品が13点、瑪瑙製の未成品が６点、緑泥片岩製の未成品が18点が出土した。また、濃紺色のガラス製小玉が１点ほど出土している。ガラス製の玉は当遺跡からはこの１点しか出土していない。

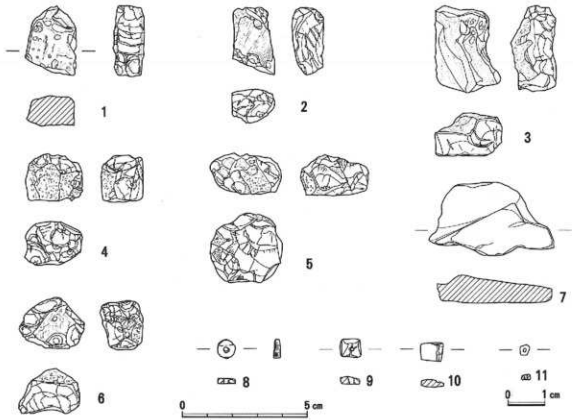
工具類は鉄器類、瑪瑙製のハンマー、砥石片が出土している。このうち瑪瑙製のハンマーは塊状のものと、円板状のものがある。



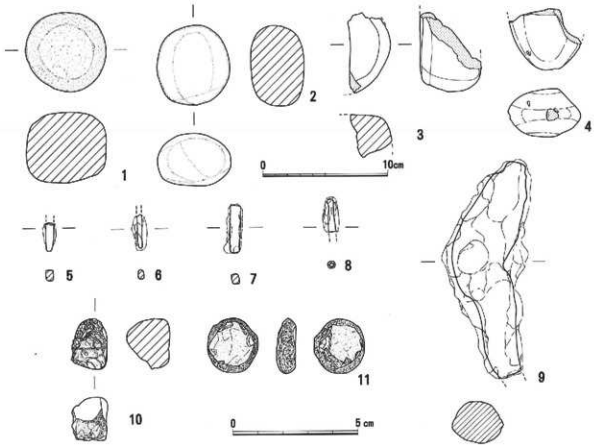
第55図　ＳＢ20出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第56図　ＳＢ20出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～８は水晶、９～16は碧玉、17・18は瑪瑙）



第57図　ＳＢ20出土遺物実測図(3)（1～10はＳ＝2／3、11はＳ＝1／1、1～6は瑪瑙、7～10は緑泥片岩、11はガラス）



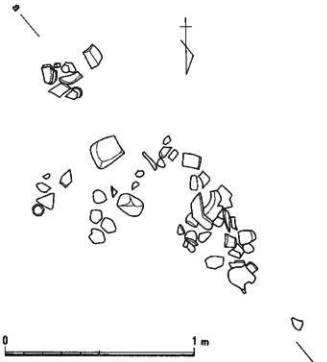
第58図　ＳＢ20出土遺物実測図(4)（1～4はＳ＝1／3、5～11はＳ＝2／3）

ＳＢ19（第61図～第63図）

谷側にやや開いた台形状をした加工段である。遺構の東側の一部は調査区外に延びており、谷側の床面の一部は流失している。床面の平面形は現状で山側の幅5.6m、谷側の幅7.6m、奥行2.2mで、深さが約20cm、床面の高さは標高65.9m前後を測る。壁体溝は東側、南側、西側を巡っている。南東隅はやや直角に曲がっているが、南西隅は開き気味に曲がっている。

加工段内の西側に南北に延びる溝が１つある。この溝は幅80cm前後、長さ4.1m、深さが15cmで、南端の底が最も高く標高65.7mで、北端の底が最も低く標高65.1mで谷に向かって傾斜している。この溝の西側中程から浅い溝が西側に延びている。溝の中からは土器や玉類や工具類などの遺物は出土しなかった。この溝の性格は不明である。

この加工段からは柱穴と思われるピットを16確認した。その配置から１間２間の掘立柱建物が３棟あったと考えられる。これらの掘立柱建物を仮にＡ（Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ10）、Ｂ（Ｐ11・Ｐ12・Ｐ13・Ｐ14・Ｐ15・Ｐ16）、Ｃ（Ｐ17・Ｐ18・Ｐ19・Ｐ20）とする。Ｐ８とＰ14の切り合い、Ｐ９とＰ15の切り合いからＢよりもＡが新しいことがわかった。Ｃは切り合いなどが不明なため、ＡやＢとの先後関係はわからないが、ＢがＡより山側に移動していることを考えると、ＣはＡ・Ｂよりも後出する可能性が高い。



第59図　ＳＢ19遺物出土状況（Ｓ＝１／20）

加工段の西側ではまとまって土器等が出土した（第59図）。この土器群の中からは砥石（第66図－２）も出土している。

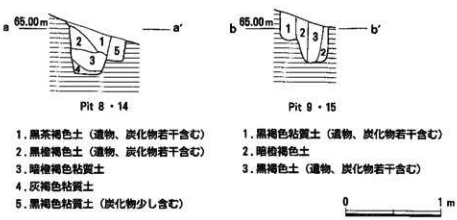
遺構の時期は須恵器の坏蓋から２期と判断した。

ＳＢ19の出土遺物

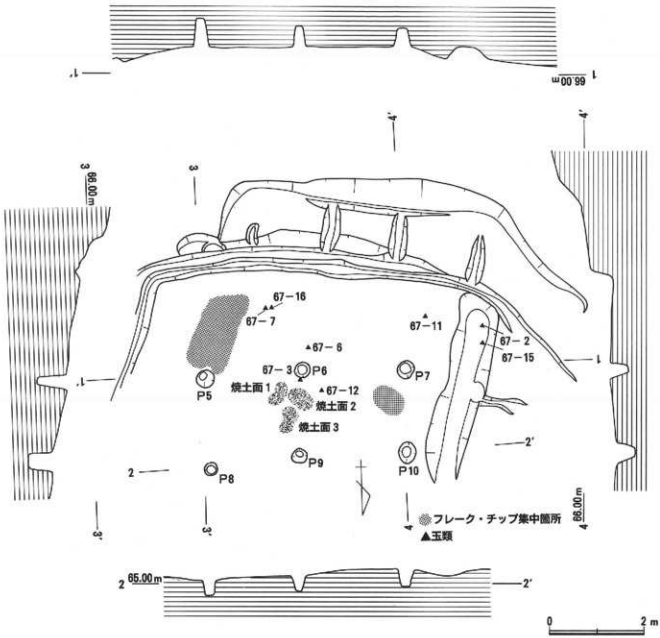
（第64～第67図）

土器類は図示したもの以外には須恵器や土師器の小片が出土した。出土土器類の大半は加工段西側の土器群である。

玉類は水晶製の未製品が８点、碧玉製の未成品が８点、瑪



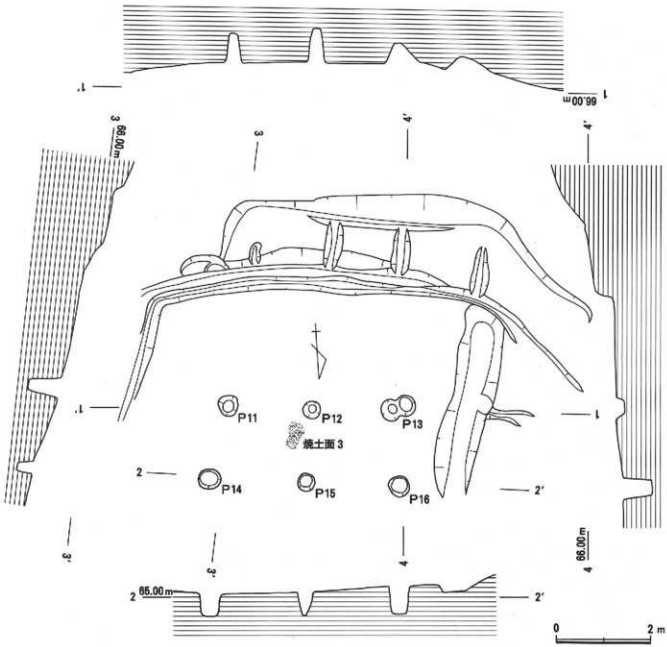
第60図　ＳＢ19　Pit ８・14・９・15土層図（Ｓ＝１／40）



第61図　ＳＢ19－Ａ実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ19－Ａ計測表

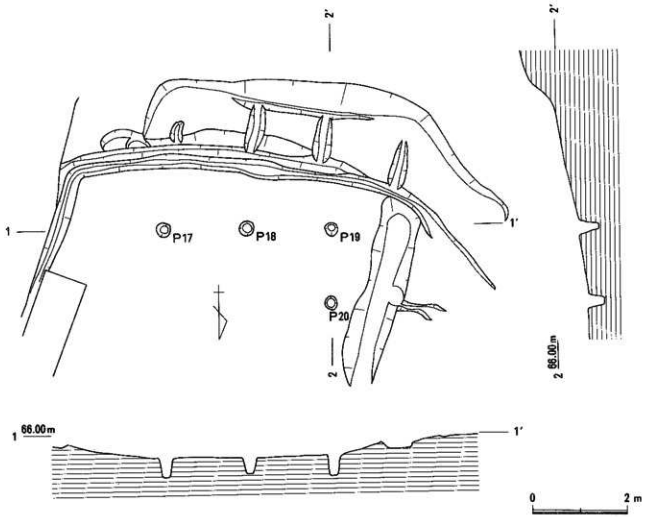
加工段の規模		幅　行　き		奥　行　き		標　　高	
		5.6m		2.2m		65.9m	
建物の規模		梁　行　き			桁　行　き		
		2間（3.3m）			1間（1.3m）		
柱穴（cm）	番　号	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９	Ｐ10
	上面径	27×29	24×24	27×27	35×36	24×24	27×33
	深　さ	47	33	30	36	24	27
柱間距離（m）		Ｐ１－３	Ｐ２－３	Ｐ３－６	Ｐ６－５	Ｐ５－４	Ｐ４－１
		1.6	1.7	1.3	1.7	1.6	1.3



第62図　ＳＢ19－Ｂ実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ19－Ｂ計測表

加工段の規模		幅　行　き		奥　行　き		標　高	
		5.6m		2.2m		65.9m	
建物の規模		梁　行　き			桁　行　き		
		2間（2.9m）			1間（1.3m）		
柱穴（cm）	番　号	P11	P12	P13	P14	P15	P16
	上面径	30×33	27×27	27×33	21×21	27×29	33×33
	深　さ	45	54	33	24	36	45
柱間距離（m）		P1－2	P2－3	P3－6	P6－5	P5－4	P4－1
		1.4	1.3	1.2	1.5	1.4	1.4



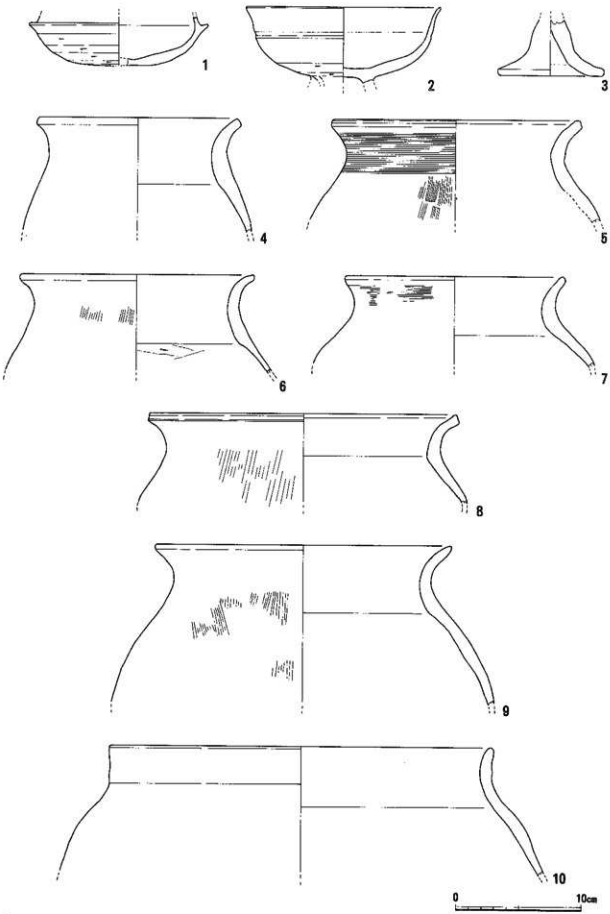
第63図　ＳＢ19－Ｃ実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ18－Ａ計測表

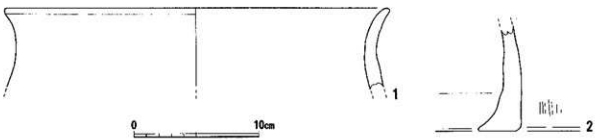
加工段の規模		幅行き		奥行き		標高	
		4.1m		2.4m		66.0m	
建物の規模		梁行き			桁行き		
		2間（2.7m）			1間（1.2m）		
柱穴（cm）	番号	P17	P18		P19	P20	
	上面径	23×23	21×21		21×21	18×21	
	深さ	30	24		33	26	
柱間距離（m）		P1－2	P2－3		P3－4		
		1.4	1.4		1.2		

瑞製の未成品が９点、緑泥片岩製の未成品が20点出土した。玉類は床面の全面に異なる石材が混在して出土した。

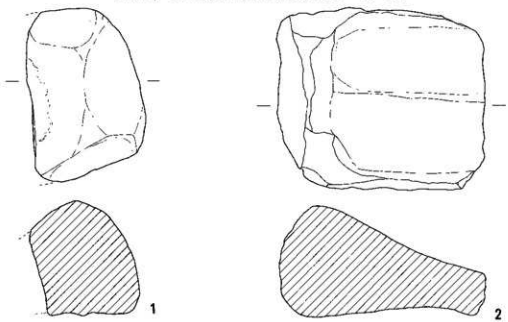
工具類では砥石が２点ほど出土した。この内の１点（第66図－３）は玉用の筋砥石と台石と兼ねたものである。またこの砥石の一面には玉用の筋状砥面に並行して、筋状の擦過痕がある。

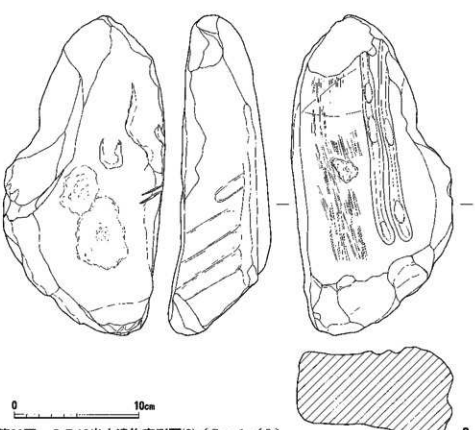


第64図　ＳＢ19出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）

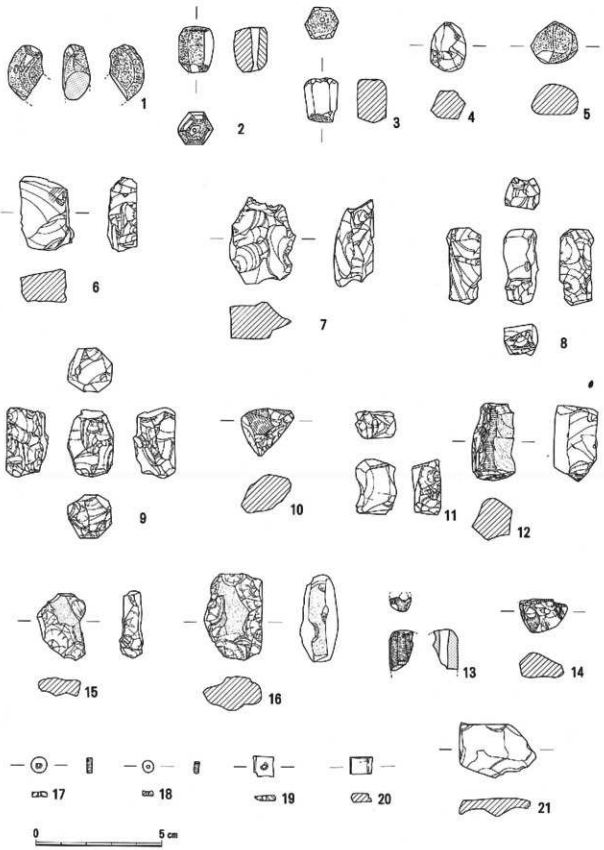


第65図　ＳＢ19出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）





第66図　ＳＢ19出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１／３）



第67図　ＳＢ19出土遺物実測図(4)（Ｓ＝２／３、１～５は水晶、６～14は碧玉、15・16は瑪瑙、17～21は緑泥片岩）

ＳＢ18

ＳＢ18～ＳＢ20のなかでは最も新しい遺構である。谷側にやや開いた台形状の加工段となっている。谷側の床面の大半は流失している。

床面の平面形は現状で山側の幅4.1ｍ、谷側の幅5.8ｍ、奥行2.4ｍで、深さが約40㎝、床面の高さは標高66.0ｍ前後を測る。

壁体溝は加工段南側のほぼ中央付近で確認した。この壁体溝は現状では幅20㎝、長さ3.1ｍを測る。柱穴と思われるようなピットは確認できなかった。

この他にＳＢ18では、南北に延びる小さな溝を４つ確認した。この溝は深さが７～９㎝で、幅が東端の溝が約20㎝、他の３つが約35㎝を測り、ほぼ80㎝間隔で加工段の南壁に対して垂直に延びる形で平行に並んでいる。これら４つの溝のうち、中央の２つは壁体溝に繋がっている。これらの溝からは玉類の未成品やチップ等の玉作関係の遺物が特に多く出土しているわけでもなく、その性格は不明である。

遺構の時期は出土遺物から堂床３期と判断した。

ＳＢ18計測表

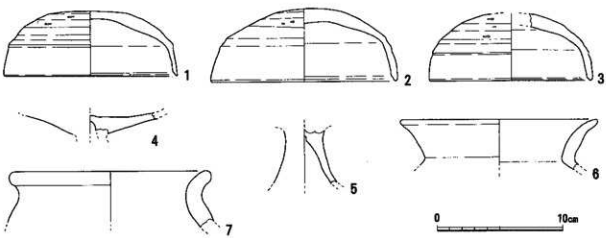
加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	7.0m	2.4m	66.0m

ＳＢ18出土遺物（第68図～第72図）

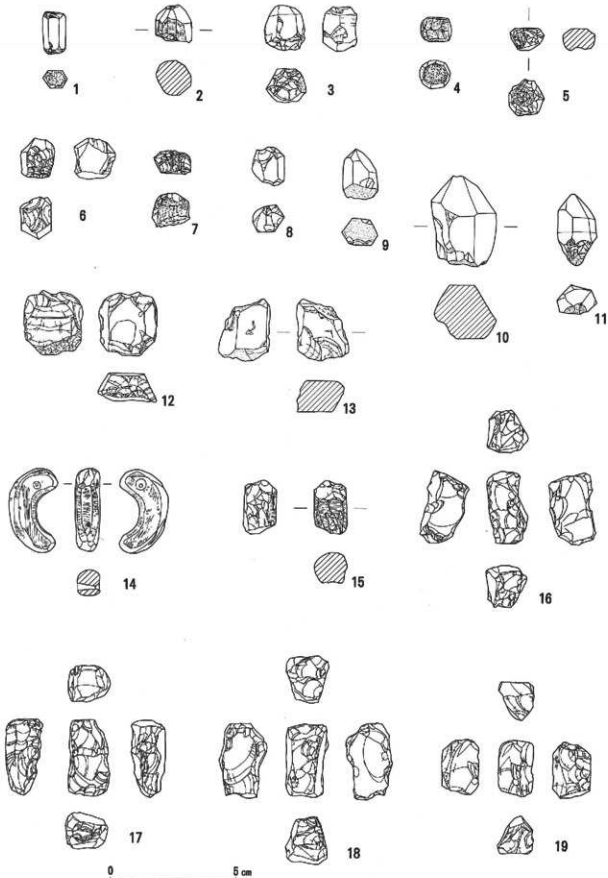
土器類では須恵器の蓋坏、土師器の高坏や甕の他には、須恵器や土師器が少量出土している。

玉類では水晶製の未成品が45点、碧玉製の未成品が47点、瑪瑙製の未成品が18点、緑泥片岩製の未成品が122点出土した。玉類は床面の全面に異なる石材が混在して出土した。また、緑泥片岩製の未成品が他の遺構に比べて多く出土している。

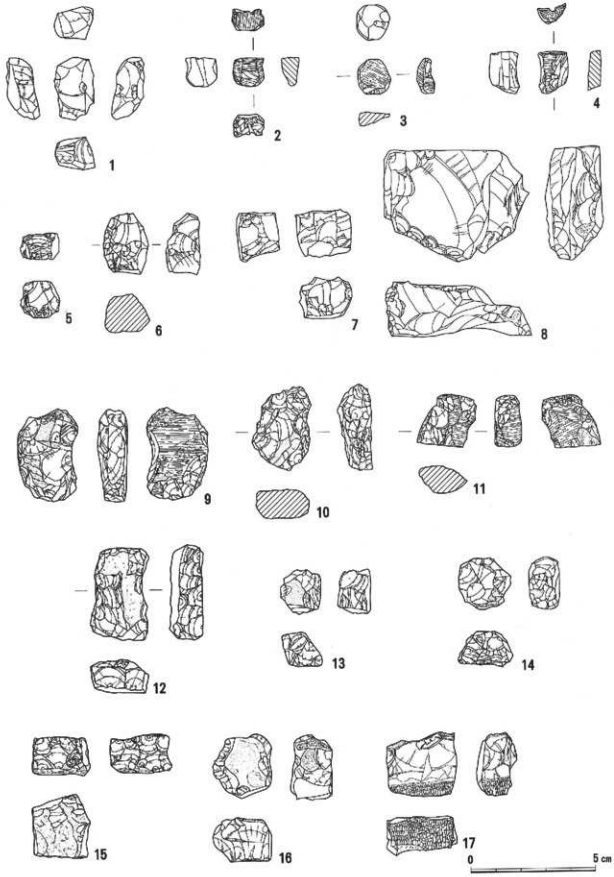
工具類では棒状の鉄器が５点ほど出土している。この他に、割合多くの砥石片が出土している。



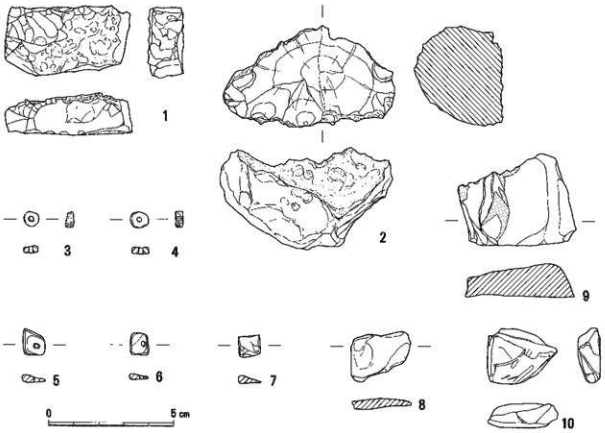
第68図　ＳＢ18出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



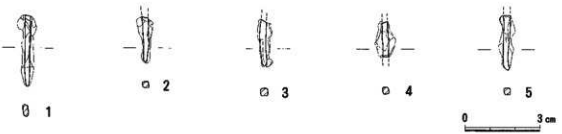
第69図　ＳＢ18出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～13は水晶、14～19は碧玉）



第70図　ＳＢ18出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３、１～８は碧玉、９～17は瑪瑙）



第71図　ＳＢ18出土遺物実測図(4)（Ｓ＝２／３、１・２は瑪瑙、３～10は緑泥片岩）



第72図　ＳＢ18出土遺物実測図(5)（Ｓ＝２／３）

ＳＢ21・22・55（第74図・図版23）

東区東側の斜面中段に位置する遺構である。ＳＢ18～20の西側に隣接しており、３つの加工段が切り合っている。土層などからＳＢ22が最も古く、次いでＳＢ55、そしてＳＢ21が最も新しいことがわかった。また、ＳＢ21、ＳＢ22の床面からは水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩のチップや未製品が出土したため未作工房跡と判断した。ＳＢ55は玉作工房跡に挟まれてはいるが床面からチップや未成品等が出土していないため玉作工房跡ではないと判断した。玉作工房跡ではほぼ全面にチップ等が存在するため、例え残存する床面がわずかであっても玉作工房跡であればわずかな面積からもチップ等が出土するからである。以下、古い遺構の順に説明を行う。

ＳＢ22

谷側の床面は流失している。規模は現状で幅7.1ｍ、奥行2.1ｍで、深さが約30㎝、床面の高さは標高65.3ｍ前後を測る。壁体溝は東側・西側・南側を巡り、壁体溝のコーナーはほぼ直角に曲がっている。柱穴は４つ確認した。また南壁中央付近には壁体溝と溝で連結する深さ４㎝、縦70㎝、横50㎝の浅いピットを確認した。このピット内からは多量のチップなどが出土したことから工作用ピットの可能性が高いと考えられる。その他ＳＢ20でも見られた柱穴に繋がる溝をＰ３と西側の壁体溝との間で確認した。この溝は深さが４㎝、幅15㎝、長さ110㎝を測る。

遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

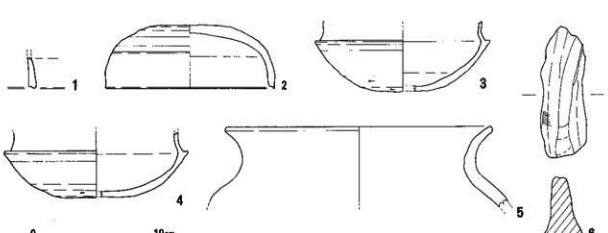
ＳＢ22計測表

加工段の規模		幅行き	奥行き	棟高	
		7.1m	2.1m	65.3m	
建物の規模		桁行き		梁行き	
		1間（3.9m）		1間（3.0m）	
柱穴（㎝）	番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４
	上面径	59×62	57×63	32×33	27×29
	深さ	87	90	41	23
柱間距離（m）		Ｐ１－２	Ｐ２－４	Ｐ４－３	Ｐ３－１
		4.1	2.8	3.9	3.0

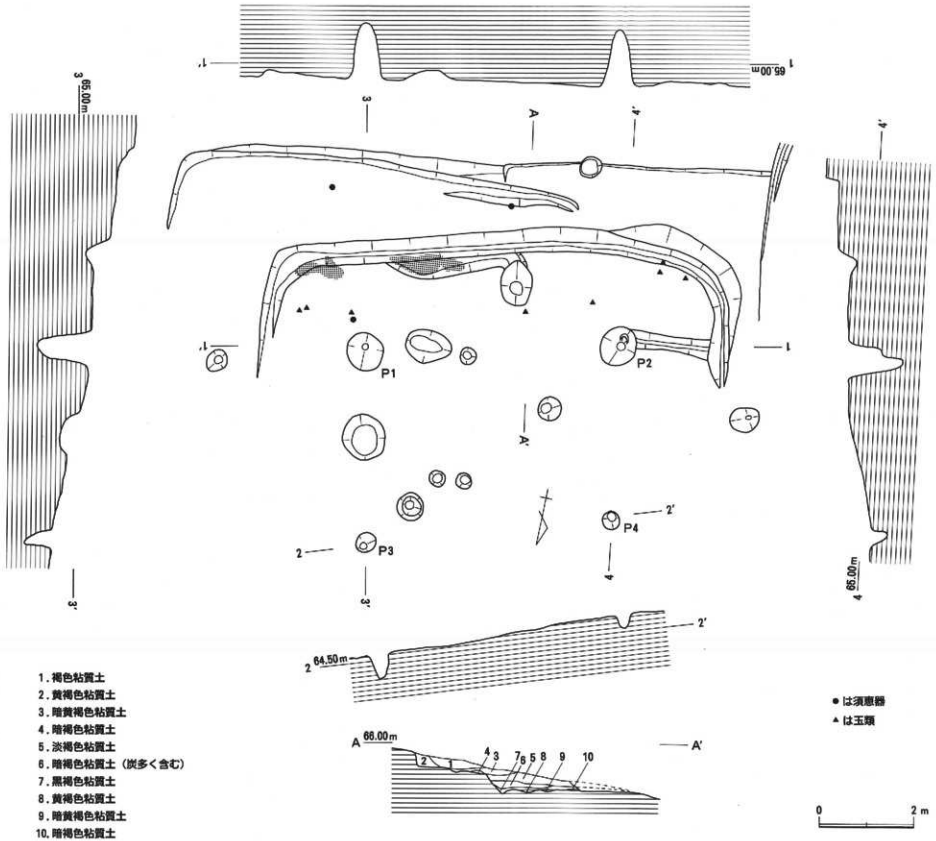
ＳＢ22出土遺物（第73図・第75図～第77図）

土器類では図示したもの以外に、須恵器や土師器の小片が出土した。玉類は水晶製の未成品が49点、碧玉製の未成品が25点、瑪瑙製の未成品が７点、緑泥片岩製の未成品が95点出土した。玉類は床面の全面に異なる石材が混在して出土した。

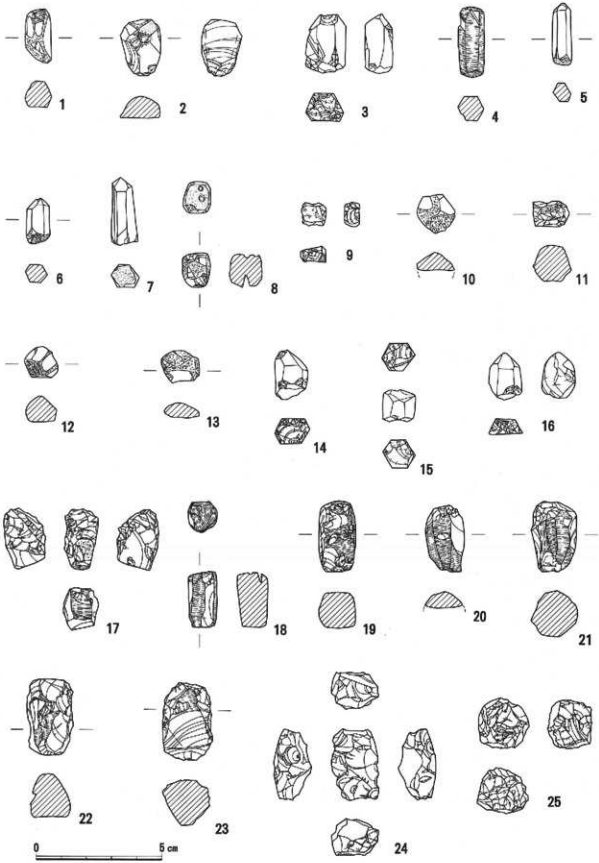
工具類は瑪瑙製ハンマー、棒状の鉄器、砥石片が出土している。



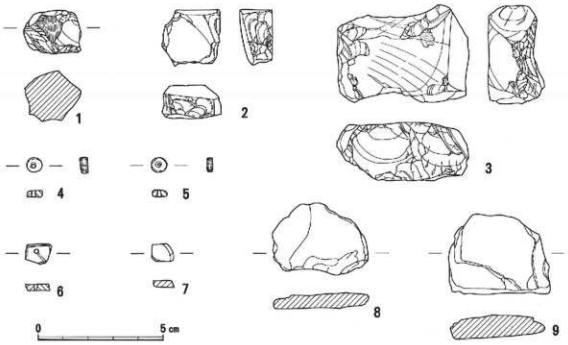
第73図　ＳＢ22出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



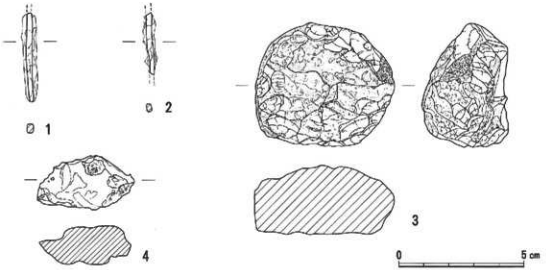
第74図　ＳＢ21・22実測図（Ｓ＝１／60）



第75図　ＳＢ22出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～16は水晶、17～23・25は碧玉、24は白瑪瑙）



第76図　ＳＢ22出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３、１～３は碧玉、４～９は緑泥片岩）



第77図　ＳＢ22出土遺物実測図(4)（Ｓ＝２／３）

ＳＢ55

残存状況の悪い遺構である。西側はＳＢ23によって削平されており、東側と北側はＳＢ21によって大半を削平されている。加工段の平面形は、南北隅がほぼ直角に加工されていることや南壁がほぼ直線に延びていることから、長方形もしくは正方形であったと考えられる。床面の大きさは現状で幅4.1ｍ、奥行2.2ｍで、深さが約20cm、床面の高さは標高65.7ｍ前後を測る。

壁体溝や柱穴の可能性のあるピットを確認することはできなかった。

出土遺物は土師器の小片が出土するのみである。従って詳細な遺構の時期も遺物からは推定できなかった。ただし、ＳＢ22より後出しＳＢ23（堂床２期）より先行するので、堂床２期ではあると思われる。

ＳＢ55計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	4.0m	1.0m	65.6m

ＳＢ21

3棟の加工段のなかで最も新しく、最も規模の大きい加工段である。谷側の床面は流失している。加工段は東西のコーナーはほぼ直角に曲がり南壁が直線に延び、長方形を成している。また、ＳＢ55の長軸がＳＢ22の長軸に対して平行しているのに比べてＳＢ21の長軸はＳＢ55やＳＢ22の長軸に対してやや西に傾いている。床面の大きさは平面形は現状で幅7.3m、奥行15mで、深さが約20cm、床面の高さは標高65.6m前後を測る。

壁体溝は南側の中ほどで確認できた。柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺構の時期は出土遺物から堂床５期と判断した。

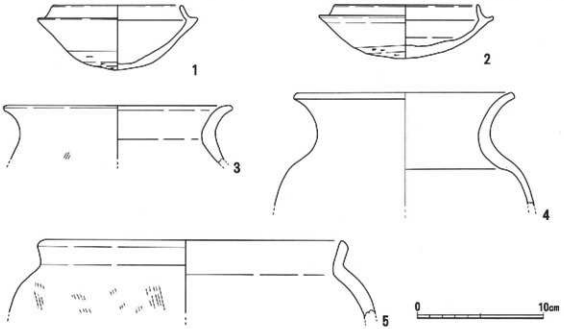
ＳＢ21計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	7.3m	1.5m	65.6m

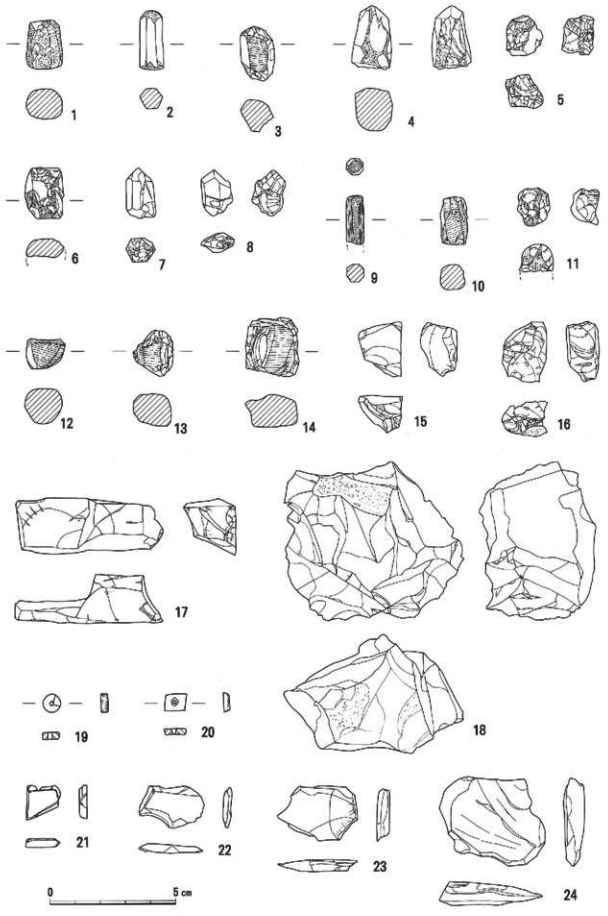
ＳＢ21出土遺物（第78図～第80図）

土器類では須恵器の蓋坏、土師器の甕の他に、須恵器や土師器の小片が出土した。玉類は水晶製の未成品が20点、碧玉製の未成品が11点、瑪瑙製の未成品が１点、緑泥片岩製の未成品が６点出土した。玉類は床面の全面に異なる石材が混在して出土した。工具類は瑪瑙製のハンマーが１点出土している。この他に砥石片が剥合多く出土している。

第78図　ＳＢ21出土遺物実測図(1)（Ｓ＝２／３）



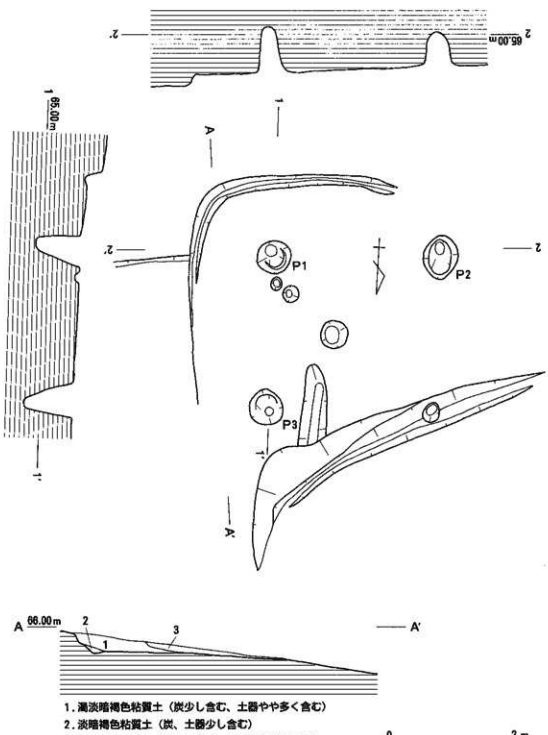
第79図　ＳＢ21出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）



第80図　ＳＢ21出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３、１～８は水晶、９～18は碧玉、19～24は緑泥片岩）

ＳＢ23（第81図・図版24）

東区東側の斜面中段で検出された遺構である。ＳＢ21・22・55の西側とＳＢ50の南側に隣接し、ＳＢ55とＳＢ50の一部を切っている。大きく削平された加工段で、床面の平面形は現状で幅4.5ｍ、奥行4.2ｍで、深さが約20㎝、床面の高さは標高65.6ｍ前後を測る。柱穴を４つ確認した。柱穴間の中心などから往時の床面の平面形を推定すると、幅5.3ｍ、奥行4.8ｍとなる。



第81図　ＳＢ23実測図（Ｓ＝１／60）

壁体溝は南壁と南東隅で確認した。

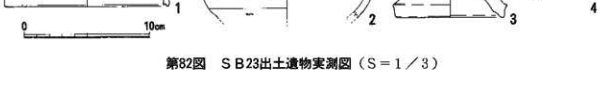
遺構の時期は出土遺物から堂床2期と判断した。

SB23計測表

加工段の規模		幅行き	奥行き	標高
		4.5m	4.2m	65.6m
建物の規模		梁行き	桁行き	
		1間（2.6m）	1間（2.4m）	
柱穴（cm）	番号	P1	P2	P3
	上面径	54×54	56×66	54×57
	深さ	72	54	78
柱間距離（m）		P1－2	P1－3	
		2.7	2.4	

SB23出土遺物（第82図）

器類では図示したもの以外には須恵器や土師器の小片が出土した。



第82図　SB23出土遺物実測図（S＝1／3）

SB24～27・53・54（第83図・図版26）

東区西側の斜面中段に位置する遺構である。6つもの加工段が切り合っており、上層などからSB54が最も古く、次いでSB53、次いでSB27、次いでSB26、次いでSB25、そしてSB24が最も新しいことがわかった。以下、時期の古い遺構から説明を行う。

SB54（地山を床面とし、13層を埋土とする）

北西と南西の床面は流失している。床面の規模は現状で幅2.3m、奥行1.2mで、深さが約50cm、床面の高さは標高61.8m前後を測る。壁体溝は南側に残存している。柱穴と思われるピットは確認できなかった。

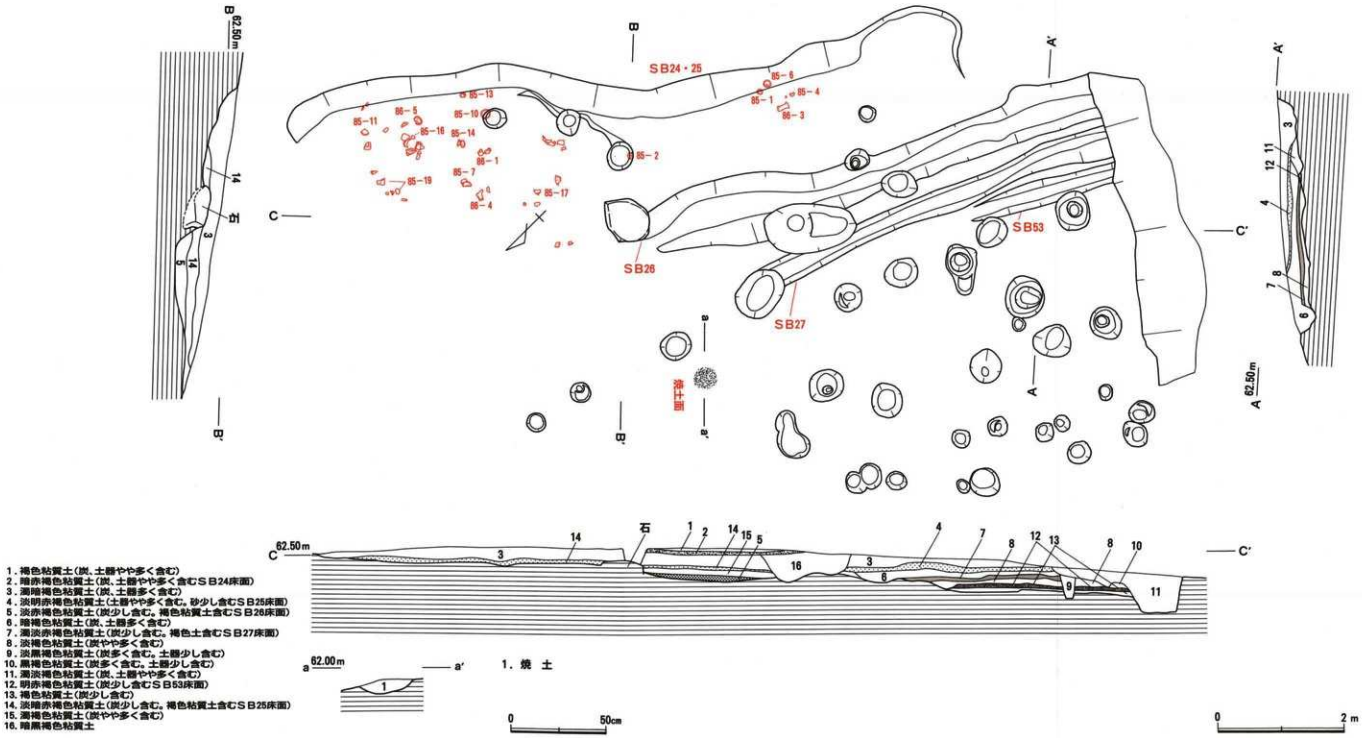
遺構の時期は出土遺物から堂床1期と判断した。

SB54出土遺物（第87図－11）

遺物は図示したもの以外には土師器の小片が少量出土した。玉類、工具類は出土しなかった。

SB53（12層を床面とし、8層、10層を埋土とする）

床面の大半は流失している。床面の規模は現状で幅2.4m、奥行1.2mで、深さが約40cm、床面の高さは標高61.9m前後を測る。南西側に壁体溝を確認した。柱穴と思われるピットは確認できなかっ



第83図　ＳＢ24～27・53・54実測図及び焼土面土層図（Ｓ＝１／60、焼土の土層図はＳ＝１／20）

た。遺構の時期は土遺物から堂床２期と判断した。

ＳＢ53出土遺物（第87図－６～10）

土器類では図示したもの以外には、須恵器や土師器の小片が出土した。玉類、工具類は出土しなかった。

ＳＢ27（７層を床面とし、６層を埋土とする。第84図）

北西と南西の床面は流失している。床面の規模は現状で幅3.3ｍ、奥行2.3ｍで、深さが約30㎝、床面の高さは標高62.1ｍ前後を測る。

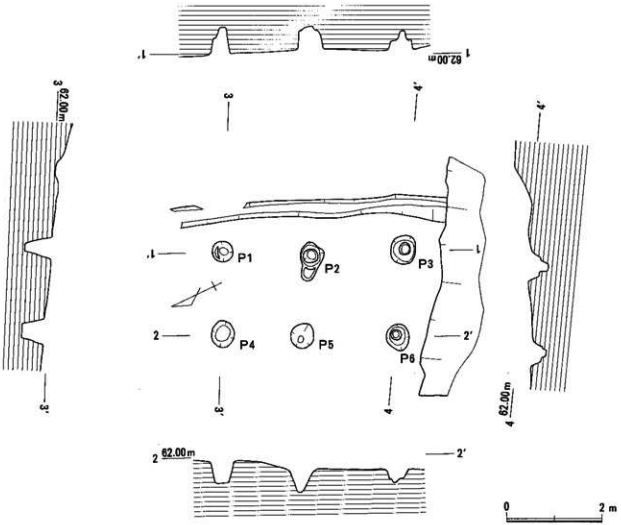
南西側に壁体溝を確認した。柱穴と思われるピットを６つ確認した。これらの柱穴の配置から１間２間の掘立柱建物が１棟あったものと思われる。

また、焼土面が１つあるが、これは地山が焼けたものである。

遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

ＳＢ27出土遺物（第87図－４・５）

土器類は図示したもの以外に須恵器や土師器の小片が出土した。玉類、工具類は出土していない。



第84図　ＳＢ27実測図（Ｓ＝１／80）

ＳＢ26（５層を床面とし、15層を埋土とする）

北西と南西の床面の大半は流失しており、遺構の残存状態はあまり良いとは言えない。

床面の平面形は現状で幅7.7ｍ、奥行2.7ｍで、深さが約35㎝、床面の高さは標高62.2ｍ前後を測る。やや大きめの加工段である。

南西側に壁体溝を確認した。

柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺構の時期は主遺物から堂床４期と判断した。

ＳＢ26出土遺物（第87図－１～３）

土器類では図示したもの以外に、須恵器や土師器の小片が出土した。遺物のほとんどのものは壁体溝内から出土した。

玉類、工具類は出土していない。

ＳＢ25（４層、14層を床面とし、３層を埋土とする）

北西と南西の床面の一部は流失している。

床面の平面形は現状で幅7.6ｍ、奥行4.2ｍで、深さが約30㎝、床面の高さは標高62.4ｍ前後を測る。やや大きめの加工段である。

壁体溝や柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺構の時期は主遺物から堂床４期と判断した。

ＳＢ25出土遺物（第86図－６～１７）

土器類では図示したもの以外には、須恵器や土師器の小片が出土した。

玉類、工具類は出土していない。

ＳＢ24（２層を床面とし、１層を埋土とする）

北西と南西の床面は一部は流失している。

床面の平面形は現状で幅10.5ｍ、奥行1.9ｍで、深さが約５㎝、床面の高さは標高62.5ｍ前後を測る。当遺跡の中ではかなり大きな部類の加工段といえる。

壁体溝や柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺構の時期は主遺物から堂床５期と判断した。

ＳＢ24出土遺物（第85図・第86図－１～５）

土器類では図示したもの以外に、須恵器や土師器の小片が出土した。土器類の大半は床面から出土している。当遺跡の加工段面からは土器類があまり出土していないことを考えるとＳＢ24の出土状況は特異といえる。また、完形品に近い土器類が多く出土していることも当遺跡の他の加工段と異なる点である。

玉類、工具類は出土しなかった。

SB54計測表

加工段の規模	幅行き	奥行き	標高
	2.6m	1.9m	62.1m

SB53計測表

加工段の規模	幅行き	奥行き	標高
	4.0m	2.4m	62.2m

SB27計測表

加工段の規模		幅行き		奥行き		標高	
		3.3m		2.3m		62.1m	
建物の規模		桁行き			桁行き		
		2間(3.8m)			1間(1.9m)		
柱穴(cm)	番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
	上面径	44×45	48×81	60×63	57×57	48×54	48×54
	深さ	57	57	42	45	45	27
柱間距離(m)		P1－2	P2－3	P3－6	P6－5	P5－4	P4－1
		1.9	2.0	1.9	2.0	1.7	1.7
		P2－5					
		1.6					

SB26計測表

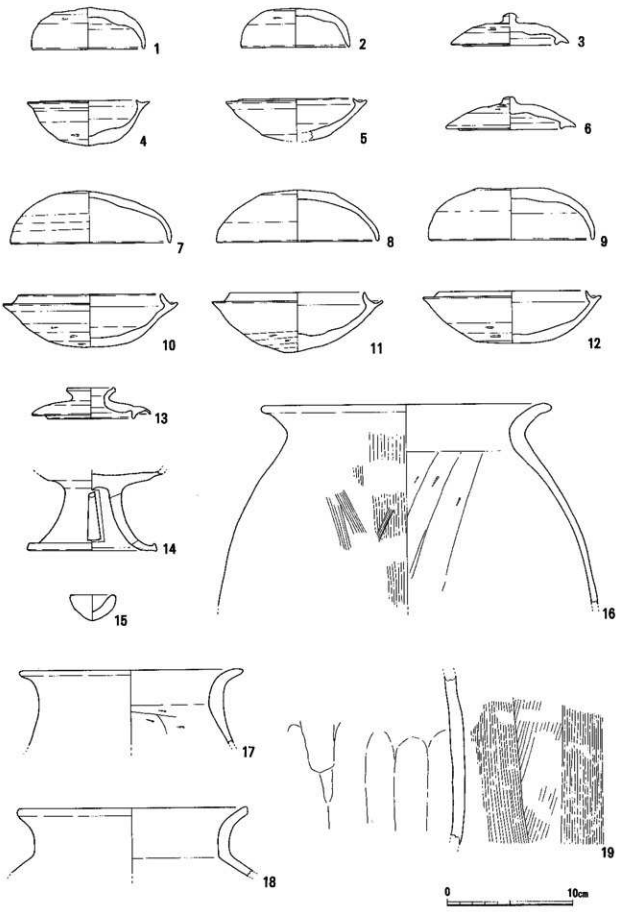
加工段の規模	幅行き	奥行き	標高
	7.7m	2.7m	62.2m

SB25計測表

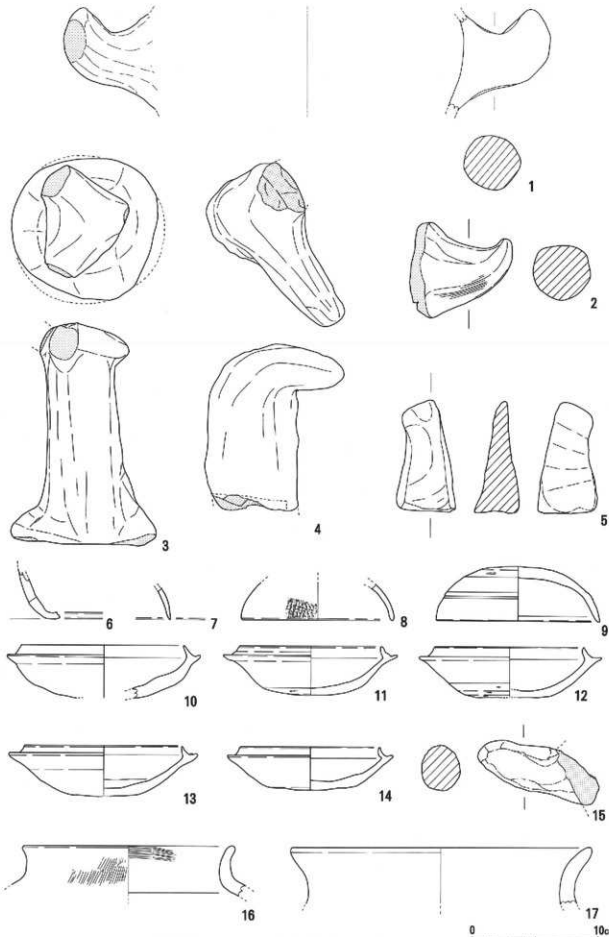
加工段の規模	幅行き	奥行き	標高
	7.6m	4.2m	62.4m

SB24計測表

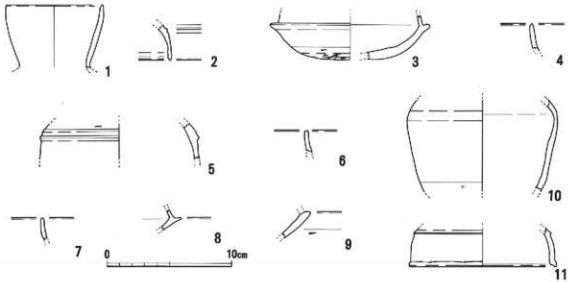
加工段の規模	幅行き	奥行き	標高
	10.5m	1.9m	62.5m



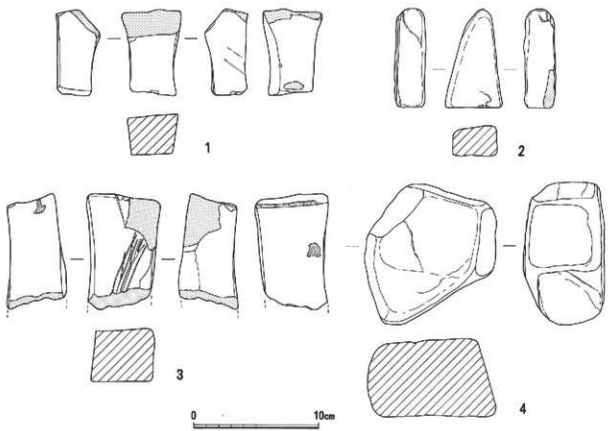
第85図　ＳＢ24出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



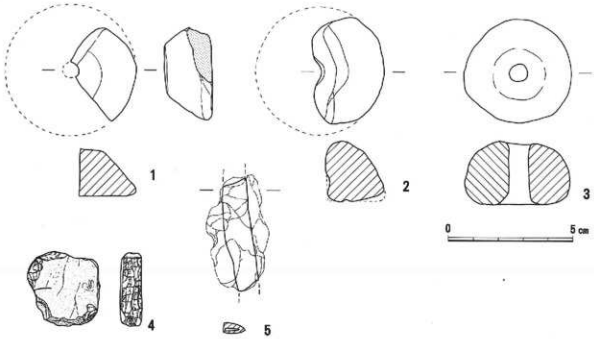
第86図　ＳＢ24・25出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



第87図　ＳＢ26・27・53・54出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



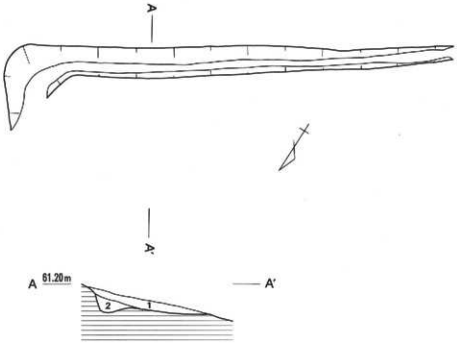
第88図　ＳＢ24出土遺物類実測図(2)（Ｓ＝１／３）



第89図　ＳＢ24出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３）

ＳＢ28（第90図、図版29）

東区中央の斜面中段で検出された加工段で、ＳＢ30とＳＢ32のほぼ中間に位置している。かなり大きく削平された加工段で、床面の大半は流失しており、壁体溝付近のみがかろうじて残存している状況であった。



第90図　ＳＢ28実測図（Ｓ＝１／60）

床面の規模は現状で幅6.8m、奥行1.8mで、深さが約20cm、床面の高さは標高60.8m前後を測る。当遺跡ではやや大きな加工段の部類に入る。

壁体溝は南側と南東側を巡っている。東側のコーナーはわずかに残存しており確認できたが、西側のコーナーは確認できなかった。壁体溝の南側は直線的に延びており、確認できた東側のコーナーはほぼ直角に曲がっている。

柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺構の時期は出土遺物から堂床4期と判断した。

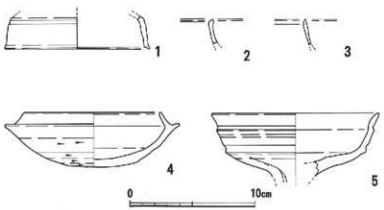
SB28計測表

	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
加工段の規模	6.8m	1.8m	60.8m

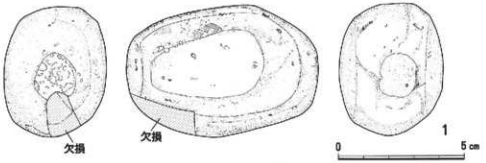
SB28出土遺物（第91図・第92図）

土器類は図示したもの以外に、須恵器や土師器の小片が出土した。

また玉類や工具類を流れ込みの遺物としていくつか確認した。



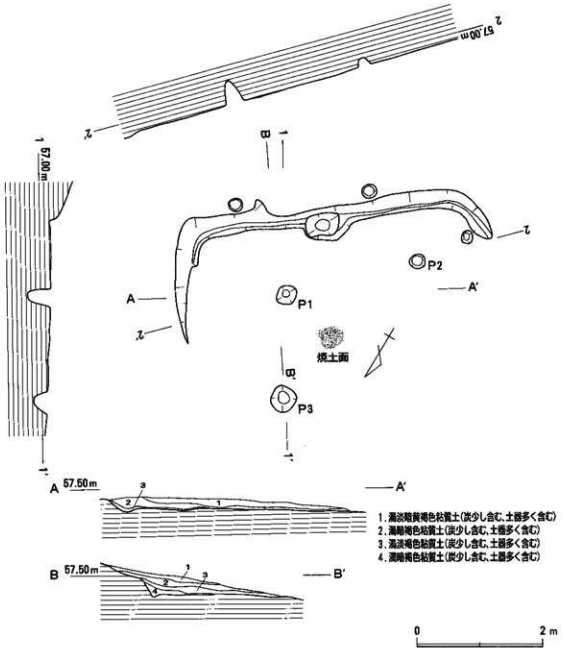
第91図　SB28出土遺物実測図(1)（S＝1／3）



第92図　SB28出土遺物実測図(2)（S－2／3）

SB29（第93図、図版28）

東区中側の斜面下段で検出された遺構で、SB42の西側に近接している。調査区の中で最も北側に位置している加工段である。削平を受けており、谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅4.5m、奥行2.0mで、深さが約30cm、床面の高さは標高57.2m前後を測る。



第93図　ＳＢ29実測図（Ｓ＝１／60）

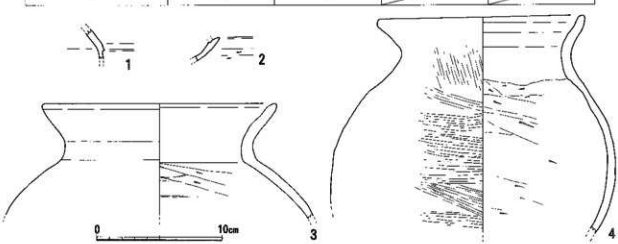
柱穴と思われるピットを３つ確認した。配置から考えると１間１間の掘立柱建物が１棟建てられていたものと思われる。これら３つの柱穴から当時の加工段の床面の奥行を推定すると、奥行は4.0ｍとなる。壁体溝は東側、南側、西側の三辺を巡っている。南側の壁は直線的に延びており、東側と西側の２つのコーナーはほぼ直角に曲がっている。加工段のほぼ中央には１ヶ所焼土面を確認した。この焼土面は地山が赤化したものである。その他、南側の壁体溝内のほぼ中央でピットを確認した。このピットの中からは玉類の未成品やチップ、或いは工具類は出土しなかった。このピットの性格は不明である。遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

ＳＢ29出土遺物（第94図）

図示したもの以外は須恵器や土師器の破片が出土した。玉類や工具類は出土していない。

SB29計測表

加工段の規模	幅行き	4.5m	奥行き	2.0m	標高 57.2m
建物の規模	梁行き	1間（2.2m）	桁行き	1間（1.6m）	
柱穴（cm）	番号	P1	P2	P3	
	上面径	32×36	24×27	41×42	
	深さ	36	12	21	
柱間距離（m）		P1－2	P1－3		
		2.2	1.7		



第94図　SB29出土遺物実測図（S＝1／3）

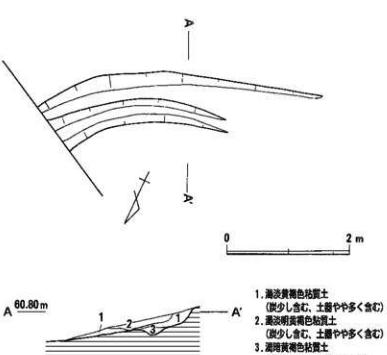
SB30、SB56

（第95図、図版29）

東区中側の斜面下段で検出されたSB28の東側に位置する遺構で、2つの加工段が切り合っている。

大きく削平された加工段で床面の大半は流失し、また遺構の大半は調査区外に延びている。

土層などから壁体溝を伴うSB30がまず作られ、次にその上に壁体溝を伴わないSB56が作られたことがわかった。



第95図　SB30実測図（S＝1／60）

SB30

床面の平面形は現状で幅4.5

m、奥行12mで、深さが約20cm、床面の高さは標高60.5m前後を測る。

壁体溝は南東側に残存している。柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺構の時期は出土遺物から堂床4期と判断した。

SB30計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	4.5m	12m	60.5m

SB30出土遺物（第96図・97図－3）

図示したもの以外に、須恵器や土師器の破片が出土した。

工具類は棒状の鉄器が1点出土した。玉類は出土していない。

第96図
SB30出土遺物
実測図(1)（S＝2／3）

SB56

床面の平面形は現状で幅2.1m、奥行14mで、深さが約10cm、床面の高さは標高60.6m前後を測る。壁体溝や柱穴と思われるピットは確認できなかった。

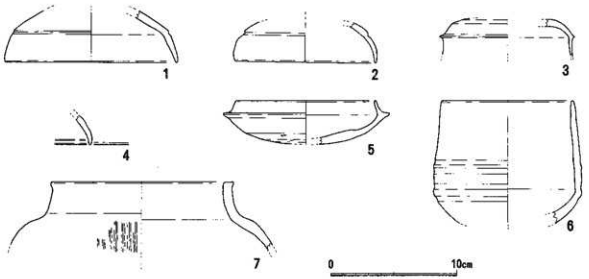
遺構の時期は出土遺物から堂床4期と判断した。

SB56出土遺物（第97図－12・4～7）

図示したもの以外に、須恵器や土師器の破片が出土した。玉類、工具類は出土していない。

SB56計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	4.2m	0.8m	60.6m



第97図　SB30出土遺物実測図(2)（S＝1／3）

ＳＢ31（第99図、図版27）

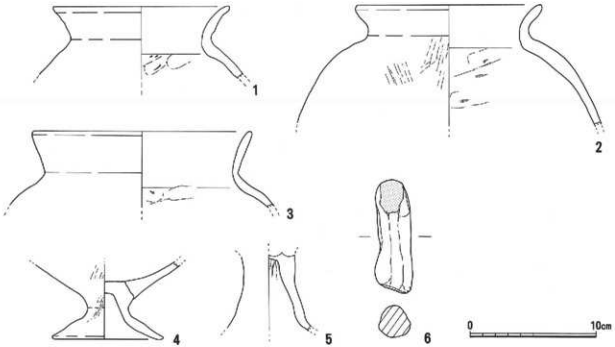
東区中央で検出された加工段である。規模は幅8.3m、奥行3.3mで、深さが約10.0cm、床面の高さは標高68.1m前後を測る。壁体溝は３条あり、３つ以上の加工段が切り合っていることがわかる。床面の大半が流失しているため先後関係は不明である。柱穴と思われるピットは６つあり、ピットの配置から梁行２間の建物が２棟あったものと判断した。遺構の詳細な時期は不明で古墳時代後期としか判断できなかった。

ＳＢ31計測表

加工段の規模		幅　行　き		奥　行　き		標　　高	
		8.3m		3.3m		68.1m	
建物の規模		梁　行　き			桁　行　き		
		2間（2.9m）			2間（2.7m）		
柱穴（cm）	番　号	P１	P２	P３	P４	P５	P６
	上面径	59×71	27×38	36×45	33×36	35×39	38×39
	深　さ	45	36	33	30	48	30
柱間距離（m）		P１－２	P２－３	P４－５	P５－６		
		1.5	1.4	1.4	1.3		

ＳＢ31出土遺物（第98図）

土器類は図示したもの以外は土師器の破片が出土した。玉類や工具類は出土していない。

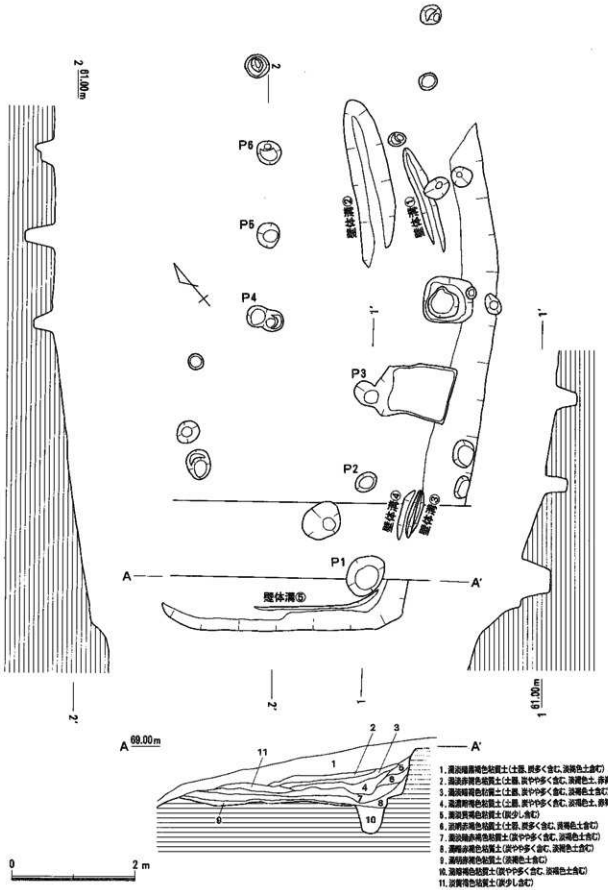


第98図　ＳＢ31出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＢ32（第100図、図版30）

東区中央の斜面中段で検出した遺構で、ＳＢ28の東側に位置している。大きく削平された加工段で、床面の大半は流失している。

床面の平面形は現状で幅6.2m、奥行0.7mで、深さが約20cm、床面の高さは標高59.8m前後を測



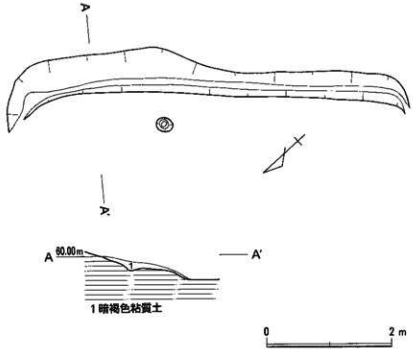
第99図　ＳＢ31実測図（Ｓ＝１／60）

る。

壁体溝は南東側に1条ほど残存しており、また北東側と南西側のコーナーもわずかに残存している。

柱穴と思われるピットは確認できなかった。

須恵器や土師器が破片しか出土していないため遺構の詳細な時期は不明で、古墳時代後期に含まれることしかわからない。



第100図　ＳＢ32実測図（Ｓ＝1／60）

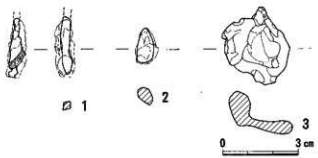
ＳＢ32計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	8.3m	3.3m	68.1m

ＳＢ32出土遺物（第101図）

土器類は須恵器や土師器が破片しか出土していない。玉類は出土していない。

工具類は棒状の鉄器が3点と、断面がL字状の板状の鉄器が1点出土している。



第101図　ＳＢ32出土遺物実測図（Ｓ＝2／3）

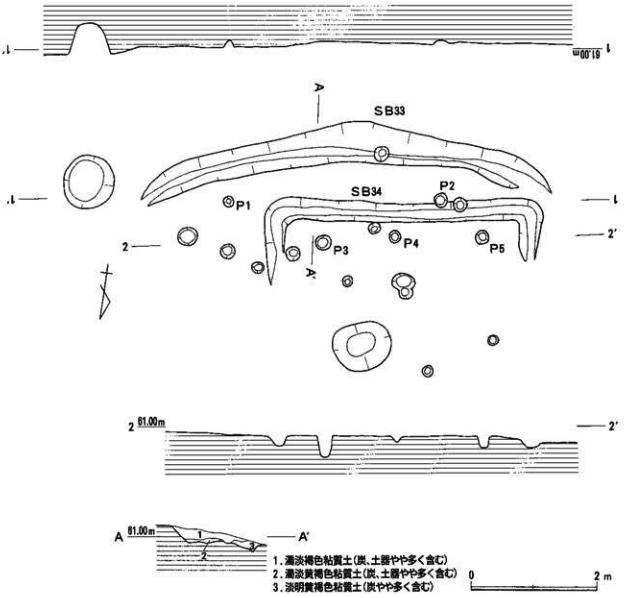
ＳＢ33・34（第102図・図版29）

東区東側の斜面下段で検出された遺構である。2つの加工段が切り合っており、上段からＳＢ34がＳＢ33に先行することがわかった。以下、古い順に説明を行う。

ＳＢ34

大きく削平された加工段で、床面の大半は流失している。床面の平面形は現状で幅4.2m、奥行1.3mで、深さが約10cm、床面の高さは標高60.8m前後を測る。柱穴は2つ確認した。壁体溝は東、西、南側を四角く巡っている。

須恵器や土師器の小片が出土したのみで、詳細な時期を確定できなかった。ただ、ＳＢ33に先行することから、堂床2期以前で須恵器を伴う時期であろう。



第102図　ＳＢ33・34実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ34計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高	
		1.2m	1.3m	60.8m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		2間（2.6m）			
柱穴（cm）	番　号	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	
	上面径	24×24	21×21	25×26	
	深　さ	35	18	18	
柱間距離（m）		Ｐ３－４	Ｐ４－５		
		2.6	1.4		

ＳＢ33

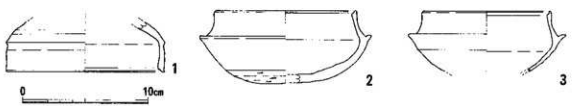
大きく削平された加工段で、床面の大半は流失している。床面の平面形は現状で幅6.5ｍ、奥行1.1ｍで、深さが約10㎝、床面の高さは標高60.9ｍ前後を測る。柱穴は２つ確認した。南側に壁体溝が巡っている。

ＳＢ33計測表

加工段の規模	幅行き	6.5m	奥行き	11m	標高 60.9m
建物の規模	桁行き	1間（3.4m）	梁行き		
柱穴（㎝）	番号	Ｐ１	Ｐ２		
	上面径	17×18	21×23		
	深さ	11	6		
柱間距離（m）		Ｐ１－２			
		3.4			

ＳＢ33出土遺物（第103図）

図示したもの以外に、須恵器や土師器の破片が出土した。玉類や工具類は出土しなかった。



第103図　ＳＢ33出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＢ35（第105図・図版30）

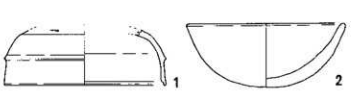
東区西側の下段で検出した加工段である。谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅4.4ｍ、奥行3.0ｍで、深さが約30㎝、床面の高さは標高55.1ｍ前後を測る。柱穴は４つ確認した。壁体溝は東側、南側、西側の三辺を巡っている。東側と西側の二つのコーナーは両方ともほぼ直角に曲がっており、東側、南側、西側の三辺も直線的に延びている。

加工段のほぼ中央で焼土面を一ヵ所だけ確認した。この焼土面は張り床ではなく、地山が熱を受けて赤化したものである。遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

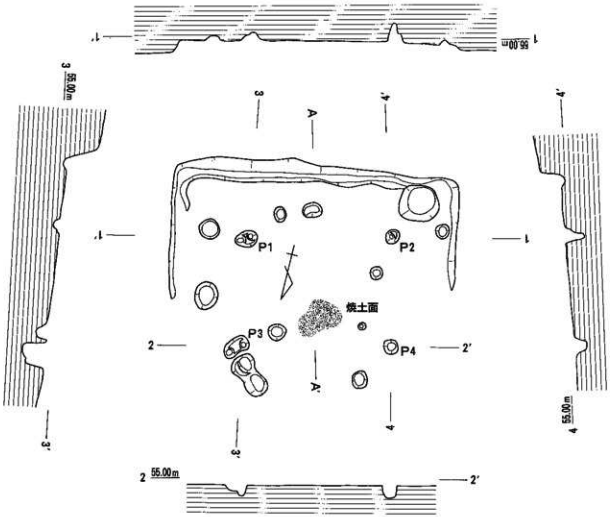
ＳＢ35出土遺物

（第104図・第107図－１）

図示したもの以外に須恵器や土師器の破片が出土した。玉類は出土しなかった。工具類は砥石が１点出土した。



第104図　ＳＢ35出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）



1．淡黄褐色粘質土（炭多く含む、土器やや多く含む）
2．黄褐色粘質土（炭多く含む、土器やや多く含む）
3．濃暗赤褐色粘質土（焼土）
4．濃暗褐色粘質土
5．濃暗褐色粘質土
6．濃暗赤褐色粘質土（焼土多く含む）

0　2m

第105図　ＳＢ35実測図（Ｓ＝1／60）

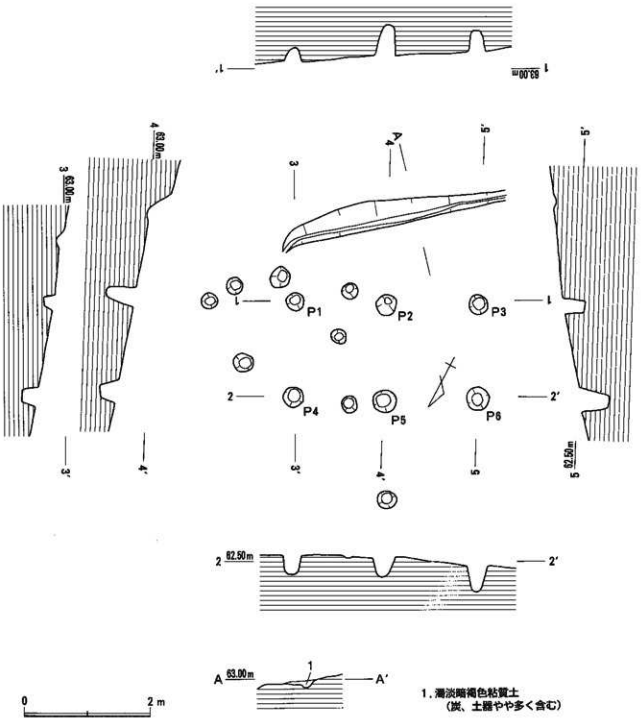
ＳＢ35計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高
		4.4m	3.0m	55.1m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		1間（2.5m）	1間（1.7m）	
柱穴（cm）	番　号	P1	P2	P3	P4
	上面径	26×36	21×23	26×45	24×24
	深　さ	12	30	18	21
柱間距離（m）		P1－2	P2－4	P4－3	P3－1
		2.3	1.7	2.5	1.7

ＳＢ36（第106図・図版30）

東区中側の中段で検出した加工段である。ＳＢ51の北側に位置している。谷側の床面は流失している。床面の半面形は現状で幅4.0m、奥行3.1mで、深さが約30cm、床面の高さは標高63.0m前後を測る。柱穴と思われるピットは６つあり、その配置から１間２間の掘立柱建物が１棟ほど建てられていたものと思われる。また南側には壁体溝が残っていた。

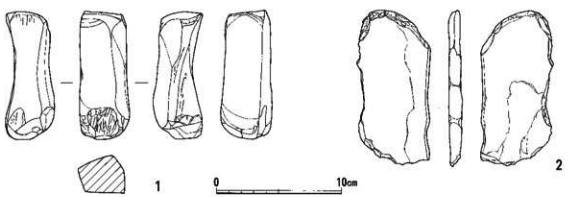
須恵器や土師器が小片のみのため詳細な時期は不明であり、古墳時代後期に含まれるとしかわからない。



第106図　ＳＢ36実測図（Ｓ＝１／60）

SB36計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	4.0m	3.1m	63.0m



第107図　SB35・SB36出土遺物実測図（S＝1／3）

SB36出土遺物（第107図－2）

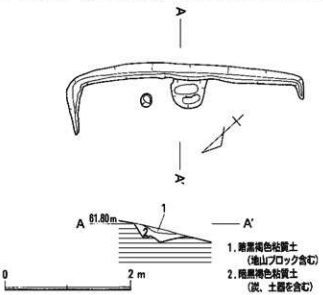
土器類は小片しか出土していない。工只類は砥石が1点ほど出土した。

SB37（第108図、図版30）

東区西側の斜面中段で検出された遺構で、SB24～27・SB53・SB54の北側に位置している。規模のかなり小さな加工段である。遺構は大きく削平されており、谷側の床面の大半は流失している。床面の平面形は現状で幅3.6m、奥行10mで、深さが約15cm、床面の高さは標高61.6m前後を測る。

壁体溝は北東側、南東側、南西側の三辺を巡っている。この壁体溝の両隅はほぼ直角に曲がっている。また、壁体溝の中央で四角く浅いピットを検出した。このピットの中からは玉材のチップなどは出土しなかった。このピットの性格は不明である。柱穴と思われるピットは検出できなかった。

遺物は須恵器や土師器の小片が出土したのみである。遺構の詳細な時期は不明で、古墳時代後期に含まれるとしかわからない。



第108図　SB37実測図（S＝1／60）

SB37計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	3.6m	1.0m	61.6m

ＳＢ38～40（第109図、図版31）

東区東側の上段で検出された遺構で、ＳＢ15・ＳＢ16とＳＢ43～49の中間に位置している。削平のため谷側が流失している。この遺構は３つの加工段が切り合っている。土層などからＳＢ40が最も古く、次いでＳＢ39が古く、そしてＳＢ38が最も新しいことがわかった。このことから加工段は外側に拡大していったと思われる。

以下、古い遺構から説明を行う。

ＳＢ40

平面形はやや四角い形状をしており、床面の規模は現状で幅2.5ｍ、奥行2.0ｍで、深さが約60㎝、床面の高さは標高70.0ｍ前後を測る。壁体溝は南側と西側を巡っている。

壁体溝の南西側のコーナーはやや丸く曲がっている。

柱穴と思われるピットを２つ検出することができた。２つのピットの中心から当時の加工段の規模を推定すると幅は3.9ｍであったと考えられる。

遺物は土師器の小片が少し出土したのみであった。遺構の詳細な時期は出土遺物からは特定できなかった。ただしＳＢ38はＳＢ39に先行することから、古墳時代後期頃に含まれるのではないかと思われる。

ＳＢ39

平面形はやや丸い形状をした加工段で、床面の平面形は現状で幅3.5ｍ、奥行2.0ｍで、深さが約60㎝、床面の高さは標高70.0ｍ前後を測る。壁体溝は南側と西側を巡っている。

壁体溝の南西側のコーナーはやや丸い形に曲がっている。南側の壁体溝は直線的に延びている。

柱穴と思われるピットを２つ検出することができた。２つのピットの中心から当時の加工段の大きさを推定すると、奥行は4.1ｍであったと考えられる。

遺構の詳細な時期は出土遺物からは特定することができず、古墳時代後期頃に含まれる遺構としか判断できない。

ＳＢ39出土遺物（第110図－12）

図示したもの以外には、土師器の破片が出土したのみである。

ＳＢ38

平面形は四角い形状をしている。床面の平面形は現状で幅4.1ｍ、奥行3.0ｍで、深さが約60㎝、床面の高さは標高70.1ｍ前後を測る。

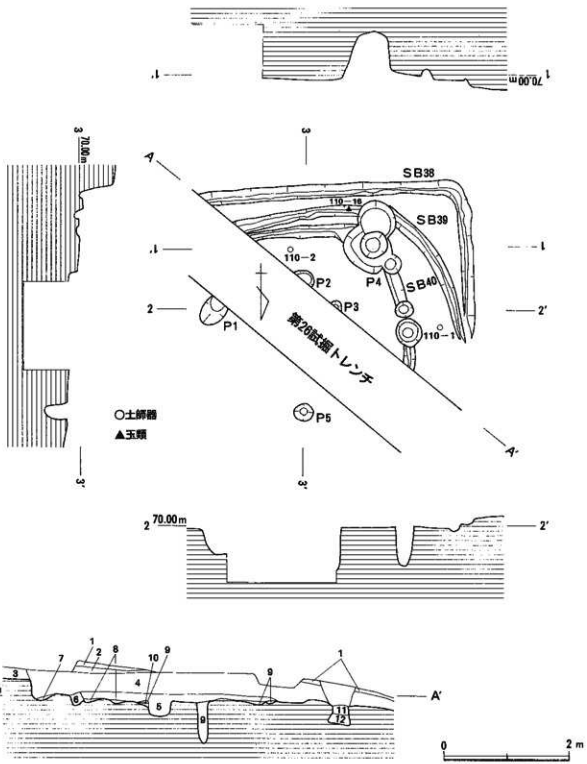
壁体溝は南側と西側を巡っている。壁体溝の南西側のコーナーはほぼ直角に曲がっており、南側と西側の壁体溝は直線的に延びている。

柱穴と思われるピットを１つ検出することができた。

遺構の詳細な時期は出土遺物からは特定することができず、古墳時代後期頃に含まれる遺構としか判断できない。

ＳＢ38出土遺物（第110図－３～15、第111図－１）

土器類は図示したもの以外に土師器の破片が出土している。



1．黒褐色土
（腐植土層）
2．暗褐色粘質土
（炭化物少し含む、遺物、淡黒褐色粘質土のブロック含む）
3．赤褐色粘質土
（砂粒多く含む）
4．淡黒褐色粘質土
（炭化物僅かに含む、砂粒多く含む）
5．黒褐色粘質土
（遺物含む、淡黒褐色土のブロック含む、SB38床面）
6．淡褐色粘質土
（遺物、炭化物、黄褐色粘土のブロック含む、砂粒少し含む、SB38床面）
7．濃黄褐色粘質土
（遺物、砂粒多く含む、炭化物少し含む、濃褐色粘質土、黄褐色粘質土のブロック含む）
8．淡黄褐色粘質土
（遺物、砂粒多く含む、炭化物少し含む、濃褐色粘質土、黄褐色粘質土のブロック含む、SB38床面）
9．黄褐色粘質土
（砂粒多く含む、SB39床面）
10．赤色粘質土
（焼土、炭化物少し含む）
11．濃黄褐色粘質土
（砂粒多く含む、炭化物多少含む、黄褐色粘質土のブロック含む）
12．淡暗褐色粘質土
（砂粒、炭化物多く含む、黄褐色粘質土のブロック含む）

第109図　ＳＢ38～40実測図（Ｓ＝１／60）

玉類は水晶製の未成品が4点、碧玉製の未成品が4点、鳶瑙製の未成品が5点、緑泥片岩製の未成品が54点出土しており、緑泥片岩製の未成品の割合が高い。また、緑泥片岩製の有孔円盤が1点ほど出土しているが当遺跡で確認できた有孔円盤はこの1点のみでる。

工具類は砥石と碧玉製のナイフ状の工具が出土している。このナイフ状の工只は刃部に擦過痕を見つけることができた。

ＳＢ40計測表

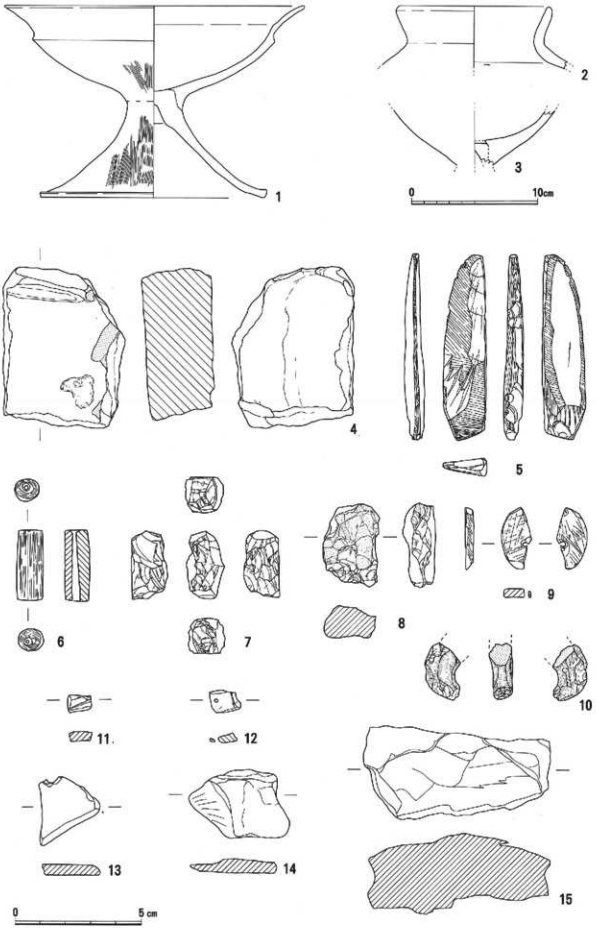
加工段の規模		幅行き	奥行き	標高
		2.5m	2.0m	70.0m
建物の規模		梁行き	桁行き	
		1間（2.0m）		
柱穴（cm）	番号	P1	P3	
	上面径	45×48	18×21	
	深さ	42	69	
柱間距離（m）		P1－3		
		2.0		

ＳＢ39計測表

加工段の規模		幅行き	奥行き	標高
		3.5m	2.0m	70.0m
建物の規模		梁行き	桁行き	
			1間（2.1m）	
柱穴（cm）	番号	P2	P5	
	上面径	30×36	30×32	
	深さ	15	36	
柱間距離（m）		P2－5		
		2.1		

ＳＢ38計測表

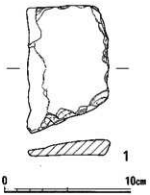
加工段の規模		幅行き	奥行き	標高
		4.1m	3.0m	70.1m
建物の規模				
柱穴（cm）	番号	P4		
	上面径	75×81		
	深さ	75		
柱間距離（m）				



第110図　ＳＢ38・39出土遺物実測図（1～4はＳ＝1／3、5～15はＳ＝2／3、6～7は碧玉、8は瑪瑙、10～15は緑泥片岩）

ＳＢ41（第112図、図版31）

東区中央の斜面上段にあるほとんど平坦な場所で検出された加工段である。ＳＢ43～ＳＢ49の南側、ＳＢ52の東側に位置しており、東区の中では最も標高の高い場所に位置している加工段である。遺構の残存状況は比較的良好ではあったが、谷側の床面の一部や壁体溝の一部は流失していた。また、この加工段は床面から玉類の未成品やチップ、砥石等の工具類が出土する玉作工房跡である。加工段の平面形は長方形を成している。床面の大きさは現状で幅6.5m、奥行4.0mで、深さが約30cm、床面の高さは標高70.2m前後を測る。



第111図
ＳＢ39出土遺物実測図
（Ｓ＝１／３）

壁体溝は北東側、南東側、南西側の三辺を巡っている。東側と南側の２つのコーナーは共にほぼ直角に曲がっており、北東側と南東側の２辺の壁体溝は直線的に延びている。また、わずかに残存する南西側の壁体溝も直線的に延びている。

柱穴と思われるピットを４つ確認することができた。柱穴の配置から１間１間の掘立柱建物が１棟ほど建てられていたと思われる。

加工段のほぼ中央で焼土面を一ヵ所だけ確認した。この焼土面は張り床ではなく、地山が熱を受けて赤化したものである。

遺構の時期は出土遺物から堂床３期と判断した。

ＳＢ41計測表

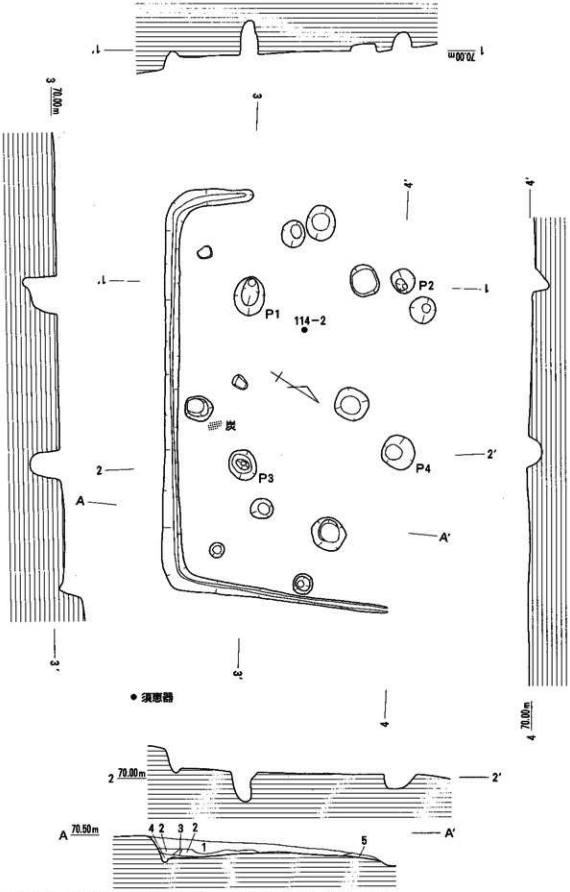
加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高	
		6.5m	4.0m	70.2m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（2.8m）		1間（2.4m）	
柱穴（cm）	番　号	P１	P２	P３	P４
	上面径	45×63	39×39	42×48	54×54
	深　さ	54	27	48	24
柱間距離（m）		P１－２	P２－４	P４－３	P３－１
		2.5	2.8	2.5	2.7

ＳＢ41出土遺物（第113図～第116図）

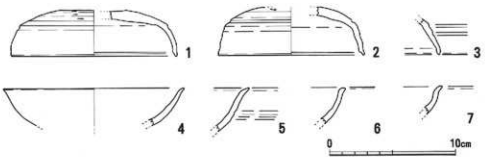
土器類は図示したもの以外に、須恵器と土師器の破片が出土している。

玉類は水晶製の未成品が17点、碧玉製の未成品が６点、瑪瑙製の未成品が12点出土している。緑泥片岩製の未成品は出土していない。

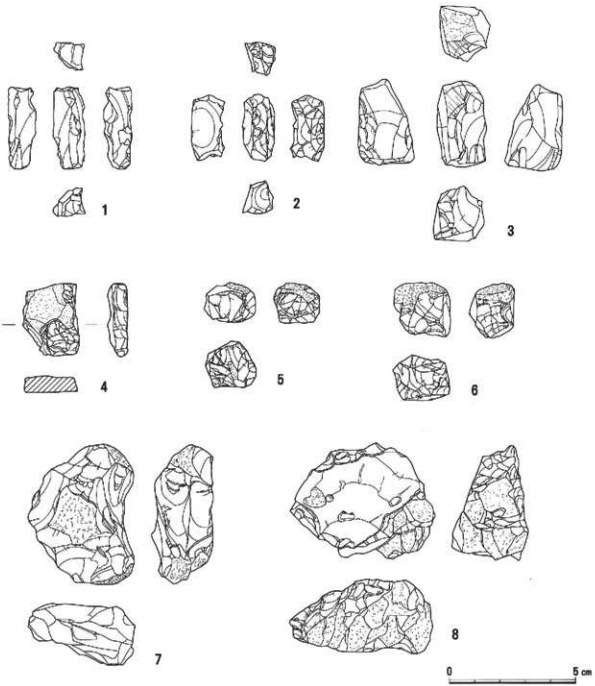
工具類は砥石が３点、台石が３点出土した。３点の砥石とうち２点は玉用筋砥石と鉄川筋砥石が兼用されている砥石であった。また残りの１点の砥石は玉用筋砥石と内磨き砥石を兼ねたものであった。台石のうち２点は中央に円形の窪みのあるものであった。



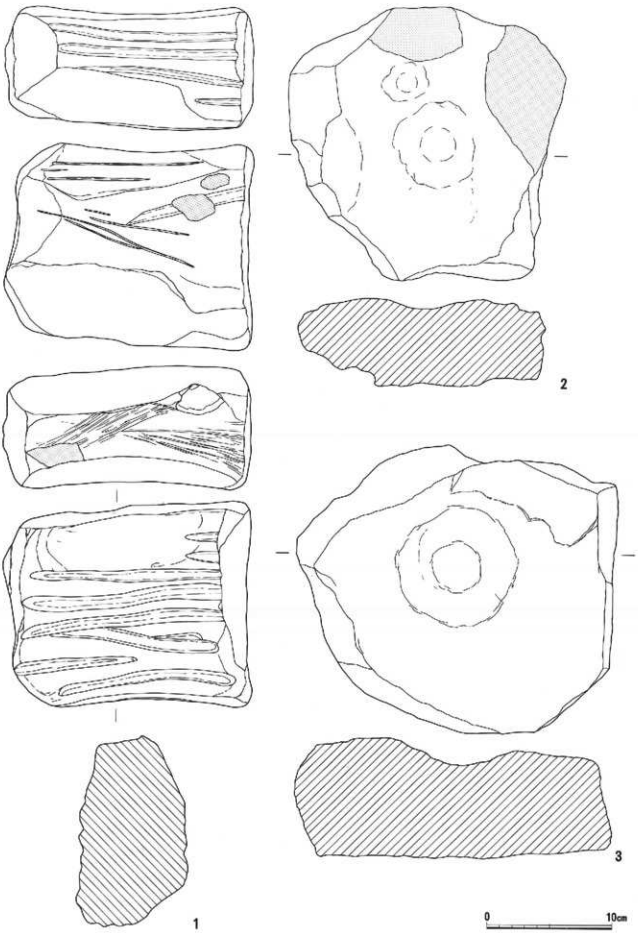
第112図　ＳＢ41実測図（Ｓ＝1／60）



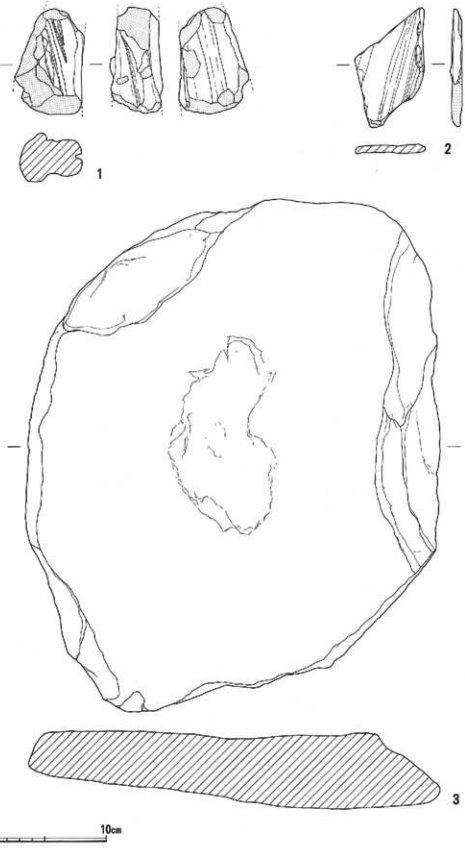
第113図　ＳＢ41出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第114図　ＳＢ41出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～３・７は碧玉、４～６・８は瑪瑙）



第115図　ＳＢ41出土遺物実測図(3)（Ｓ＝1／3）



第116図　ＳＢ41出土遺物実測図(4)（Ｓ＝１／３）

ＳＢ42（第117図、図版30）

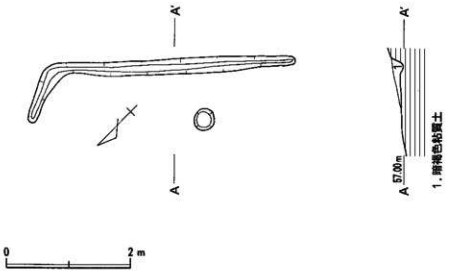
東区中側の斜面下段で検出した加工段で、ＳＢ29の西側に位置している。大きく削平されており、谷川の床面の大半は流失しており、壁体溝の付近のみをのこす状況にある。

床面の平面形は現状で幅4.2ｍ、奥行12ｍで、深さが約15㎝、床面の高さは標高57.1ｍ前後を測る。

壁体溝は北東側と南東側に残存している。東側のコーナーは広い角度で曲がっており、南東側の壁体溝は直線的に延びている。

柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺物は須恵器と土師器の小片が少し出土したのみであった。遺構の詳細な時期は不明で、古墳時代後期としかわからない。



第117図　ＳＢ42実測図（Ｓ＝１／60）

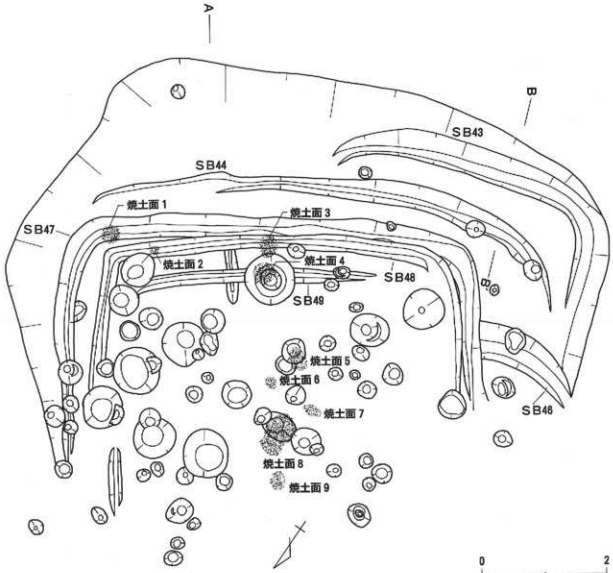
ＳＢ42計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	4.2m	1.2m	57.1m

ＳＢ43～49（第118図、図版32・図版33）

東区中央の斜面上段で検出された加工段で、ＳＢ38～40の西側に位置している。７つもの加工段が切り合っている。土層からＳＢ49が最も新しく、以下順にＳＢ48、ＳＢ47、ＳＢ46、ＳＢ45、ＳＢ44、ＳＢ43と新しくなる。

また、いずれの加工段の床面からも玉類の未成品やチップなどを出土しており、玉作工房跡とわかった。以下古い順に説明を行う。



1．明灰茶色土（炭の粒僅かに含む）
2．暗茶黄色土
3．茶黄色土（地山に近い色質を呈す、SB44床面）
4．灰褐色土（炭含む）
5．茶黄色土（4に近い砂質、灰色土ブロック僅かに含む）
6．暗灰色土（炭多く含む、地山に近いとSB48埋土のブロック混じる）
7．灰黄色土
8．黄灰色砂質土（SB47床面）
9．茶黄色土（SB47床面）
10．明黄灰色土（SB48床面）
11．暗茶色土（炭の小ブロック僅かに含む、SB48床面）
12．灰黄色土（炭の小ブロック僅かに含む）
13．明灰茶色土（炭の小ブロック僅かに含む）
14．暗茶色土（炭の小ブロック僅かに含む）
15．茶黄色土（炭の小ブロック僅かに含む）
16．暗灰色土（6と一連のものか）
17．暗茶黄色土（8と一連のもの）
18．暗灰茶色土（SB47床面）
19．灰茶色土（SB48床面）
20．明灰色土
21．暗灰茶色土（18と一連のものSB47床面）
22．灰茶色土（19と一連のものSB48床面）
23．暗灰色土（地山ブロックを僅かに含む）
24．明灰色土
25．灰褐色土
26．暗褐色土
27．暗褐色土（地山ブロックを多く含む、炭僅かに混じる）
28．灰茶色土
29．暗灰茶色土（地山ブロックを多く含む、炭僅かに混じる）
30．明茶色粘質土（SB47床面）
31．淡灰色土

1．淡黒褐色粘質土（炭、土器多く含む）
2．暗赤褐色粘質土（炭少し含む、SB44床面）
3．淡黒褐色粘質土（炭、土器多く含む）
4．淡黒赤褐色粘質土（炭少し含む）
5．淡褐褐色粘質土（炭、土器多く含む、SB45床面）
6．淡褐赤褐色粘質土（炭少し含む）
7．淡灰褐黒褐色粘質土（炭、土器多く含む）
8．黒赤褐色粘質土（炭少し含む）
9．淡褐黒褐色粘質土（炭、土器多く含む）

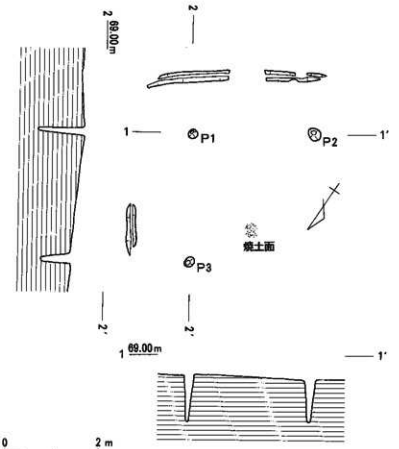
第118図　ＳＢ43～49実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＢ49（第119図）

最も古い加工段である。平面形は四角い形状をしている。床面の規模は現状で幅4.2m、奥行4.2mで、深さが約30cm、床面の高さは標高68.5m前後を測る。

柱穴と思われるピットは3つ確認した。いずれも平面積は小さいが、かなり深いものである。これらの配置から1間1間の掘立柱建物が1棟ほど建てられていたものと思われる。これらの柱穴などから当時の床面の大きさを推定すると幅5.2m、奥行5.2mの正方形であったと考えられる。

壁体溝は南側と東側で確認した。ＳＢ48などの上の遺構により途切れ途切れであるが本来は繋がっていたものと思われる。



第119図　ＳＢ49実測図（Ｓ＝1／80）

遺物は須恵器や土師器の小片がわずかに出土しただけである。遺構の詳細な時期は不明で、古墳時代後期に含まれるとしかわからない。

ＳＢ49計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高	
		4.2m	4.2m	68.5m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（2.7m）		1間（2.6m）	
柱穴（cm）	番　号	P1	P2	P3	
	上面径	18×20	24×30	21×21	
	深　さ	99	90	60	
柱間距離（m）		P1－2	P1－3		
		2.6	2.7		

ＳＢ48（第120図）

２番目に古い加工段である。平面形は四角くい形状をしており、床面の規模は現状で幅5.4ｍ、奥行4.6ｍで、深さが約35㎝、床面の高さは標高68.6ｍ前後を測る。

壁体溝は北東側、南東側、南西側の一辺を巡っている。東側と西側の２つのコーナーは両方ともほぼ直角に曲がっており、北東側と南東側と南西側の三辺は直線的に延びている。

柱穴と思われるピットを８つ確認することができた。ピットの配置から１間１間の掘立柱建物が２棟ほど建てられていたと判断した。ここでは２棟の掘立柱建物を仮に、比較的大きな柱穴で谷側よりものをＡ（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４）とし、柱穴の直径は小さくやや山側よりのものＢ（Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８）とする。２棟の掘立柱建物は同一の床面を使用しており、土層から確実な先後関係を把握することはできなかった。ただ、堂床遺跡において加工段や掘立柱建物を改築する際は山側に改築する場合が多いことを考えると、掘立柱建物Ａが掘立柱建物Ｂに先行する可能性の方がやや高いと思われる。

尚、当時の加工段の大きさを柱穴や壁体溝の配置から推定すると、奥行が5.4ｍであったと思われる。

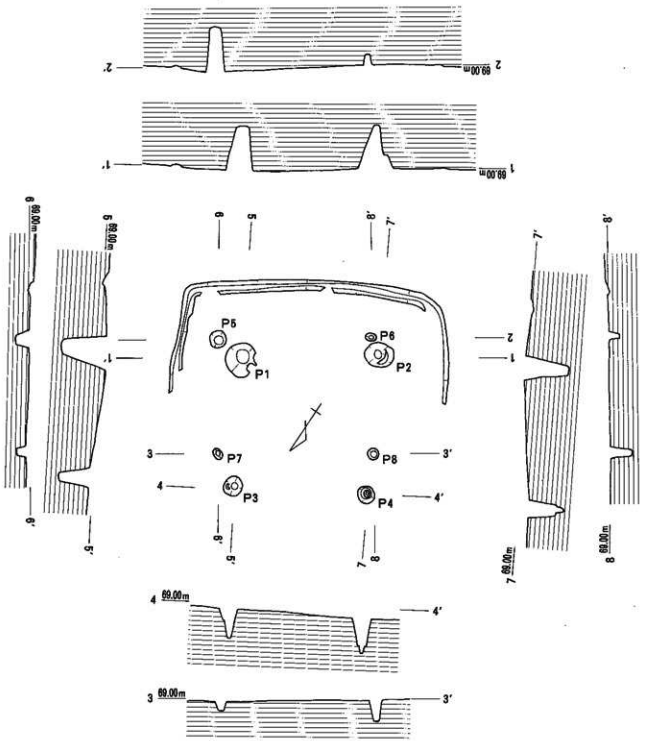
遺構の詳細な時期は遺物からは判断することができず、ＳＢ47（堂床２期）に切られていることから古墳時代後期で堂床２期以前としかわからない。

ＳＢ48－Ａ計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高	
		5.4m	4.6m	68.6m	
建物の規模		桁　行　き		梁　行　き	
		1間（3.3m）		1間（2.5m）	
柱穴（㎝）	番　号	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８
	上面径	36×36	18×21	18×24	24×24
	深　さ	96	27	21	48
柱間距離（ｍ）		Ｐ５－６	Ｐ６－８	Ｐ７－８	Ｐ５－７
		3.3	2.5	3.3	2.4

ＳＢ48－Ｂ計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高	
		5.4m	4.6m	68.6m	
建物の規模		桁　行　き		梁　行　き	
		1間（2.9m）		1間（2.9m）	
柱穴（㎝）	番　号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４
	上面径	66×72	51×63	39×42	36×39
	深　さ	96	93	63	74
柱間距離（ｍ）		Ｐ１－２	Ｐ２－４	Ｐ３－４	Ｐ３－８
		3.0	3.0	2.8	2.7

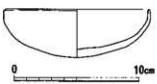


第120図　ＳＢ48実測図（Ｓ＝１／80）

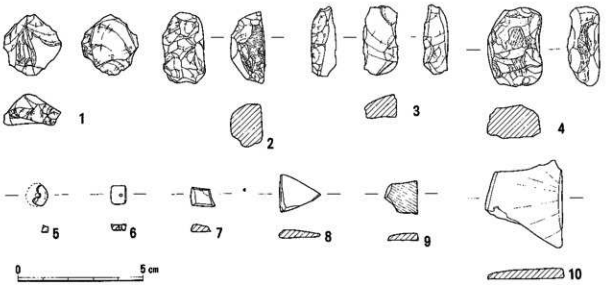
ＳＢ48出土遺物（第121図）

土器類は図示したもの以外に須恵器と土師器の破片が出土した。

玉類は水晶製の未成品が８点、碧玉製の未成品が３点、瑪瑙製の未成品が１点、緑泥片岩製の未成品が34出土し、緑泥片岩製の未成品の割合が高い。工具類は石片が１点出土しているのみである。



第121図　ＳＢ48出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第122図　ＳＢ48出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１は水晶、２・３は碧玉、４は瑪瑙、５～９は緑泥片岩）

ＳＢ47（第123図）

３番目に古い加工段である。平面形は四角く、床面の規模は現状で幅6.4ｍ、奥行5.0ｍで、深さが約35㎝、床面の高さは標高68.7ｍ前後を測る。

壁体溝は北東側、南東側、南西側の一辺を巡っている。東側と西側の２つのコーナーは両方ともほぼ直角に曲がっており、北東側と南東側と南西側の三辺は直線的に延びている。

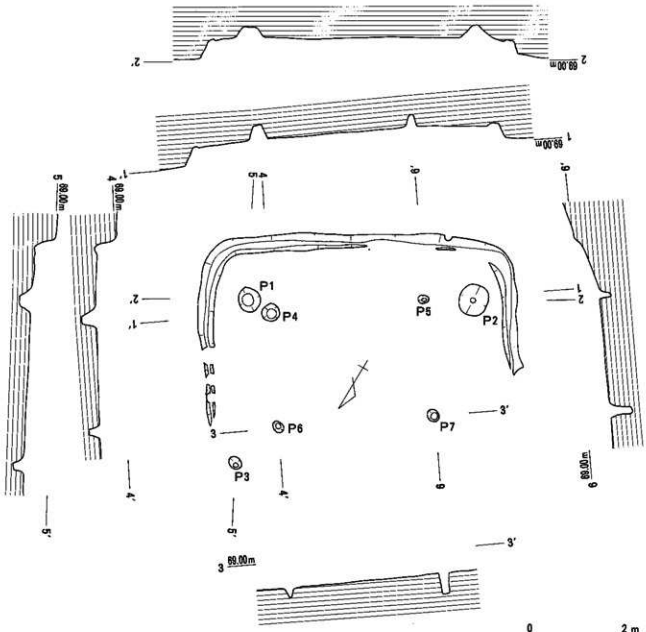
柱穴と思われるピットは７つあり、１間１間の建物が２回建てられたものと思われる。２棟の掘立柱建物は外側を巡るＡ（Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３）と、内側を巡るＢ（Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７）に分かれる。ＳＢ48の場合と同様に２棟の掘立柱建物は同一の床面を使用しており、また切り合う柱穴などもないため先後関係を判断することはできない。

尚、当時の加工段の大きさを柱穴や壁体溝の配置から推定すると、奥行が5.8ｍであったと思われる。

遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

ＳＢ47－Ａ計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高
		6.4m	5.0m	68.7m
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き
		1間（4.7m）		1間（3.5m）
柱穴（cm）	番　号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３
	上面径	48×51	63×66	21×33
	深　さ	24	27	24
柱間距離（m）		Ｐ１－２	Ｐ１－３	
		4.8	3.5	



第123図　ＳＢ47実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ47－Ａ計測表

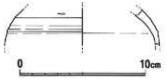
加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高	
		6.4m	5.0m	68.7m	
建物の規模		梁　行　き		桁　行　き	
		1間（4.7m）		1間（3.5m）	
柱穴（cm）	番　号	P 1	P 4	P 5	
	上面径	48×51	63×66	21×33	
	深　さ	24	27	24	
柱間距離（m）		P 1－4	P 5－1		
		4.8	3.5		

ＳＢ47出土遺物（第124図・第125図）

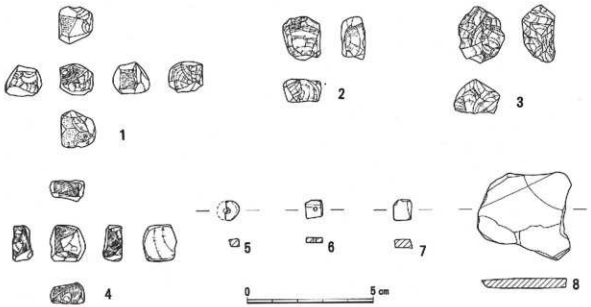
土器類は図示したもの以外に須恵器と土師器の破片が出土した。

玉類は水晶製の未成品が７点、碧玉製の未成品が１点、瑪瑙製の未成品が２点、緑泥片岩製の未成品が140点も出土しており、緑泥片岩製の未成品の割合が高い。

工具類は石片がわずかに出土しているのみである。



第124図　ＳＢ47出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1／3）

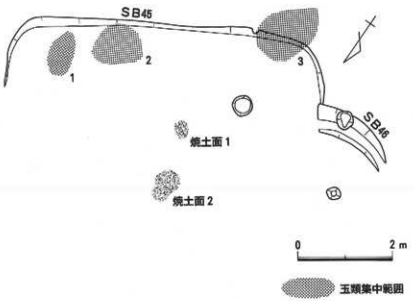


第125図　ＳＢ47出土遺物実測図(2)（Ｓ＝2／3、1～3は水晶、4は碧玉、5～8は緑泥片岩）

ＳＢ45（第126図）

４番目に古い加工段である。壁体溝付近しか残っておらず、大半はＳＢ45の掘込で失われている。床面の規模は現状で幅14ｍ、奥行1.8ｍで、深さが約50㎝、床面の高さは標高69.1ｍ前後を測る。壁体溝は南西側のコーナーが残存していた。

遺構の時期は出土遺物からは古墳時代後期頃としかわからない。ＳＢ47より新しくＳＢ45より古いことを考えると、堂床２期か堂床３期頃と思われる。



第126図　ＳＢ45・46実測図（Ｓ＝1／80）

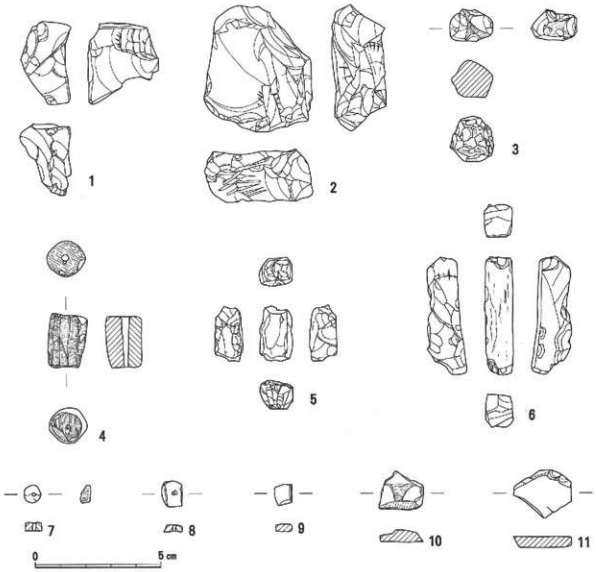
ＳＢ46計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	1.4m	1.8m	69.1m

ＳＢ46出土遺物（第127図）

土器類は須恵器や土師器の小片しか出土していない。

玉類は水晶製の未成品が10点、碧玉製の未成品が７点、瑪瑙製の未成品が１点、緑泥片岩製の未成品が９点出土している。工具類は石片がわずかに出土しているのみである。



第127図　ＳＢ46出土遺物実測図（Ｓ＝２／３、１～６は碧玉、７～11は緑泥片岩）

ＳＢ45（第126図）

５番目に古い加工段で、四角い形をしている。谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅6.6m、奥行3.8mで、深さが約10cm、床面の高さは標高69.0m前後を測る。

床面には２つの焼土面を確認した。これらの焼土面はいずれも床面が赤化したものである。壁体

溝や柱穴と思われるものは確認できなかった。遺構の時期は出土遺物から堂床3期と判断した。

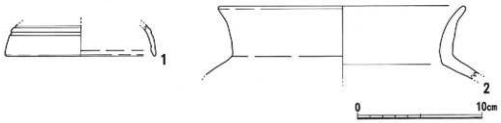
ＳＢ45計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	6.6m	3.8m	69.0m

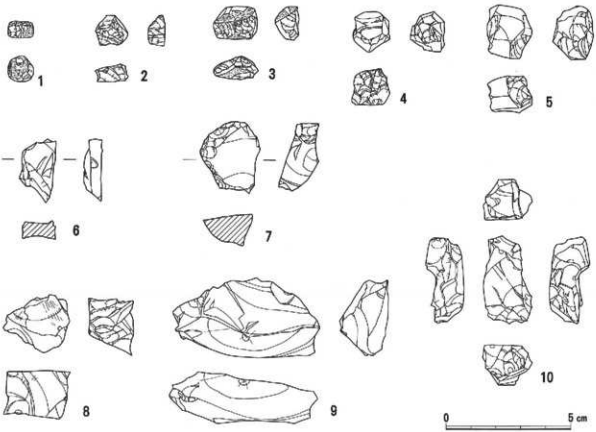
ＳＢ45出土遺物（第128図・第129図）

土器類は図示したもの以外に、須恵器と土師器の破片が出土している。

玉類は水晶製の未成品が12点、碧玉製の未成品が９点、瑪瑙製の未成品が２点、緑泥片岩製の未成品が92点出土している。工具類は石片が出土しているのみである。



第128図　ＳＢ45出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）

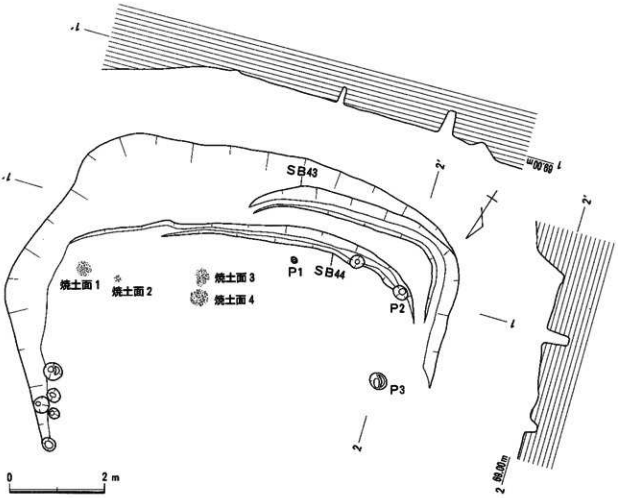


第129図　ＳＢ45出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～５は水晶、６～10は碧玉）

ＳＢ44（第130図）

６番目に古い加工段である。床面の規模は現状で幅5.6m、奥行3.2mで、深さが約40cm、床面の高さは標高69.2m前後を測る。壁体溝は南側の一部が残存していた。南側には４つの焼土面を確認

した。焼土面はいずれも床面が赤化したものと思われる。柱穴と思われるピットは確認できなかった。遺構の時期は出土遺物から堂床3期と思われる。



第130図　ＳＢ43・44実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＢ44計測表

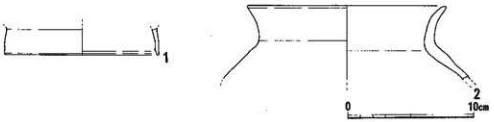
加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	5.6m	3.2m	69.2m

ＳＢ44出土遺物（第131図～第135図）

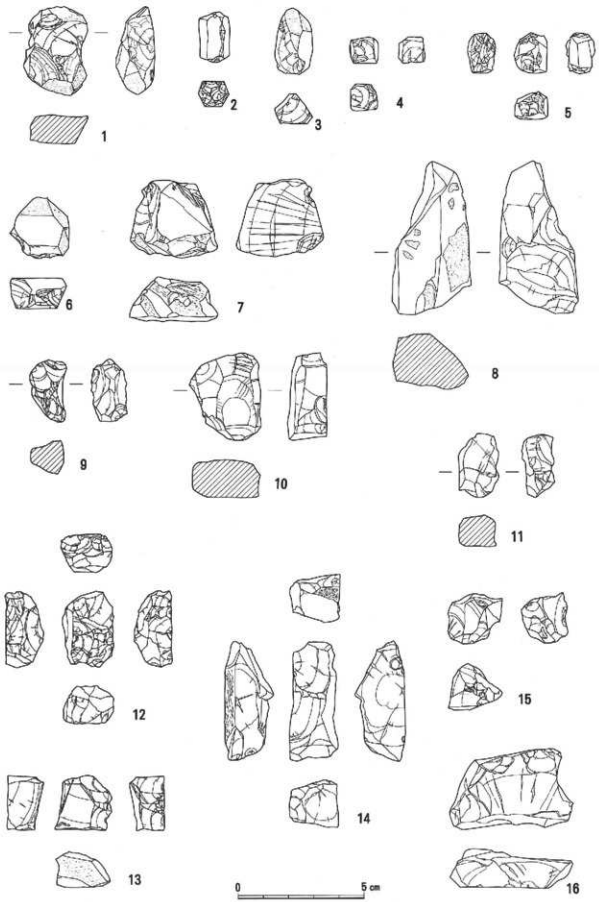
土器類は図示したもの以外に須恵器と土師器の破片が出土した。

玉類は水晶製の未成品が34点、碧玉製の未成品が44点、瑪瑙製の未成品が6点、緑泥片岩製の未成品が28点出土している。

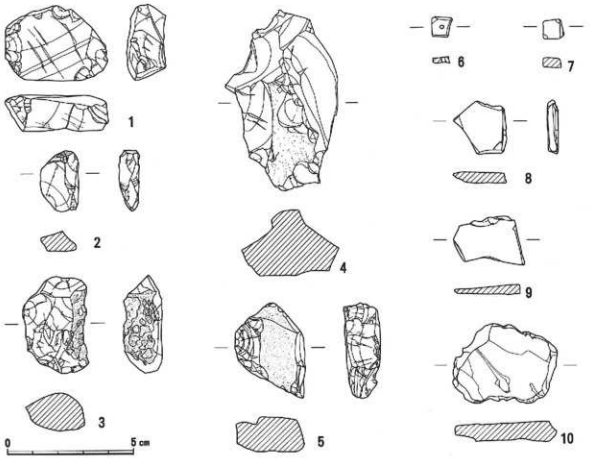
工具類は紡錘車2点と砥石片が出土している。



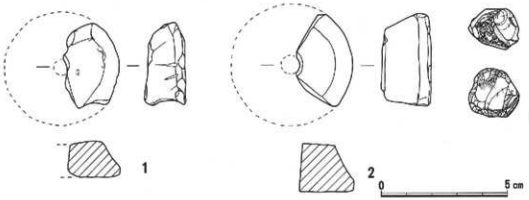
第131図　ＳＢ44出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1／3）



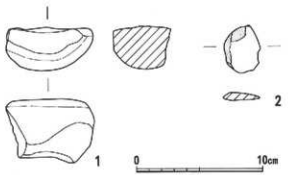
第132図　ＳＢ44出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～６は水晶、７・８は石英、９～16は碧玉）



第133図　ＳＢ44出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３、１・２は碧玉、３～５は瑪瑙、６～10は緑泥片岩）



第134図　ＳＢ44出土遺物実測図(4)（Ｓ＝２／３）



第135図　ＳＢ44出土遺物実測図(5)（Ｓ＝１／３）

ＳＢ43（第130図）

７つの加工段の中で最も新しい時期の加工段である。

床面の規模は現状で幅4.2ｍ、奥行3.4ｍで、深さが約40㎝、床面の高さは標高69.3ｍ前後を測る。ＳＢ43～ＳＢ49の中では最も小さく、また当遺跡の中でも規模のかなり小さな部類の加工段といえる。

壁体溝は南側と西側に残存している。西側のコーナーはほぼ直角に曲がっており、南側と西側の壁体溝は共に直線的に延びている。

柱穴と思われるピットを３つ確認することができた。１間１間の掘立柱建物が１棟あったものと思われる。柱穴と壁体溝の配置から当時の床面の規模を推定すると、奥行4.4ｍとなる。ほぼ正方形の加工段であったことがわかる。

ＳＢ43は、ＳＢ44～ＳＢ49までの加工段が山側に向かってほぼ平行に拡大しながら造られていくのに対して、面積が、先行するＳＢ44よりもかなり小さくなり、更に、長軸がやや西側に傾いて造られている点が、７つの一連の加工段と異なっていると言える。

遺構の時期は出土遺物から堂床４期と判断した。

ＳＢ43計測表

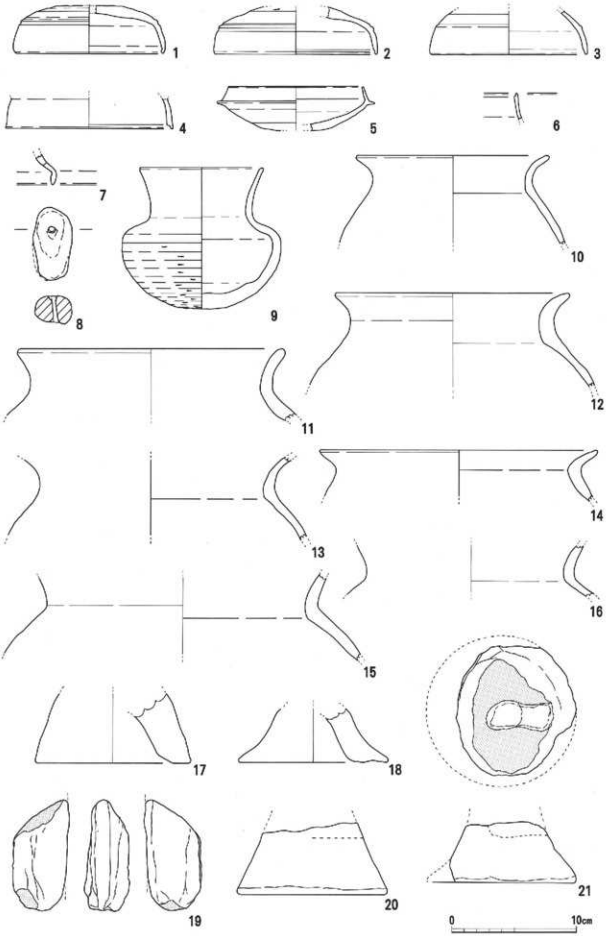
加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　高
		4.2m	3.4m	69.3m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		1間（2.3m）	1間（2.0m）	
柱穴（cm）	番　号	P１	P２	P３
	上面径	12×15	27×33	33×39
	深　さ	33	34	21
柱間距離（m）		P１－２	P２－３	
		2.3	2.0	

ＳＢ43出土遺物（第136図～第139図）

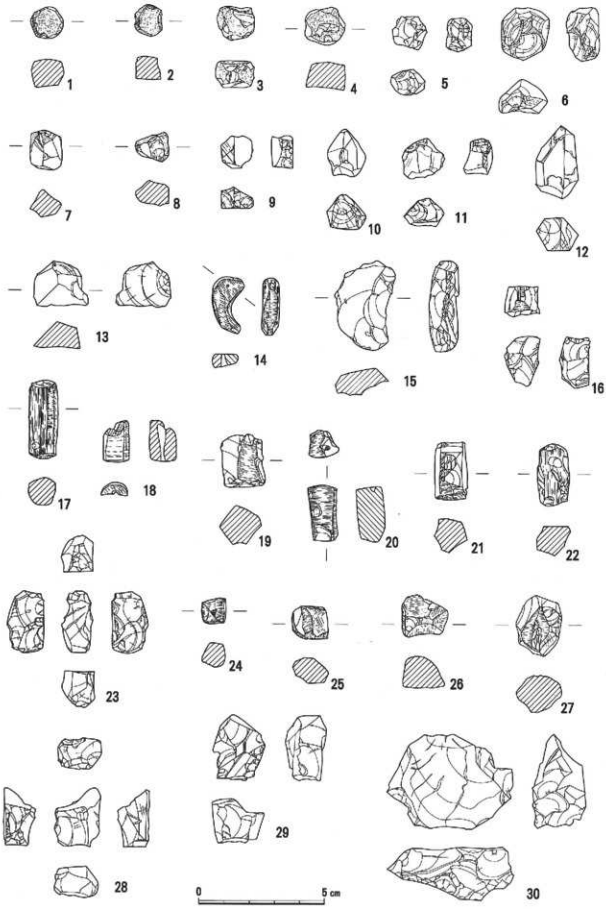
土器類は図示したもの以外には須恵器と土師器の破片が出土している。

玉類は水晶製の未成品が14点、碧玉製の未成品が35点、瑪瑙製の未成品が６点、緑泥片岩製の未成品が16点出土している。比較的碧玉製の未成品の割合が高くなっている。また、この遺構からは土製の垂飾造品と思われる遺物が（第136図－８）が１点ではあるが出土している。この他の土製の玉類模造品と思われる遺物は包含層から６点出土している。

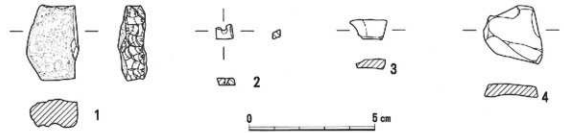
工具類は砥石類が４点ほど出土した。この内１点は棒状の内磨き砥石で、１点はやや幅の狭い板状内磨き砥石と筋砥石を兼ねたもので、１点は板状の砥石で、１点は円柱状の砥石である。この他に砥石片も多量に出土している。



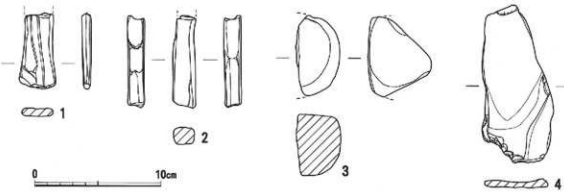
第136図　ＳＢ43出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第137図　ＳＢ43出土遺物実測図(2)（Ｓ＝２／３、１～13は水晶、14～30は碧玉）



第138図　ＳＢ43出土遺物実測図(3)（Ｓ＝２／３、１は瑪瑙、２～４は緑泥片岩）



第139図　ＳＢ43出土遺物実測図(4)（Ｓ＝１／３）

ＳＢ50・51（第140図、図版24）

東区東側の中段で検出した遺構で、ＳＢ23の北側に位置している。２つの加工段が切り合っている。谷側の床面は流失している。土層からＳＢ51が古く、ＳＢ50が新しいことがわかった。

以下、古い順に説明を行う。

ＳＢ51

谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅4.0ｍ、奥行2.5ｍで、深さが約15㎝、床面の高さは標高64.9ｍ前後を測る。

壁体溝は南東側に残存していた。東側のコーナーはほぼ直角に曲がっており、南東側の壁体溝は直線的に延びている。

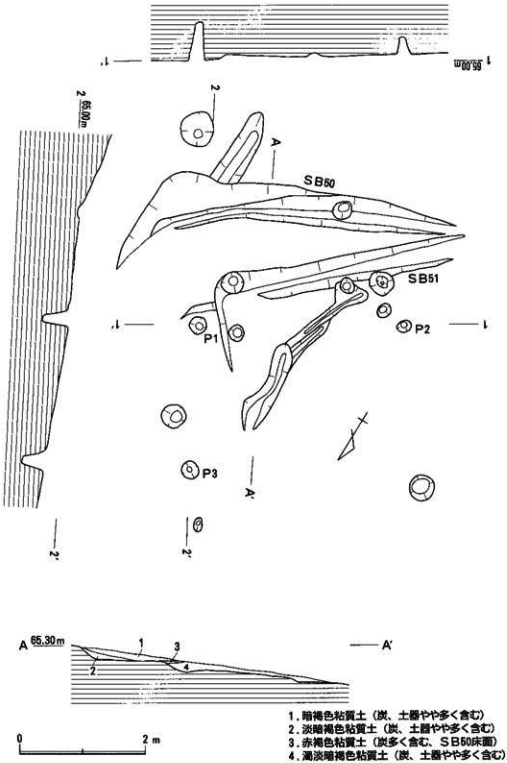
またこの加工段には壁体溝から北側に向かって延びる溝が１条ある。この溝は長さ約３ｍ、幅80㎝前後、深さ約10㎝を測る。性格は不明である。

柱穴と思われるピットは確認できなかった。

遺物は須恵器や土師器の小片がわずかに出土しただけである。遺構の時期は出土遺物からは古墳時代後期頃としかわからないが、ＳＢ50に先行することから２期以前ではあると思われる。

ＳＢ51計測表

加工段の規模	幅　行　き	奥　行　き	標　　高
	4.5m	4.3m	65.1m



第140図　ＳＢ50・51実測図（Ｓ＝1／60）

ＳＢ50

谷側の床面は流失している。床面の平面形は現状で幅4.5ｍ、奥行4.3ｍで、深さが約20㎝、床面の高さは標高65.1ｍ前後を測る。壁体溝は南東側に残存していた。この壁体溝は直線的に延びている。柱穴と思われるピットは３つ確認できた。柱穴の配置から１間１間の掘立柱建物が１棟ほど建てられていたものと判断した。柱穴と壁体溝の配置から当時の加工段の大きさを推定すると、幅5.3ｍ、奥行5.2ｍとなる。遺構の時期は出土遺物から堂床２期と判断した。

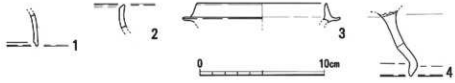
ＳＢ50計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高
		4.5m	4.3m	65.1m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		1間（3.2m）	1間（2.3m）	
柱穴（cm）	番　号	Ｐ1	Ｐ2	Ｐ3
	上面径	27×27	18×24	27×33
	深　さ	39	17	36
柱間距離（m）		Ｐ1－2	Ｐ1－3	
		2.9	2.3	

Ｂ50出土遺物

（第141図・第142図）

土器類は図示したもの以外に、須恵器と土師器の破片が出土した。床面からは玉類や工具類は出土しなかった。



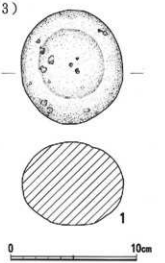
第141図　ＳＢ50出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1／3）

ＳＢ52（第143図）

東区西側の斜面上段で検出した加工段で、ＳＢ41の西側に位置している。遺構の大半は調査区外にあり、また谷側の床面は流失しているため規模は不明である。

床面の平面形は現状で幅4.0m、奥行3.0mで、深さが約20cm、床面の高さは標高69.7m前後を測る。南東側で確認できた壁体溝は直線的に延びている。また、柱穴と思われるピットは2つ確認できた。

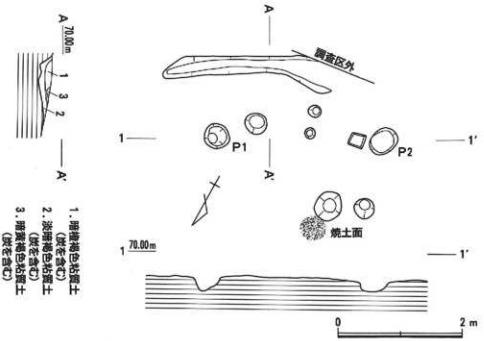
遺構の時期は出土遺物からは古墳時代後期頃としかわからない。



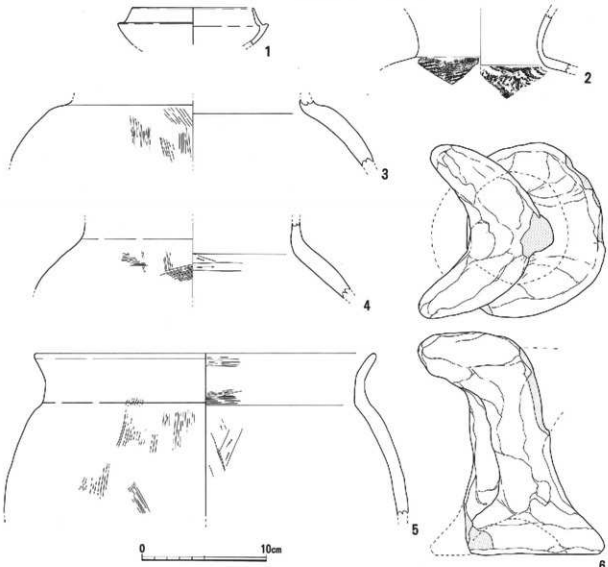
第142図　ＳＢ50出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1／3）

ＳＢ52計測表

加工段の規模		幅　行　き	奥　行　き	標　　高
		4.0m	3.0m	69.7m
建物の規模		梁　行　き	桁　行　き	
		1間（2.6m）		
柱穴（cm）	番　号	Ｐ1	Ｐ2	
	上面径	39×39	48×42	
	深　さ	21	15	
柱間距離（m）		Ｐ1－2		
		2.6		



第143図　ＳＢ52実測図（Ｓ＝１／60）



第144図　ＳＢ52出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＢ52出土遺物（第144図）

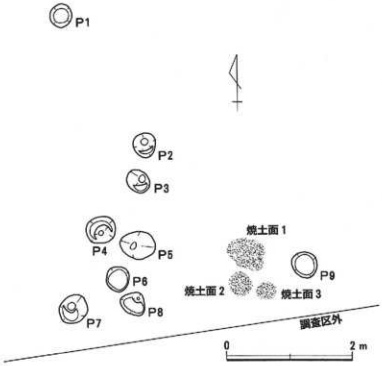
図示したもの以外に須恵器と土師器の破片が出土した。床面から玉類や工具類は出土しなかった。

東区東側上段ピット群（第145図）

ＳＢ43～ＳＢ49の南側に位置する平坦面で確認したピット群である。９つのピットと３つの焼土面で構成されている。全体的に削平を受けており、また南側は調査区外となっているためこのピット群の分布する正確な範囲は不明である。現状では掘立柱建物が存在したかは不明であるが、周辺にはＳＢ43～ＳＢ49やＳＢ15・16やＳＢ41があることから掘立柱建物が存在した可能性は高いと考える。

３つの焼土面は地山が熱を受けて硬化したもので、張り床がある。硬化したものではない。

遺構の時期は出土遺物から掘床２期と判断した。



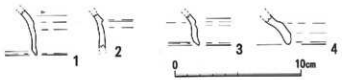
第145図　東区東側上段ピット群実測図（Ｓ＝１／60）

東区東側上段ピット群

Pit NO	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６
上面径（cm）	36×39	36×39	33×39	48×42	45×57	39×42
深　さ（cm）	16	66	55	26	30	12
Pit NO	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９			
上面径（cm）	45×51	36×42	39×45			
深　さ（cm）	23	19	6			

東区東側上段ピット群出土遺物（第146図）

図示した土器類の他には土師器や須恵器の破片が出土した。



第146図　東区東側上段ピット群出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

東区西側中下段ピット群（第147図）

ＳＢ37や31の北側、ＳＢ35の南側に存在するピット群である。52のピットを確認している。いくつかのグループに分けることもできるが、いずれも掘立柱建物を構成するピットであるとの確証を得られないこと、またピット同士の配置関係が把握しやすいことから、ここでは東区西側中下段ピッ

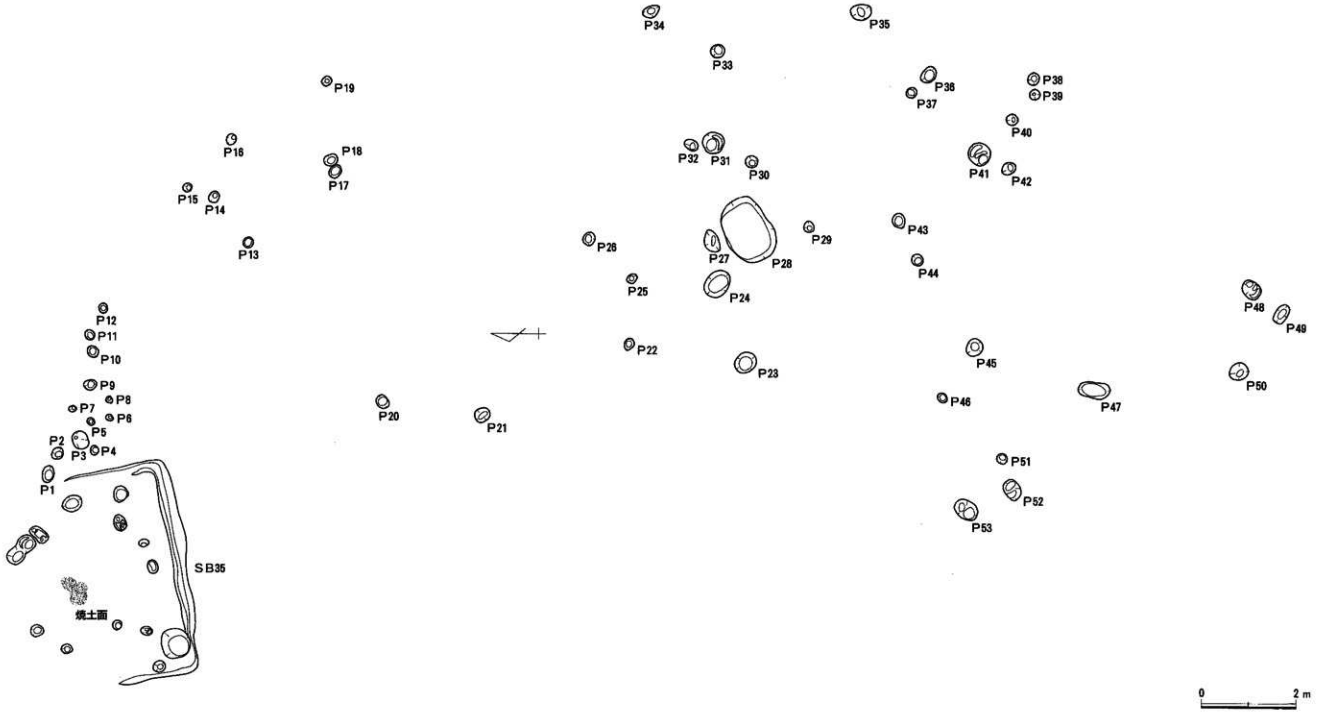
ト群として一括して扱うことにした。

このピット群の分布する斜面は全体的に大きく削平されいる。周辺に加工段が存在することを考えると、当遺跡で良く見られる加工段に掘立柱建物を構築する遺構の削平を免れた部分が残存している可能性が高いと思われる。ピットからは詳細な時期を判断する遺物が出土していない。

大半のピットから土師器や須恵器の破片が出土しているので、ピット群の全体的な時期は古墳時代後期頃と思われる。

東区西側中下段ピット群

Pit NO	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
上面径 (cm)	24×36	24×28	32×40	16×20	16×20	12×16
深 さ (cm)	19	19	21	18	11	15
Pit NO	P 7	P 8	P 9	P10	P11	P12
上面径 (cm)	12×16	12×16	20×28	24×24	20×24	20×24
深 さ (cm)	14	14	19	20	23	21
Pit NO	P13	P14	P15	P16	P17	P18
上面径 (cm)	24×24	20×28	20×20	20×24	24×32	24×32
深 さ (cm)	10	26	21	28	20	12
Pit NO	P19	P20	P21	P22	P23	P24
上面径 (cm)	16×24	24×32	32×36	20×24	40×48	48×60
深 さ (cm)	10	11	27	21	19	21
Pit NO	P25	P26	P27	P28	P29	P30
上面径 (cm)	20×24	28×28	24×54	100×140	20×24	24×28
深 さ (cm)	18	19	25	30	15	10
Pit NO	P31	P32	P33	P34	P35	P36
上面径 (cm)	44×48	20×32	28×28	24×40	36×44	28×36
深 さ (cm)	9	19	27	39	20	23
Pit NO	P37	P38	P39	P40	P41	P42
上面径 (cm)	20×36	24×24	20×20	24×24	48×52	24×32
深 さ (cm)	2	26	12	23	35	32
Pit NO	P43	P44	P45	P46	P47	P48
上面径 (cm)	28×36	24×28	36×40	20×24	32×68	36×44
深 さ (cm)	10	20	27	23	28	28
Pit NO	P49	P50	P51	P52	P53	
上面径 (cm)	24×44	36×40	24×24	32×48	40×56	
深 さ (cm)	23	13	30	32	25	

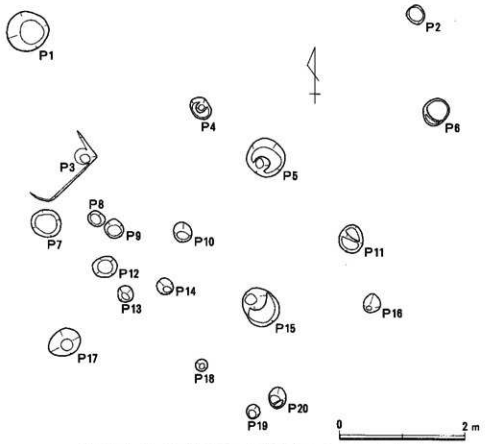


第147図　東区西側中下段ピット群実測図（S＝1／80）

東区中央中段ピット群（第148図）

ＳＢ31の南側に位置する平坦面で確認したピット群である。20のピットを確認することができた。全体的に削平を受けており出土遺物もわずかであった。現状では掘立柱建物が存在したかは不明であるがＳＢ31に近接することから或いは掘立柱建物が存在した可能性もある。

時期は須恵器の破片が出土していることから、古墳時代後期頃と思われる。



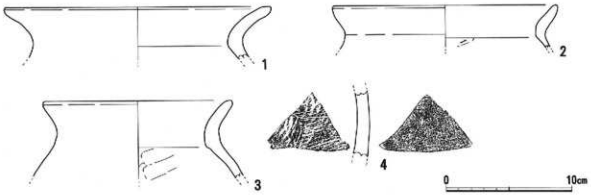
第148図　東区中央中段ピット群実測図（Ｓ＝１／60）

東区東側上段ピット群

Pit NO	P１	P２	P３	P４	P５	P６
上面径（cm）	66×63	30×30	24×27	30×39	57×60	39×45
深　さ（cm）	26	8	54	18	42	14
Pit NO	P７	P８	P９	P10	P11	P12
上面径（cm）	48×45	24×27	27×30	30×33	39×45	33×39
深　さ（cm）	23	16	23	28	21	29
Pit NO	P13	P14	P15	P16	P17	P18
上面径（cm）	24×27	24×27	54×63	27×30	42×54	18×18
深　さ（cm）	29	39	48	39	38	10
Pit NO	P19	P20				
上面径（cm）	21×24	27×33				
深　さ（cm）	23	32				

東区中央中段ピット群（第149図）

図示したもの以外には土器類の細片しか出土していない。



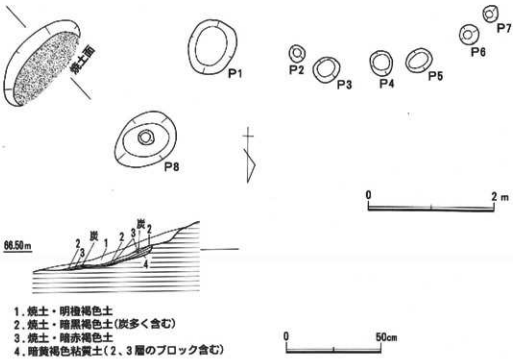
第149図　東区中央中段ピット群出土遺物実測図（S＝1／3）

東区西側上段ピット群（第150図）

ＳＢ52の西側に位置する急斜面で検出したピット群である。8つのピットと1つの土壙で構成されている。北側は直ぐに調査区外となるためこのピット群の分布する範囲は不明である。

検出した土壙の底はほぼ全面が焼土面となっている。この焼土面は張り床が熱を受けて硬化したものである。またこの焼土面は3層に分かれる。

遺構の時期は出土遺物から堂床2期と判断した。



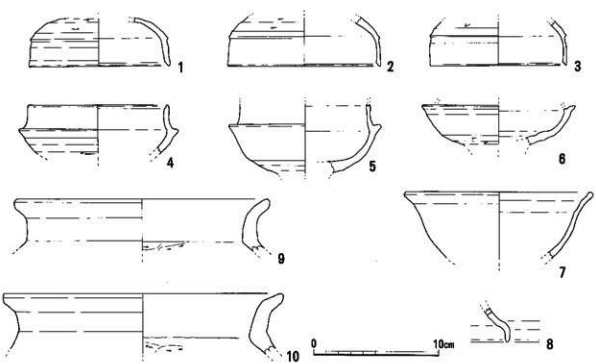
第150図　東区西側上段ピット群実測図（遺構はS＝1／60、土層はS＝1／20）

東区西側上段ピット群

Pit NO	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
上面径（cm）	72×87	24×27	39×42	36×42	36×45	30×33
深　さ（cm）	62	18	19	16	8	15
Pit NO	P 7	P 8				
上面径（cm）	27×27	78×108				
深　さ（cm）	26	68				

東区西側上段ピット群出土遺物（第151図）

図示した土器類の他には土師器や須恵器の破片が出土した。大半はＳＫ01から出土している。



第151図　ＳＫ01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

第３節　遺構に伴わない遺物（第152図～第165図）

ここでは表土から遺構検出面までの土層で出土したものを包含層出土遺物として紹介する。堂床遺跡の包含層からは上器類、玉類、工具類（砥石、ハンマー）が多量に出土している。また少量ではあるが鉄器類や黒曜石製、安山岩製の石器も出土している。上器類、玉類、工具類、鉄器類、石器類の順で説明を行う。

包含層出土土器類（第152～157図・第158図－１～３）

本報告書では先に述べたように地形から堂床遺跡を便宜的に東区と西区に分けている。土器類は西区、東区ともに多量に出土しているが、出土遺物の時期幅がやや異なる。東区では堂床１期から堂床６期までの遺物が出土しており、西区では堂床２期から堂床８期までの遺物が出土している。

また包含層出土土器類の中にはミニチュア土器（第137図－３～10）、韓半島製の可能性のある土器（第157図－１７）など遺構内出土遺物にはなかった遺物も出土している。

包含層出土玉類（第158図－４～１１）

包含層からは遺構内出上以上の量の玉類が出土した。ここでは遺構内出土玉類にはなかったものを中心に図示した。特に紫水晶製の切子玉未成品（第158図－８）は水晶・碧玉・瑪瑙・緑泥片岩以外の石材を使用している唯一の例である。この他、緑泥片岩製勾玉未成品（第158図－５）や碧玉製垂玉未成品（158図－10）は共に１点づつしか出土していない。

包含層出土工具類（砥石類）（第159図～第163図・第164図－１～４）

工具類の中で最も多く出土しているのは砥石である。砥石は様々な形態のものが出土し、石材も砂岩、石英片岩、紅廉片岩、珪化木、花崗岩、泥岩と様々なものが出土している。こられ多様な砥石ではあるが、大きくは玉用と鉄器用に分かれる。玉用砥石には外磨き用と勾玉の腹部を磨く内磨き用がある。内磨き用の砥石には棒状のもの（第160図－４、第164図－３など）と板状のもの（第163図－１・２・８、第164図－１・２・４など）に分かれる。板状のものは側面部分で内磨きを行い、平面部分で全体的な研磨を行っている。また内磨き用の砥石の石材には石英片岩と紅廉片岩が多く使用されている。外磨き用の砥石には平砥石（第159図－５など）、筋砥石（第161図－３など）、円柱状砥石（第159図－１～３など）、大窪砥石（第161図－４）がある。平砥石と円柱状砥石は砥面が平らなもので、筋砥石は砥面が溝状のもので、大窪砥石は半球状のものである。平砥石と円柱状砥石には花崗岩と砂岩が多く使用され、筋砥石には砂岩と石英片岩と紅廉片岩が多く、大窪砥石は花崗岩が使用されている。いずれの場合も砂岩は少なくとも粗砥であろう。

鉄器用砥石には筋砥石と平砥石の２種類がある。筋砥石は玉川筋砥石と同様に砥面が溝状のものであるが、玉用筋砥石より溝の幅が狭く深い（第163図－９など）。平砥石は形状が多角柱をなすものが多い（第163図－４・６など）。使用される石材は筋砥石には砂岩が多く、平砥石には珪化木が多い。また筋砥石の中には砥面が焼けているものもある（第161図－２）。

砥石は以上のように分類できるが、中には複数の用途を兼用する場合もある。玉用内磨砥石は玉用外磨砥石と兼用し（第163図－１など）、鉄器用筋砥石は鉄器用平砥石と兼用し（第107図－１な